

恋人支配行動からみた恋愛関係の理論的考察

片岡 祥

目 次

本研究の概要	p 1-p 2
序 論	p 3-p 4
第 I 部 先行研究のレビュー及び理論的枠組みと本論文の目的	p 5
第 1 章 恋人への攻撃行動に関するレビューと恋人支配行動の枠組みの構築	p 6
第 1 節 恋人への攻撃行動に関する国内外の研究動向	p 6-p 7
第 2 節 恋人への攻撃行動の定義	p 8-p 9
第 3 節 恋人への束縛	p 10-p 11
第 4 節 「恋人支配行動」の提案	p 12-p 15
第 5 節 恋人支配行動の研究領域	p 16-p 17
第 6 節 攻撃行動の生起に関する研究と不明な点	p 18-p 21
第 7 節 攻撃行動が恋愛関係に及ぼす影響に関する研究と不明な点	p 22-p 24
第 2 章 恋人支配行動を説明する理論的枠組み	p 25
第 1 節 恋愛関係の維持—愛着理論	p 25-p 26
第 2 節 ライバルの排除—配偶者維持（防衛）行動の理論	p 27-p 28
第 3 節 愛着と配偶者維持行動の観点をを用いる理由	p 29-p 30
第 3 章 本論文の目的	p 31
第 1 節 本論文の最終目的と検討事項	p 31-p 33
第 2 節 研究全体に共通する有意水準と効果量の扱い，倫理的配慮，基本的属性に関する調査内容	p 34
第 II 部 恋人支配行動の生起に関する検討	p 35
第 4 章 共依存と恋人分離不安による恋人支配行動の生起（研究 1）	p 36-p 37
第 1 節 恋人支配行動尺度の開発（研究 1-1）	p 38-p 42
第 2 節 恋人分離不安尺度の開発（研究 1-2）	p 43-p 47
第 3 節 共依存と恋人分離不安による媒介ルートの検討（研究 1-3）	p 48-p 57
第 4 節 研究 1 全体のまとめ	p 58
第 5 章 恋人への分離不安と愛情及び交際期間が恋人支配行動に及ぼす影響（研究 2）	p 59-p 70

第Ⅱ部全体のまとめ	p71-p72
第Ⅲ部 恋人支配行動が恋愛関係に及ぼす影響に関する検討	p73
第6章 2つの恋人支配行動が恋愛関係に及ぼす影響（研究3）	p74-p75
第1節 恋人支配行動尺度の強度に関する検討（研究3-1）	p76-p81
第2節 強度が強い恋人支配行動が恋愛関係に及ぼす影響（研究3-2）	p82-p87
第3節 研究3全体のまとめ	p88
第7章 恋人への弱い束縛と強い束縛が恋愛関係に及ぼす影響（研究4）	p89
第1節 弱い束縛と強い束縛を測定する尺度の開発（研究4-1）	p90-p93
第2節 弱い束縛と強い束縛が恋愛関係に及ぼす影響（研究4-2）	p94-p103
第3節 研究4全体のまとめ	p104
第Ⅲ部 全体のまとめ	p105
第Ⅳ部 総合考察	p106
第8章 研究結果のまとめと恋人支配行動に関する理論モデルの構築	p107
第1節 研究結果のまとめ	p107-p108
第2節 恋人支配行動に関する理論モデルの構築	p109-p111
第3節 学術的な意義と社会的な意義	p112-p114
第4節 今後の課題と展望	p115-p116
引用文献	p117-p126
付録	p127-p128
謝辞	p129-p130

本研究の概要

恋愛関係内で生じる攻撃行動のメカニズムを解明することは、青少年の暴力を伴う恋愛関係に対する予防教育や介入方法を考案する上で重要な研究テーマである。本論文は攻撃行動における研究領域の中心的な2つの命題（Rusbult & Martz, 1995）である「恋人に不利益が生じるような攻撃や支配はなぜ起こるのか」、また「そのような行動の被行為者はなぜ関係の終結を決断しない場合があるのか」について検討することで、恋愛関係における攻撃行動の生起と関係性に及ぼす影響に関する理論モデルを構築し、この領域に貢献できる知見を得ることを目的として行った。

本論文は全部でIV部8章から構成された。第I部第1章では恋愛関係内で生じる攻撃行動に関する国内外の研究動向についてレビューを行った。その後、近年取り上げられることが多くなってきた束縛や、攻撃行動の強度の問題に触れ、これらを捉えるために既存の攻撃行動の研究枠組みを整理・拡張した恋人支配行動という概念的な枠組みの設定を行った。

第I部第2章では、恋人支配行動を説明する理論的枠組みとして愛着理論と配偶者維持行動の理論を取り上げ、その有用性について議論を行った。そして、これらの議論を踏まえ、本論文では恋人支配行動は二者関係を維持し、第三者を排除するために生じる関係維持行動の1つと想定できること、恋愛関係内で問題となる場合は不適切で過剰な場合や強いダメージを伴う場合であることについて論じた。

第I部第3章では本論文の目的とそのための研究工程を示した。本論文の目的は恋人支配行動の生起及び恋人支配行動が恋愛関係に及ぼす影響を検討することであり、そのための研究の道筋を図示した。

第II部第4章及び第5章では恋人支配行動の誘因及び生起条件の特定を目的として2つの実証的な研究（研究1と研究2）を行った。研究1では恋人支配行動尺度と恋人分離不安尺度を開発し、その後恋人支配行動の生起について共依存と恋人分離不安から検討を行った。研究2では恋人への分離不安と愛情及び交際期間が恋人支配行動に及ぼす影響について検討した。

第III部第6章及び第7章では恋人支配行動が恋愛関係に及ぼす影響を明らかにすることを目的として2つの実証的な研究を行った（研究3及び研究4）。研究3では恋人支配行動尺度を構成する項目群の強度を確認し、その後行為経験及び被行為経験と恋

愛の充実感との関連を検討した。研究4では弱い束縛と強い束縛を測定する尺度の開発を行い、その後恋人への弱い束縛と強い束縛が恋愛関係に及ぼす影響について検討した。

第IV部第8章では第1章から第7章までに行った議論と研究知見から総合考察を行い、恋人支配行動の生起及び恋愛関係に及ぼす影響に関するモデル構築を行った。すなわち、個人の特性変数、恋人との関係変数、恋人との関係構築時間が相互に関与することで恋人支配行動が生起し、恋人支配行動を構成する暴力的支配行動と束縛的支配行動は強度が強い場合は恋愛関係に悪影響を及ぼすものの、強度が弱い束縛的支配行動については関係維持の妨げとならないという理論モデルが構築された。

序 論

青年期は親から友人,そして恋人へと親密な対象が移行していく時期である(Hazan & Zeifman, 1994; 片岡・園田, 2010)。恋愛は多くの若者にとって興味や関心を抱く事象であり,若者にヒットするドラマや流行歌は恋愛を題材にしたものが多いように思われる。恋愛に関する心理学的研究は欧米では1970年代から始まり,日本においても1980年代から徐々に研究が増えていった。2000年代に突入し,社会心理学者と青年心理学者を中心に,認知心理学者や臨床心理学者といった様々な領域の研究者によって恋愛研究が行なわれるようになってきた。

1990年に報告された恋愛研究のレビュー(松井, 1990)によれば,日本の恋愛研究は「恋愛の進行と崩壊」や「恋愛感情と意識」のような社会心理学分野の研究と「恋愛関係の発達」や「性行動の発達」のような青年心理学分野の研究に大別可能であった。その後,恋愛研究は細分化していくこととなっていく。2000年代の研究をレビューした報告(立脇・松井, 2014)によると,「恋愛観や恋愛イメージ」,「告白や失恋」,「恋愛関係に対する第三者からの影響」,「恋愛関係とアイデンティティとの関連」に関する研究など,1990年代にはあまり扱われてこなかったテーマが取り上げられていくこととなり,恋愛研究の幅の広がりが見られることが示されている。

そして,近年特に注目を集めているのが恋人間で生じる身体的な暴力(たたく,けるなど)や精神的な暴力(馬鹿にする,悪口をいうなど)からなる攻撃行動に関する研究である。この領域は1980年代に海外で恋人への攻撃行動に関する萌芽的な研究(Makepeace, 1981)が始まり,1990年代に入ると研究数が飛躍的に増えていった。2000年代に入り,日本においても内閣府による恋人間の暴力に関する実態調査(内閣府, 2000)が行われたのをきっかけとして,恋人間で生じる攻撃行動が社会問題として広く認識されることとなり,恋人への攻撃行動に関する実態調査や学術的な研究が増加の一途を辿っている。

しかしながら,最近の恋愛研究のレビュー(高坂, 2016; 立脇・松井, 2014)によると,恋人への攻撃行動に関する研究発表や論文の数自体は多くなってきているものの,学術的な雑誌に掲載されたものはあまり多くはない。また,報告された研究についても現状では攻撃行動の実態把握に留まる研究が多く,理論的な枠組みを元にした

研究はあまり見受けられないといえる。従って、恋人への攻撃行動に関する研究領域は理論的なモデル構築の創成期にあるといえる。このような現状を踏まえ、本論文では実証的な研究から、攻撃行動の生起と関係性の変容を予測するためのモデル構築を目指していく。その際に、Rusbult & Martz (1995)によるこの領域の解決されていない2つの命題に沿って検討することとした。1つ目の命題は「恋人に不利益が生じるような攻撃や支配はなぜ起こるのか」であり、この命題の解決に貢献するために本論文では恋人への攻撃行動の誘因と生起条件を検討する。2つ目の命題である「攻撃行動の被行為者はなぜ関係の終結を決断しない場合があるのか」については、攻撃行動が恋愛関係に及ぼす影響について検討することで、この命題の解決に貢献するための知見を得ることを目指す。そして、それぞれの知見を統合することで、攻撃行動に関する生起と恋愛関係に及ぼす影響を予測する理論モデルを構築することが本論文の最終的な目標であった。

なお、本論文全体を通して頻繁に用いることになる「恋愛」、「恋愛関係」、「恋人」という3つの用語について予め定義を行っておく。高坂(2016)は2004年から2013年間に日本で刊行された31本の恋愛に関する学術論文のうち、恋人という用語について明確な定義を行っているものはわずか2本(高坂, 2011, 2013)しか存在しないことを報告している。そして、彼は恋愛や性に関わる社会的状況や世間一般の捉え方、あるいは規範が時代的に変化していくため、研究の立場や研究で捉えようとする範囲を明らかにする上でも、概念定義の必要性を指摘している。そこで本論文で中心的な議論と研究の対象となる「恋人」及び「恋愛」と「恋愛関係」という用語の定義を初めに行っておくこととした。

「恋愛」は、広辞苑(2008)と大辞林(2006)を参考に「特定の他者に対して特別な感情を抱き、慕うこと」と定義する。「恋愛関係」は上記の2つの辞書と高坂(2016)を元に「双方が交際を合意した特別な感情を抱く親密な二者関係」と定義した。「恋人」は、高坂(2011, 2013)を参考に「恋愛関係にある人物、ただし片思い、芸能人や有名人、アニメやゲームのキャラクターなどを含めない、実際に存在し、接触・交流できる人物」と定義した。

第 I 部 先行研究のレビュー及び理論的枠組みと本論文の目的

第 I 部では、恋人への攻撃行動に関する国内外の研究動向を概観した後に、本論文で扱う攻撃行動について議論し、「恋人支配行動」という枠組みを提案する。そして、この領域における知見の整理を行い、本論文の目的とそのために行う研究について論じていく。

第1章 恋人への攻撃行動に関するレビューと恋人支配行動の枠組みの構築

第1章では、恋人への攻撃行動に関する国内外の研究動向を概観し、本論文における攻撃行動の枠組みについて議論を行っていく。

第1節 恋人への攻撃行動に関する国内外の研究動向

近年、恋人に対する攻撃行動は社会問題の1つとして取り上げられることが多くなってきた。心理学的な研究やレビューは Makepeace (1981) が恋人間の暴力の実態を調査したのを皮切りに、恋愛関係を扱う研究者の関心の的となり、急速に研究が増加していった (Archer, 2000; Lewis & Fremouw, 2001; Shorey, Cornelius, & Bell, 2008; Straus, 2008)。この流れをうけ、2000年代に入り本邦でも内閣府 (2000) が調査を行い、それを受けて県や市の女性センターや関係機関による様々な実態調査 (ちば県民共生センター, 2011; 京都市男女共同参画推進協会, 2012; 三重県男女平等参画センター, 2013; 名古屋市男女平等参画推進センター, 2009; 内閣府, 2003, 2006, 2009, 2012, 2015, 2018; 日本 DV 防止・情報センター, 2008; さいたま市, 2010; 東京都生活文化局, 2013; 宇都宮市, 2010; 山形県, 2013; 横浜市市民活力推進局男女共同参画推進課, 2008) や心理学的な研究やレビュー (赤澤, 2015, 2016; 赤澤・竹内, 2015; 上野, 2014) が増えてきている。

恋人から攻撃行動を受けることは一般的な自己効力感や精神的な健康の低下 (Jezl, Molidor, & Wright, 1996; 榊原, 2011; White & Koss, 1991) などの悪影響を引き起こすことがわかっている。攻撃行動の被行為者は体調不良や不眠などの身体症状に襲われる場合や、対人関係に対する恐怖を抱いてしまうことにつながり、結果として様々な人間関係が疎遠になってしまう場合がある (京都市男女共同参画推進協会, 2012)。恋人からの攻撃行動は被行為者にとって日常生活に大きな支障をきたす原因になる可能性がある。

加えて、恋人からの攻撃行動が行き過ぎた結果、最悪の場合は殺人事件へつながる場合があることも指摘されている (Shackelford & Mouzos, 2005)。本邦においても2010年に宮城県石巻市や、2013年に山形県天童市で恋人間の殺人事件が起き、ニュースなどで大々的に取り上げられた。恋人間の攻撃行動は個人の精神衛生や日常生活

に支障を来たすのみならず、取り返しがつかない犯罪事件の遠因になる場合もある。

また、恋人間の攻撃行動は配偶者関係となった後も継続して生じることが報告されている (O'leary, Barling, Arias, Rosenbaum, Malone, & Tyree, 1989)。特に本邦の場合、恋愛から結婚へと至る場合が 2015 年には 87.7%と非常に高いことから (国立社会保障・人口問題研究所, 2017)、恋人間の攻撃行動は一過性の問題ではなく、場合によっては生涯に渡る精神的衛生の悪化や重篤な犯罪のリスクとなっていく危険性を孕んでいる。

さらに、攻撃行動はそれが生じている夫婦間で生まれた子供にも様々な悪影響を及ぼすことが指摘されている。代表的なものとして、幼少期における夫婦間の攻撃行動の目撃経験は青年期に恋人への攻撃行動を増加させることが示されている (Malik, Sorenson, & Aneshensel, 1997)。夫婦間の攻撃行動は子供にモデリングされ、青年期の恋愛関係の中で恋人への攻撃行動として再現されていくこととなり、攻撃行動の世代間伝達が起きてしまうことになる可能性がある。

このように、恋人間で生じる攻撃行動は一時点における個人の精神的健康の低下や犯罪へつながる危険因子となるだけでなく、結婚後も危険因子として残り続け、その子供が成長した後も攻撃行動を行ってしまうような学習をさせてしまう、というように広範囲に渡り様々な形で問題となっていく。このような現状を受け、恋人間で生じる攻撃行動の予防や防止、あるいは介入に関するプログラムの構築など応用的な視点に立つ研究だけでなく、攻撃行動の生起要因の特定や、攻撃行動が生起しているにも関わらず破綻しない恋愛関係のメカニズムなど応用的な領域に貢献することを意図した基礎的な視点に立つ研究が増加している。

第2節から第4節にかけて、恋人への攻撃行動に関する本論文の定義及び束縛という新たに研究として取り上げるべき行動があることについて議論を行っていき、これらを捉えるために恋人支配行動という新たな枠組みの提案を行う。そして、第5節から第7節にかけて、恋人への攻撃行動の領域で明らかになっていることと解決されていない問題について整理していくこととする。

第2節 恋人への攻撃行動の定義

本論文で議論する恋人への攻撃行動であるが、研究者によって様々な捉え方があり、研究の創成期から現在に至るまで統一的な定義が存在しないという歴史的な経緯がある。そこで、これまでに提案された恋人への攻撃行動に関する定義と近年行われた調査内容を参考に、本論文における恋人への攻撃行動に関する定義を定めることとする。

恋人への攻撃行動の研究創成期に提案された定義としては「意図的に相手に痛みを与えたり傷つけたりするために身体的な暴力を行ったり、行うと脅すこと」(Sugarman & Hotaling, 1989)がある。このことより、この時期の恋人への攻撃行動の研究は主に身体的な暴力を中心に上げられる場合が多かったことがわかる。また、実際の暴力の行使のみならず、行使の可能性を匂わせることも問題視されていることも読み取れる。その後、多くの研究が行われていく中で恋人への攻撃行動に対する捉え方が徐々に拡張していくこととなる。例えば、恋人への攻撃行動の測定で用いられる尺度として世界的に有名なCTS2 (Straus, Hamby, Boney-McCoy, & Sugarman, 1996)では身体的な攻撃に加えて言語を用いた攻撃も測定の対象としている。2000年代にはいり、恋人への攻撃行動は「恋愛関係の文脈の中で恋人に対して身体的、性的、言語的な攻撃を行うこと及びその可能性を示唆すること」(Anderson & Danis, 2007)というように、身体的・言語的な攻撃に性的な側面を加えたものが定義として提案されている。

Sugarman & Hotaling (1989)や Anderson & Danis (2007)の定義は主に恋人への攻撃に対する行動的な側面を取り上げたものといえるが、そのような攻撃行動が被行為者に及ぼす心理的な影響に着目した論述も数多く見られる。その中でも、恋人からの身体的・性的・言語的な攻撃は、被行為者にとって日常生活に様々な支障をきたし、被行為者の心に大きな衝撃や痛手を与えることが繰り返し指摘されてきている (Jezl, Molidor, & Wright, 1996; 京都市男女共同参画推進協会, 2012; 榊原, 2011; White & Koss, 1991)。

これらの研究史を踏まえ、本論文における恋人への攻撃行動の定義は「恋人に対して意図的に痛みを与えたり傷つけたりするために身体的、性的、言語的な攻撃を行うこと及びその可能性を示唆することで心理的に強いダメージを与えることが予見される行動」とする。

恋人への攻撃行動の具体的な例としては、最新の内閣府の実態調査(内閣府, 2018)

第1章 恋人への攻撃行動に関するレビューと恋人支配行動の枠組みの構築

で用いられた項目に準拠することとする。項目内容は「なぐる、ける、物を投げつける、突き飛ばす、人格を否定するような暴言を浴びせる、自分もしくは自分の家族に危害が加えられるのではないかと恐怖を感じるような脅迫を行う、嫌がっているのに性的な行為を強要する、見たくないポルノ映像等を見せる、避妊に協力しない」である。

第3節 恋人への束縛

海外における恋人への攻撃行動に関する研究は直接的に強い心理的ダメージを与える行動を取り上げたものが主流であるが、近年の日本では必ずしも直接的な危害を加えるわけではない、間接的な行動である束縛の項目を加えたものが増えてきている(赤澤・竹内, 2015; 小畑, 2013; 内閣府, 2018; 西村・森田, 2013; 越智・長沼・甲斐, 2014, 鈴木, 2017)。束縛という言葉自体は広く一般的に定着した日常的に用いられる用語であると思われるが、心理学的な研究は著者の知る限りあまり多くはなく、西村・森田(2013)の研究以外では、上述した攻撃行動の研究報告の中で測定項目の一部に束縛と思われるものが見て取れる場合や、恋愛関係を測定する目的で開発された尺度の因子や項目に束縛と思われるものが見て取れる程度である(金政, 2002; 高坂, 2010)。

束縛に関する定義を行っている研究自体がほとんどないため、本論文では先行研究(京都市男女共同参画推進協会, 2012; 内閣府, 2018; 西村・森田, 2013; 越智他, 2014; 横浜市市民活力推進局男女共同参画推進課, 2008)で用いられた調査項目や言説を参考に、恋愛内で生じる束縛を「恋人の日常生活を監視することや、様々な制限事項や禁止事項を恋人に課すこと、恋人のふるまいや交友関係に不満を表明したり介入したりする行為の総称」と定義する。具体的な行動としては、「交友関係や行き先を細かく監視する」、「電話やメールを(持ち主の合意の有無に関わらず)チェックし、場合によっては他の連絡先を消去するように強制する」、「同性や異性との交流を制限・禁止する」、「日常生活の中で様々なルールを作り、恋人に課す」という行動を恋人に行うことを指すものとする(行動例は束縛の定義を行う際に用いた先行研究より作成)。

近年、本邦で束縛が注目を集めている背景として、若年層におけるスマートフォンと無料通話アプリ(LINE やカカオトークなど)の爆発的な普及及びソーシャルメディア(twitter や instagram など)の使用頻度の急激な増加があると考えられる。これらの社会的な通信手段の変化により、一昔前に比べて簡単に恋人と連絡が取れるようになった。そのため、恋人の交友関係や行き先を監視しやすい環境が生まれたといえる。また、簡単に他者をつながることもできるようになったことから、恋人が自分以外の他者とどのようなやり取りをしているかを確認せずにはいられない場合が増えたといえるかもしれない。海外の研究動向は現状では定かではないが、少なくとも本邦では束縛に関する心理学的な研究が始まりつつあるといえる。

第1章 恋人への攻撃行動に関するレビューと恋人支配行動の枠組みの構築

束縛は身体的・言語的・性的な攻撃行動と異なり、直接的な危害を加えるものではない。しかしながら、束縛は恋人の人格を無視した行動であることから、心理的なダメージを与える可能性があるものといえることができるだろう。

第4節 「恋人支配行動」の提案

恋人への攻撃行動に関する研究史を振り返ると、攻撃行動は身体的暴力、言語的暴力、性的暴力がある。加えて、近年本邦では束縛も問題ある行動の1つとして取り上げられるようになってきている。ここでは、本論文における攻撃行動と束縛に対する立場を明確にし、新たな枠組みの提案を行う。

まず、恋人への束縛を取り上げた研究が始まったのはごく最近のことというのも相まって、心理学的な研究は攻撃行動と束縛のどちらか片方のみを取り上げた研究が多い。恋人への攻撃行動と束縛は研究上どちらか一方ではなく、どちらも取り上げるべきものといえる。その理由として、攻撃行動と束縛には正の影響関係がみられることが想定されるため（相羽・荒井, 2014; Bookwala, Frieze, Smith & Ryan, 1992）、互いの影響力を統制しなければ正確な知見が得られない可能性があるためである。

また、攻撃行動の測定項目の中に束縛の項目が混在した研究もみられるようになっており、例えば相馬（2007）では言語的暴力と束縛を合わせて間接的暴力として検討している。ただし、従来扱われてきた3つの攻撃行動と束縛を一括りにして扱ってよいのかどうかには疑問が残る。大学生で身体的・言語的・性的な攻撃行動が問題あると認識している者は約65%~84%であるのに対して、束縛は約26%であることが報告されている（横浜市市民活力推進局男女共同参画推進課, 2008）。すなわち、3つの攻撃と束縛は問題ある行動としての認識に大きな違いがみられるのである。おそらくは攻撃行動は恋人に直接的に危害を加える行動であるのに対して、束縛はそうではないためであると考えられる。赤澤・武内（2015）や鈴木（2007）も指摘するように、束縛と他の攻撃行動で心理的な機序が異なる可能性があるため、束縛と他の攻撃行動は分類して検討する必要があるだろう。

さらに、近年の研究の増加に伴い攻撃行動と束縛が被行為者に及ぼす影響について相反する研究報告（例えば、被行為者の恋愛関係の認知を悪化させるように働く場合を示すもの（高坂, 2009）と、そうでないもの（京都市男女共同参画推進協会, 2012; 内閣府, 2012）が提出されるようになってきている。しかし、これらの知見に整合性を与える理論的な枠組みについて詳細な議論を行った研究はあまりみられないことから様々な知見が散見している現状がある。

その中で、赤澤・武内（2015）は恋人から攻撃行動と束縛を受けた時に生じる被行為者の心理的ダメージの程度に着目する必要性を指摘している。この観点に立てば、

行動の種類によって被行為者の心理的ダメージの大きさは異なり、個人や恋愛関係に及ぼす影響も同一ではないと考えられるため、攻撃行動と束縛に関する知見の矛盾は心理的ダメージの程度の違いにあるといえることができる。項目の心理的ダメージの程度について検討を加えたものはあまりみられないが、測定に用いる攻撃行動と束縛の項目は、その心理的ダメージの程度を検討した上で研究を行う必要があるといえる。

このように、研究の進展に伴い攻撃行動の領域に束縛を新たに位置づけることや心理的ダメージの程度を想定することが必要になってきた。そこで、本論文では恋人への攻撃行動と束縛を包括した枠組みを新たに構築することとする。新たに構築する枠組みは、恋人への攻撃行動と束縛を分離して扱うこととする。そして、それぞれの行動が被行為者に心理的なダメージを与えることを想定する。その際に、心理的ダメージの度合いを表すためにそれぞれの行動には強度を設定する。ここでいう行動の強度とは、「被行為者が攻撃行動と束縛を受けた時に生じる心理的なダメージの大きさの程度」である。このような整理を行うことで、この領域の様々な問題を一次元に捉えることが可能になるというメリットがある。

また、攻撃行動と束縛の共通点は、意図的であるにしろ無意識であるにしろ、恋人に対する心理的な支配を強めると考えられる。Shory et al. (2008) は、恋人への攻撃や束縛に該当する行動は行為者から被行為者に対する支配 (control) の側面があると指摘している。ここでの支配は、個人の人格や自由意思を無視して自分の意のままに行動させることをさす。実態調査によれば攻撃行動や束縛の被行為者は恋人を怒らせないように振舞うようになった者が一定数いることが報告されていることや (京都市男女共同参画推進協会, 2012)、被行為者は行為者からの報復を避けるために別れるという選択肢を取ることができない場合があることが明らかになっている (内閣府, 2018)。これらのことより、攻撃行動や束縛を受けた被行為者は行為者を恐れ、行為者の言いなりになってしまうことが容易に想像できる。

これらのことを踏まえ、本論文では攻撃行動及び束縛を「恋人支配行動」と命名し、概念的な位置づけを整理した枠組みを構築することとした (Figure1)。恋人支配行動は「身体的・言語的・性的な攻撃行動及び束縛からなり、恋人に対して様々な攻撃行動を行うことによって、あるいは恋人の日常生活を監視・制限したり日常生活に干渉したりすることによって、意図的あるいは無自覚に恋人を支配しようとする試み」と定義する。これ以降では攻撃行動と束縛を表す恋人支配行動という用語を用いて議論

していく。

ところで、攻撃行動と束縛は恋人間の一方向的な暴力を指すデート DV (dating violence) という用語を用いて検討が行われる場合もある。恋人支配行動の枠組みとデート DV との違いは大きく以下の点にある。すなわち、恋人支配行動の枠組みは恋人支配行動を構成する要素として攻撃行動と束縛を捉え、被行為者の心理的ダメージに着目した強度の観点を有するものであるのに対して、デート DV はそのような観点を有していない点である。デート DV の観点からは該当する行動の因子の中でも影響関係が異なる場合が散見されており、デート DV の枠組みからの検討には限界がある。その点、恋人支配行動の枠組みはデート DV の枠組みを拡張したものとも考えられ、より柔軟な研究アプローチを可能にすると考えられる。

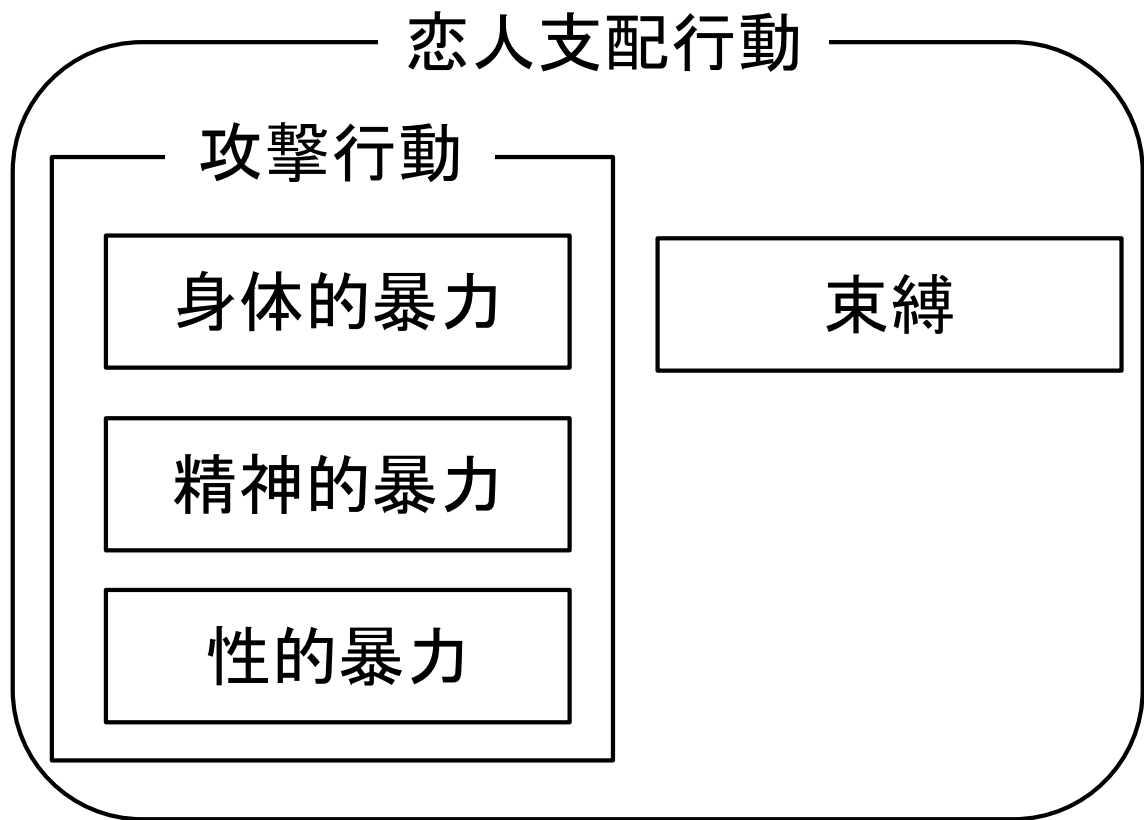


Figure 1 「恋人支配行動」の概念図

第5節 恋人支配行動の研究領域

現在、恋人支配行動の研究は Rusbult & Martz (1995) が指摘する「恋人が不利益を生じるような攻撃や支配はなぜ起こるのか」、また「そのような行動の被行為者はなぜ関係の終結を決断しないのか」という2つの命題に沿って大別することができるといえる。

1つは恋人支配行動の生起に関する領域であり、もう1つは恋人支配行動が恋愛関係に及ぼす影響に関する領域である (Figure 2)。恋人支配行動の生起に関する研究領域の最終目的は恋人支配行動の誘因や生起条件の特定を通じて、予防や防止に活かすための枠組みを作り上げていくことにあるといえる。恋人支配行動が恋愛関係に及ぼす影響に関する領域の最終目的は、恋人支配行動が生じている恋愛関係が終焉を迎える場合とそうでない場合の条件を特定にすることによって、なぜ恋人支配行動が生じていても恋愛関係が破綻せずに維持されるのかを読み解く枠組みを構築していくことにあるといえる。

それぞれの領域について、得られている知見と明らかとなっていない点について整理を行っていく。

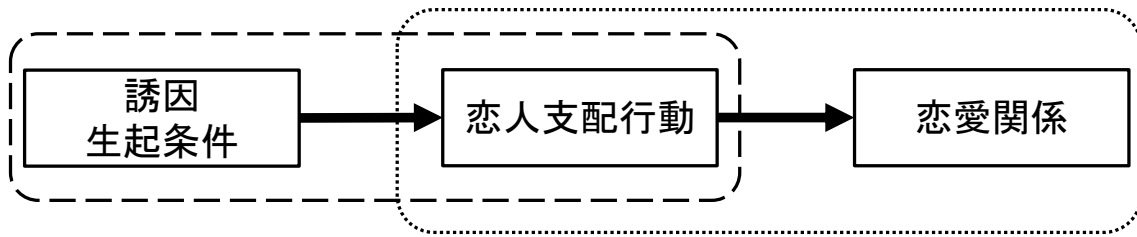


Figure 2 恋人支配行動の研究領域

note : 大破線は恋人支配行動の生起に関する研究領域, 小破線は恋人支配行動が恋愛関係に及ぼす影響に関する研究領域をさす。

第6節 攻撃行動の生起に関する研究と不明な点

攻撃行動の生起に関する研究は、主に個人の心理的な特性と攻撃行動との関連を検討したものが多く。例えば、低い自尊感情 (Capaldi, & Crosby, 1997; Foshee, Bauman, Ennett, Linder, Benefield, & Suchindran, 2004; Marshall & Rose, 1990) や強い自己愛 (Bushman & Baumeister, 2002; 松並・青野・赤澤・井ノ崎・上野, 2012), 伝統的な性役割を支持する態度 (深澤・西田・浦, 2003; Lichter & McCloskey, 2004; 小泉・吉武, 2008; 上野・松並・青野・赤澤・井ノ崎, 2012; 榊原, 2011), 強い共依存傾向 (野口, 2009) などが攻撃行動の誘因であることが明らかとなっている。

加えて、恋愛関係に対する認知的な態度や価値観が攻撃行動の生起と関連することも示されている。例えば、ラブスタイル (Lee, 1973) のルダス (不特定の異性との交遊を嗜好する傾向) は恋人に対する攻撃行動の行為者となりやすいことが報告されている (赤澤・井ノ崎・上野・松並・青野, 2011; Bookwala, Frieze, & Grote, 1994)。また、愛着の関係不安が強い場合も同様の傾向にあることがわかっている (Follingstad, Bradley, Helff, & Laughlin, 2002; 井ノ崎・上野・松並・青野・赤澤, 2012; 相馬・福島・坂口, 2006)。

これらの研究より、幼少期から青年に至るまでの養育環境や教育環境から影響を受けて構築された対人関係や恋愛関係に対する個人の考え方が攻撃行動の生起と関連していることが推測される。この観点では、関連する誘因を持つ者はどのような恋人に対しても攻撃行動を行ってしまうという意味合いが強いといえる。基本的に変容しにくいことが想定される個人の特性変数は、攻撃行動の行為者を発見するためのリスクマーカーとして役に立つと考えられる。

また、恋愛は個人の態度や価値観だけでなく、交際中の恋人との相互作用によって醸成されていく関係性である。すなわち、恋愛内で生じる様々な行動は個人の特性変数だけでなく、交際中の恋人に対して抱く感情などの変動する固有の変数によっても規定されていくはずである。この観点に立ち、特定された攻撃行動の誘因は主に2つある。その1つが、恋人に対する強い愛情である (寺島・宇井・宮前・竹澤・松井, 2013)。これは、恋人に対する愛情が強いほど、攻撃行動が生起するという報告である。もう1つの攻撃行動と関連する変数として交際期間がある (相羽・荒井, 2014; Bookwala, et al., 1992; 高坂, 2012)。これは、恋愛関係の長期化に伴い攻撃行動が増加するという報告である。これらは、攻撃行動は原因となる個人の特性変数を持った

者が引き起こすものとして捉えるのみではなく、どのようなカップルの間にも生じる場合があるものとしても考えていく観点である。しかしながら、交際中の恋人に対して形成される関係変数と攻撃行動の生起との関連を扱った研究はあまり多くはない。おそらくは、変動しやすい要因を扱うために誤差が生じやすくなることから、研究として取り上げづらいことが考えられる。

攻撃行動の生起に関する知見を踏まえると、恋人支配行動の生起には2つのルートが想定される。1つは個人の特性変数を背景とするものであり、この場合の恋人支配行動の生起は関連する個人の特性変数を持つ者はどのような恋人に対しても恋人支配行動を行ってしまうという意味合いを持つことになる。もう1つは恋人との関係変数を背景とするものであり、この場合の恋人支配行動の生起は現在の恋人に対する関係変数の変動から生じ、どのようなカップルの間にも恋人支配行動が生じる場合があるという意味合いを持つといえる。

さらに、恋人支配行動は個人の特性変数と恋人との関係変数のどちらかを背景として生じる場合だけでなく、複合して生じる場合があることも組み合わせの上では考えられることである。この場合は、個人の特性変数を持つ者が交際中の恋人に対する関係変数の変化を契機として恋人支配行動が生起するという媒介ルートを想定することが可能といえる。恋人支配行動の3つの生起ルートをまとめたものをFigure 3に示す。

しかしながら、恋人支配行動の要素である攻撃行動と束縛の生起に関する研究の中で個人の特性変数をベースに恋人との関係変数が媒介して生起するモデルを検証したものはあまり見当たらない。そこで、恋人支配行動の3つの生起ルートのうち、特に媒介ルートについて本論文で検討することとする。さらに、媒介ルートの検証後に誘因となる変数にどのような条件が揃った時に恋人支配行動が生起するのかについて詳細に検討していくこととする。

なお、本論文では恋人支配行動と関連すると考えられる個人の特性変数として共依存特性を取り上げることとする。共依存は元々アルコール依存者とその家族との関係性を説明するための概念であり、問題を抱えた者と献身的に世話をを行う者との間で構築される関係をさす。斎藤（2003）によると、問題を抱えた者の背景には世話をする者から見捨てられたくないという強い不安が、世話をを行う者は相手に依存してもらうことによって相手をコントロールしたいという強い支配欲求があるとされている。近年ではアルコール依存者に限らず、看護師と患者の関係や（森・長田，2007）、主介護

者と被介護高齢者の関係（難波・北山，2007）のように，緊密な関わりが生じる関係性について検討がなされており，強い共依存特性は親密な対人関係の中で，様々な問題を抱えやすいことが指摘されている（前田・長友・田中・三浦，2007；難波・北山，2006；緒方，2005）。親密な二者関係内で生じる支配や攻撃という点が恋愛内で生じる攻撃行動と類似していることから，共依存という概念自体は恋愛内で生じる問題ある行動を説明するための枠組みとして取り上げられてきた経緯があった。

恋愛関係における攻撃行動と共依存との関連を扱った著書や事例報告は数多く見られる。例えば，水澤（2016）では様々な攻撃行動を受けても別れることができない被行為者の心理について共依存という観点から精緻な描写を行っている。また，実証的な研究はあまり多くはないのが現状であるが，共依存は恋愛関係における攻撃行動の生起と強く関連していることが報告されている（野口，2009）。

共依存特性を持つ者は自己と他者との関係性の境界線（バウンダリー）が曖昧になりがちであるという特徴があるとされている（西尾，2000）。水澤（2016）によると，関係性の境界線とは，他人を自分の心理的な領域に必要以上に侵入させないこと及び他人に侵入しない心の線引きをさす用語である。関係性の境界線は他者から自分を保護し，他者に対して自分を抑制するために明確であることが必要であり，境界線が曖昧な関係性は他者の言動や行動に必要以上に苦しんだり，また，他者に対して自分の思う通りに振舞うように要求してしまったりするようになっていく。恋愛という関係においては親密であるがためにいきすぎた干渉や様々な攻撃行動へとつながってしまうことが予想される。そこで，対人関係の要因の1つとして共依存をとりあげて恋人支配行動との関連を検討していくこととする。なお，共依存は二者関係を指す用語であるが，ここでは共依存に陥りやすい者の特性を個人の共依存特性として扱うこととする。なぜならば共依存にある恋愛関係が研究対象ではなく，そのような特性が恋愛内で生じる恋人支配行動とどのように関連しているかを検討したいからである。

また，先ほど攻撃行動の生起と恋人との関係変数との関連を扱う場合，変動しやすい要因を扱うために誤差が生じやすくなることを指摘した。本論文はこの問題に対して可能な限り調査対象者を増やすことで，誤差の影響が小さくなるように努める。ただし，18歳から19歳の恋人がいない男性は77.3%、女性は68.8%であり（国立社会保障・人口問題研究所，2017），恋人がいる者の確保が困難な場合も出てくるかもしれない。その場合，統計的な観点から誤差の影響が小さくなるように努めることとした。

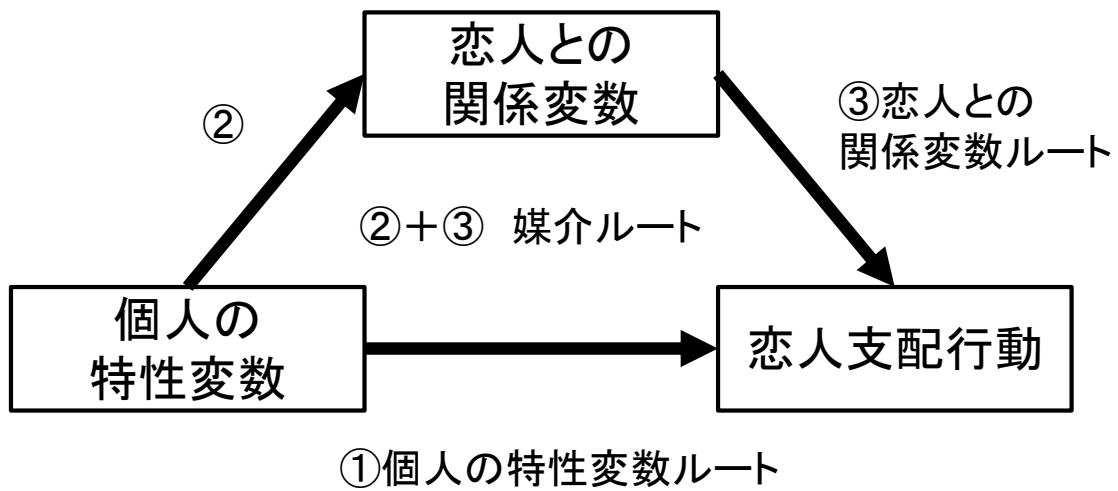


Figure 3 恋人支配行動の概念的な生起モデル

note : Figure 3 は従来の研究知見から導き出された個人の特性変数ルート (①) 及び恋人との関係変数ルート (③) と、本論文で新たに想定した媒介ルート (②+③) を意味している。

第7節 攻撃行動が恋愛関係に及ぼす影響に関する研究と不明な点

攻撃行動の研究は、攻撃行動の生起に関する領域に加えて、攻撃行動が恋愛関係に及ぼす影響について検討する領域がある。だが、この領域の研究は必ずしも多いとはいえない。その理由として、攻撃行動は恋愛関係に悪影響を及ぼすという暗黙の大前提があるように思われる。攻撃行動が恋愛関係に及ぼす影響について検討したとみなせる研究はごくわずかであり、例えば「異性交際の制限」という項目を含む「拘束感」因子と恋愛の関係満足度には負の相関関係があること（高坂，2009）などが報告されているのみである。攻撃行動が恋愛関係に悪影響を及ぼすことは自明の理であり、そもそも研究として取り上げようと思う研究者がほとんどいない現状があるといえる。

ところが、興味深いことに近年の実態調査の中で攻撃行動が恋愛関係に悪影響を及ぼさない可能性を示唆する知見が見いだされている。攻撃行動の被行為者は、攻撃行動を受けることで恋人からの必要性を認知する場合があるという報告が少数ながらも存在するのである（京都市男女共同参画推進協会，2012；内閣府，2012）。また、青年期の男女は攻撃行動を愛情表現と錯誤するという指摘もある（伊田，2010）。これらより被行為者と行為者が互いの好意や愛情、恋愛関係の安定性を確認し合う手段の1つとして、攻撃行動が機能している場合があることも考えられるだろう。

攻撃行動が被行為者と行為者の恋愛関係に及ぼす影響については、悪影響を及ぼすという知見と必ずしもそうではない場合があることを示唆する知見がある。このような異なる知見が存在する理由の1つとして、攻撃行動の強度（攻撃行動が被行為者に与える心理的なダメージの大きさの程度）を攻撃行動の種類ごとに設定して検討を行っていないためであると考えられる。

これまでに行われた攻撃行動が恋愛関係に及ぼす影響に関する調査を概観していくと、攻撃行動の種類に着目した研究が主であり、強度を考慮に入れた検討を行ったものはあまりみられない。しかし、攻撃行動はその強度によって被行為者に異なる影響を及ぼす可能性があることが指摘されている（赤澤・武内，2015；鈴木，2007）。もちろん、強い強度の攻撃行動は被行為者にとって大きな心理的ダメージを与えると考えられることから、恋愛関係に悪影響を及ぼすのは当然のことと思われる。しかし、弱い強度の攻撃行動は被行為者にあまり心理的ダメージを与えるわけではないため、恋愛関係にさしたる影響を及ぼさなかったり、恋人に対する興味や関心を示す恋愛行動と双方が認識あるいは錯誤してしまったりするのかもしれない。その結果として、

弱い強度の攻撃行動は恋愛関係に悪影響を及ぼさない場合や、もしかしたら恋愛関係の維持に貢献している可能性もあるかもしれない。先行研究によって異なる知見が生まれる背景には、強度という観点を導入していないためと考える。

これらのことを念頭に置きながら、本論文では恋人支配行動が恋愛関係に及ぼす影響について検討していく。特に強度という観点に着目し、恋人支配行動の強度が強い場合は恋愛関係に悪影響を及ぼすが、強度が弱い場合は悪影響を及ぼさない場合や、恋愛関係の維持に貢献しているという想定について検討することとする。本論文における恋人支配行動が恋愛関係に及ぼす影響に関する想定についてまとめたものを Figure 4 に示す。

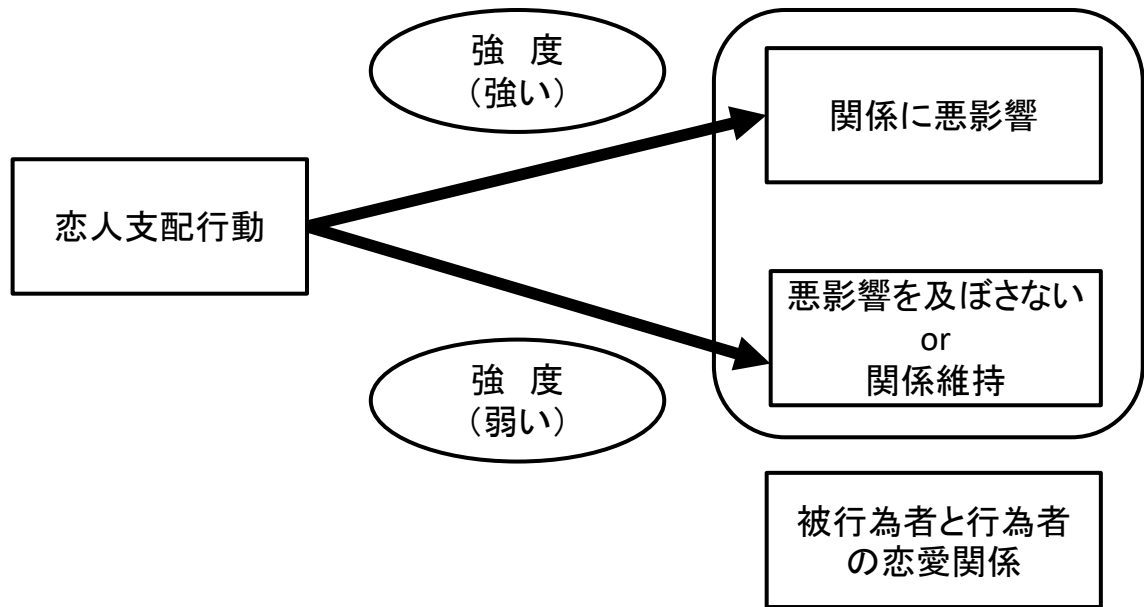


Figure 4 恋人支配行動が恋愛関係に及ぼす影響に関する本論文の想定

第2章 恋人支配行動を説明する理論的枠組み

青年期における親密な二者関係の問題について、近年2つの理論的枠組みから論じられることが多くなってきている。1つは愛着理論であり、もう1つは配偶者維持（防衛）行動の理論である。これら2つの理論をベースに恋人支配行動の心理学的な位置づけを行い、本論文の理論的な立場を構築する。

第1節 恋愛関係の維持—愛着理論

人の生涯に渡る絆の変遷を説明する愛着理論（Bowlby, 1969, 1973）は、個人が不安を喚起された状況下において、自身を保護してくれると思われる対象に対して近接することで主観的な安心感を獲得し、適応感を高めることを想定したものである（Ainsworth, Blehar, Waters, & Wall, 1978）。その中で Bowlby(1973)は、子どもが危険や脅威にさらされ、愛着対象に安心感を求めるために接近する時に怒りを表出することは標準的な反応であるとしている。子供にとって怒りの表出は、養育者が自分に無関心であることによる傷つきから自分を守るための反応である（Fonagy, Moran, & Target, 1993）。また、養育者にとって子どもの怒りの表出は、子どもの志向性を理解し、世話という反応の即時的な強化を引き起こすように働くこととなる（Fonagy, 1999）。その意味では子どもの怒りの表出は、子どもと養育者の関係維持に貢献するという側面がある。しかしながら、Fonagy(1999)は養育者が鈍感な場合は子供の怒りは攻撃性へと変容していくこと及び攻撃性は愛着の絆を崩壊させる脅威になること、攻撃性や激しい怒りは強い関係破綻への不安が生み出すことも併せて指摘している。

乳幼児期に養育者との相互作用によって形成された対人枠組みは、認知能力の発達とともに他の対人関係の取り方の雛形として機能するという想定のもと（Bowlby, 1969, 1973）、養育者と恋人には数多くの類似点が見られることや（Hazan & Shaver, 1987; Shaver & Hazan, 1988）、幼児期に愛着を向ける主な対象が養育者であったのに対して、児童期は友人、そして青年期は恋人へと対象が移り変わっていくという愛着対象の移行（Fraley & Davis, 1997; Freeman & Brown, 2001; Hazan & Zeifman, 1994; 片岡・園田, 2010; 村上, 2009; Nickerson & Nagle, 2005; Trinkle & Bartholomew, 1997）を根拠にとり、主な愛着対象を恋人として青年期・成人期の愛着理論は展開されていった。

その中で恋人への攻撃行動に着目して研究を行ってきた Follingstad, Bradley, Laughlin, & Burke (1999)は関係性の安定を取り戻すため、関係不安は怒りへ、怒りは支配的な行動の行使へと変わり、支配的な行動が恋人に受容された場合は恋人との愛着は保たれるが、そのような行動にあまり効果がなかった場合は、恋人への怒りの表現として身体的暴力を伴う極端な支配的行動が選択されることを想定し、実際にこのパスモデルを実証している。彼らの報告は親密な関係内で生じる暴力は身体的・精神的・性的な危害を加えることで相手を管理・支配しようとする試みであるという指摘及び暴力による威圧が学習された対人関係方略であるという論述 (Wekerle & Wolfe, 1999)とも矛盾しないものである。

愛着の知見からは、二者関係の中では親密な対象に対して怒りやそれに準じた不平や不満を表現すること自体は決して不思議なことではなく、むしろ関係維持のためにはごく自然なことであると捉えることができる。乳幼児期の愛着の知見より青年期の恋人支配行動の根底には強い不安が存在し、そのような行動が恋人に対して受け入れられた場合には関係は保たれるものの、受け入れられない場合は不適切・過剰な関係維持方略としてより強度が強い恋人支配行動が選択されていくことが予測される。なお、ここでの関係維持方略とは Stafford & Canary (2006) に倣い、「関係満足度を維持する活動」という意味合いで用いることとする。

第2節 ライバルの排除—配偶者維持（防衛）行動の理論

恋愛の難しいところは二者の関係性のメンテナンスに気を配っていればいいだけの関係ではない点である。なぜならば、恋愛は第三者が自身の恋人を略奪する可能性が常に存在する関係だからである。従って、恋人が他者と親密な関係を構築することを阻止したいという欲求は多くの交際中の者達に生じるものであり、恋愛の関係維持のために必要なことであるともいえる。特に近年ではソーシャルネットワークの発達によって恋人以外の不特定多数と関係性を構築することが容易になったことから、恋人と他者との親密な関係の構築を阻止することは多くの恋愛に共通する事案であるといえる。

本論文で中心的に取り上げている恋人支配行動を他者との関係構築の阻止という観点で捉えれば、束縛は直接的に自身の恋人に異性との交流を制限するように働きかけることで関係の排他性を高め第三者の侵入を拒む試みであり、様々な暴力は恋人を自身の言いなりにすることで第三者との関係構築を阻害する試みであるといえる。これらの行動は自身の恋人に大きなダメージを与える場合や、恋愛関係の良好さを低下させてしまう場合を招くことが容易に予想されることから、決して適切とはいえないものの、恋人を第三者に略奪されないための方略としては一定の効果が期待できるものといえる。

自身のパートナーと第三者との関係構築を阻害する行動は実は多くの生物にみられるとされており、生物学の専門用語では配偶者維持（防衛）行動と呼ばれている（mate retention (guardian) behaviors, Parker, 1974）。例えば、アオジという鳥ではオスはメスとの距離を短く保ち、後追いを行うことでメスと他個体との交尾を阻止しようとする行動がみられる（Birkhead, 1981; 小岩井, 2003）。また、メダカのオスでは他のオスとメスの間に自身を割り込ませるような行動を行うことで、パートナーの可能性のあるメスと他のオスとの接触を妨害する行動が観察されている（Saori, Ansai, Kinoshita, Naruse, Kamei, Young, Okuyama, & Takeuchi, 2016）。この他にもゴリラのような哺乳類からトンボのような昆虫に至るまで配偶者維持行動と考えられる行動に関する報告は多数なされている。

恋愛の場合は、恋人支配行動が配偶者維持行動に該当すると考えられ、恋人支配行動の解明に対して配偶者維持行動の観点を持った研究アプローチが増えている（Arnocky, Ribout, Mirza, & Knack, 2014; Buss, 1988; Goetz & Shackelford, 2006;

Shackelford, Goetz, Buss, Euler, & Hoier, 2005; Shackelford, Goetz, Guta, & Schmitt, 2006; Starratt & Shackelford, 2012)。恋愛関係を守るという意味では、恋人支配行動は関係維持行動の1つと捉えることができる。

第3節 愛着と配偶者維持行動の観点を用いる理由

愛着理論の観点からは、恋人支配行動は恋愛関係内で生じる関係破綻の不安が誘因となり、二者の関係維持のために機能する行動の1つであることが示唆される。また、配偶者維持行動の観点からは恋愛関係外の第三者から恋人を奪われる可能性を排除し、恋愛関係の破綻を回避するための方略として恋人支配行動が機能する可能性が導き出される。このように、恋人支配行動は二者関係の維持と他のライバルを排除するという恋愛内外の関係維持方略の1つとして機能していることが考えられるのである。

これまでに、攻撃行動を説明する観点として、いくつかの理論から説明がなされてきた。フェミニスト理論 (Dobash & Dobash, 1992) の立場では、男性優位の古典的な性に対する価値観から男性から女性への攻撃行動が生じると考える。社会的学習理論 (Bandura, 1978) の観点を用いた説明では、幼少期の家庭環境や教育環境の中での攻撃行動のモデリングが青年期の親密な二者関係における攻撃行動と関連すると考えていく。投資モデル (Rusbult, 1983; Rusbult & Martz, 1995) を用いれば、恋人間の時間的・金銭的・心理的な投資の不均衡が生じた時に、不平や不満の表出の1つの手段として攻撃行動が選択されると考察する。

確かに性についての不平等な解釈、幼少期の誤った学習、関係性の不釣り合いといった視点から攻撃行動の一部を説明することができるだろう。しかしながら、偏った性役割観を持たない者、養育環境に問題がない者、あるいは関係性の不均衡が起こる恋愛関係の初期段階からでも攻撃行動を行う者がいることは考えられることである。

例えば、男性優位の性役割が攻撃行動に直結するという視点は、女性から男性への恋人支配行動について論じることができない。被害経験は女性の方が多くと読み取ることができる報告もあれば (横浜市市民活力推進局男女共同参画推進課, 2008)、あまり違いが見いだされないものもある (山田・山田, 2010)。また近年では女性から男性への攻撃行動が注目されている現状もあわせて考えると、あまり有効な観点とは言いづらいといえる。また、社会的学習や投資モデルの観点では先行研究により繰り返し説明されている個人の特性変数に依拠する攻撃行動を説明することができないといえる。

これまでに用いられてきた理論では、恋人支配行動の生起に関する部分的な予測は可能であるものの、その説明力は必ずしも高いとはいえないと考えられる。それに対して、愛着と配偶者維持の観点は恋愛関係への不安を根底として、破綻を回避するた

めの関係維持行動の1つとして恋人支配行動が生じると想定する。他の理論にくらべて恋人支配行動の生起に関する高い予測力を持つ枠組みを提供している可能性がある。

以上のことより、本論文は恋人支配行動の予測に対して有用と考えられる愛着と配偶者維持の観点を理論的な枠組みとして採用することとする。

なお、関係破綻への不安を測定するために、本論文では愛着の文脈で取り上げられる分離不安という概念に着目する。分離不安は Bowlby(1969, 1973)が提唱した4つの愛着機能（近接性の維持、安全な避難場所、分離不安、安全基地）のうちの1つであり、「分離に際し苦悩し、抵抗する傾向」である。愛着機能は親密な2者関係の中で特有に見られる心理的・行動的な傾性であり、言い換えれば親密な2者関係とそれ以外の関係を分かち境界性ともいえる。そして、青年期以降の恋愛も愛着機能に依拠した心理的・行動的な特徴が見られる関係の1つとされている（Hazan & Zeifman, 1994; Zeifman & Hazan, 2000）。

青年期の分離不安に関する調査には片岡・園田（2010）がある。彼らは大学生を対象に4つの愛着関係の定義的な特徴を記した文言を用いて、それぞれの機能を求める対象が誰であるのかを問う WHOTO 面接（Hazan & Zeifman, 1994）を参考に“離れたくない、離れていて寂しいと思うのは誰か”について調査している。その結果、恋人がいる者の72.0%が分離不安を感じる対象として、恋人を選択していた。同様の結果は、Hazan & Zeifman（1994）でも確認されている。青年期においては恋人に対して分離不安が生じることはごく自然なことであることがわかる。

分離不安は関係性の中でその強さが変動する不安であると考えられる。例えば、Zeifman & Hazan(2000)は恋愛関係の形成プロセスについて理論的な想定を行っているが、彼らによると標準的な恋愛関係のプロセスの中では関係初期に分離不安は強く、関係性の安定化に伴い徐々に低減していくとしている。すなわち、分離不安は現在の恋人に特有に感じる可変的なものといえ、恋愛関係内で生じる分離不安の状態に焦点をあてたものといえる。

恋人支配行動には現在の恋人との関係変数が関与しているという本論文の想定と合致することから、恋人への分離不安の状態を取り上げて検討を行っていくこととする。

第3章 本論文の目的

これまでの議論を踏まえ、本論文では恋人支配行動は恋愛関係を維持するための関係維持方略という観点を出発点として、その生起と関係性に及ぼす影響について研究を行っていく。恋人支配行動の生起に関する研究上の大きな目的は、生起に関する誘因及び生起条件についての知見を得ることである。関係性に及ぼす影響に関する研究目的は、恋人支配行動が関係に悪影響を及ぼす場合と関係維持に貢献する場合の条件について明らかにすることである。

第1節 本論文の最終目的と検討事項

本論文は二者関係の維持に関する愛着の観点と、第三者を排除する配偶者維持の観点を踏まえて、恋人支配行動の本質は恋愛関係が関係内及び関係外の理由により不安に感じる状態であると認識した時に生じる、自身の不満や欲求を表出すること及び他の異性との関係構築を阻害することで恋愛関係を安定的なものへと引き戻し、破綻を回避するための関係維持行動であると想定する。

恋人支配行動に関する本論文の想定を検証するために、恋人支配行動の生起要因および恋人支配行動が恋愛関係に及ぼす影響について明らかとなっていない点を4つの研究から検討する。恋人支配行動の生起から恋愛関係に及ぼす影響に関する一連の流れについて、得られた知見を元に恋人支配行動の全体モデルを構築することが本論文の最終目標である。本論文全体の構成を Figure 4 に示す。

恋人支配行動の生起については2つの実証研究を行う。これらの研究を通して、恋人支配行動の誘因と生起条件の特定を目指す。研究1として恋人支配行動と恋人への分離不安を測定するための尺度開発を行う。その後、共依存及び恋人分離不安と恋人支配行動の生起との関連について、媒介ルートを想定した検証を行う。研究2として特に恋人との関係変数として恋人への分離不安に着目し、恋人分離不安が恋人支配行動の誘因となる条件について検討を行う。その際に、先行研究で攻撃行動と関連がみられている他の恋人や恋愛に対する心理的な変数として恋人への愛情と恋人との交際期間も取り上げる。これらは統制変数という位置づけであるとともに、恋人への分離不安との組み合わせについても検討を行うことで、どのような条件が揃った時に恋人支配行動が生起していくのかを検討するためである。

そして、恋人支配行動が恋愛関係に及ぼす影響について2つの実証研究を行う。これらの研究を通して、恋人支配行動が悪影響を及ぼす場合と関係維持に貢献する場合に関する知見を得ることを目的とする。研究3として恋人支配行動の攻撃行動と束縛が恋愛関係に及ぼす影響について検討を行う。研究4として弱い束縛と強い束縛を測定する尺度の開発を行い、弱い束縛と強い束縛が恋愛関係の満足度に及ぼす影響について検討する。

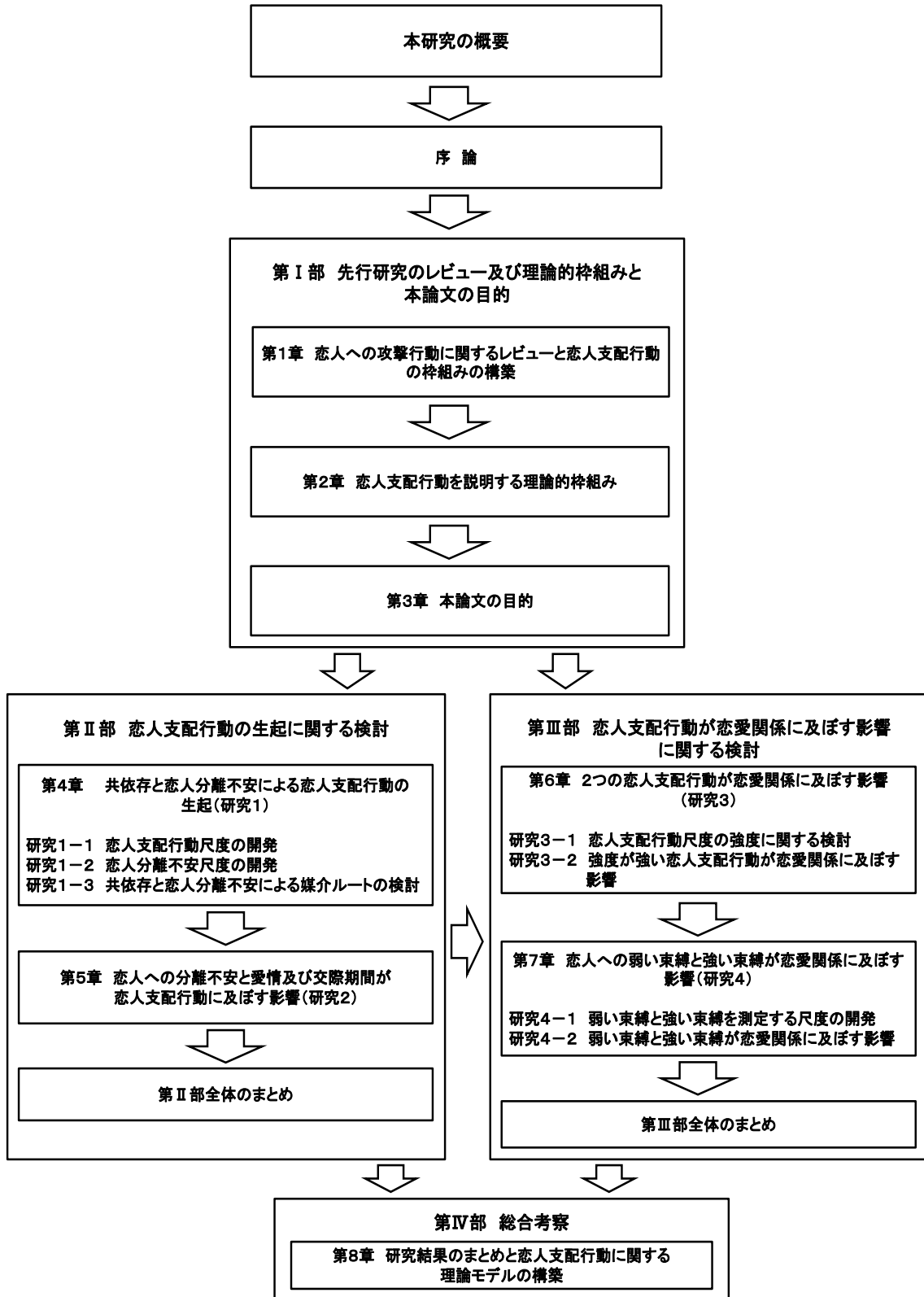


Figure 4 本論文の構成

第2節 研究全体に共通する有意水準と効果量の扱い、倫理的配慮、基本的属性に関する調査内容

全ての研究において有意水準は5%未満に設定した。また、分析の効果量は国際的に記述が義務化されていることから、原則的に表記を行っていくこととした。ただし、効果量の扱いについては統一したコンセンサスが得られていない現状であることを勘案し、有意差がみられた分析で効果量があることを確認するに留め、単独での考察は避けることとした。 t 検定については d 、分散分析は η^2 を用い、重回帰分析は β を効果量の指標とした。効果量の大きさの判断はCohen & Cohen(1985)の基準に基づくこととした。

また、全ての研究において調査方法は質問紙を用いた。研究1、2、3については講義時間に質問紙を配布し、集団的に実施した。その際、恋愛関係に関する調査であること、質問紙の回答は任意であり拒否しても構わないこと、無記名であること、回答途中であっても中断することができること、回答を拒否したり中断したりしても不利益が生じないことといった倫理的な配慮について調査用紙の表紙に明記し、また口頭でも説明した。また、研究4はWeb調査であり、リサーチ会社から連絡を受けとったモニターが任意に回答を行う仕様であったため、回答の中断や拒否が可能な状態であった。

研究1、2では、参加者の性別、現在の恋人の有無について回答を求めた。さらに現在恋人がいる者については現在の恋人について、現在恋人がいない者については過去の恋人、異性の友人、同性の友人の中から最も親しい人物を思い浮かべて回答してもらい、もしもそれらに該当する人物がいなければ思いついた人物について回答するように教示した文を載せた上で、親密な他者として思い浮かべた人物と、その人物との交際期間について回答を求めた。Web調査を用いた研究4の中で、研究4-1では現在恋人がいる者か過去に恋愛経験がある者、研究4-2では現在恋人がいる者のみに調査を行うように調査会社に依頼した。

第Ⅱ部 恋人支配行動の生起に関する検討

第Ⅱ部では、恋人支配行動の誘因及び生起条件について検討を行っていく。

本論文では恋人支配行動を恋愛の関係維持機能を有する行為の1つとして議論してきた。ここから、恋人支配行動の生起には現在の恋愛関係に対する関係破綻への不安が関与していることが導き出された。この点に軸足を置いた上で恋人支配行動の生起について検討していく。

第4章研究1では、恋人支配行動を測定する尺度（研究1-1）及び関係破綻への不安を測定するための恋人分離不安尺度（研究1-2）を開発する。その後、説明変数に個人の特性変数として共依存、媒介変数として恋人分離不安、目的変数として恋人支配行動を設定した媒介ルートを検討する（研究1-3）。

第5章研究2では、さらに踏み込み恋人分離不安にどのような恋人との関係変数が揃った時に恋人支配行動が誘発されるのかを検討する。

2つの研究を通して恋人支配行動の誘因及び生起条件を特定することが第Ⅱ部の目的である。

第4章 共依存と恋人分離不安による恋人支配行動の生起 （研究1）

第4章では恋人支配行動の生起について、個人の特性変数と現在の恋人との関係変数との関連から検討する（研究1）。

これまでに、恋人支配行動を構成する攻撃行動の生起には個人の特性変数が関与していることが複数報告されている。しかしながら、恋愛は個人の態度や価値観だけでなく、交際中の恋人との相互作用によって醸成されていく関係性である。すなわち、恋人支配行動は個人の特性変数以外にも恋人との関係性の中で形成された心理的な変数に関与していることが考えられるのである。さらに、個人の特性変数を元に恋人との関係変数を媒介して生じる場合があることも想定できる。

これらのことより、恋人支配行動には3つの生起ルート（個人の特性変数ルート、恋人との関係変数ルート、個人の特性変数を元に恋人との関係変数を媒介するという媒介ルート；p21, Figure 3）が考えられる。3つの生起ルートを検証することは、恋人支配行動の生起メカニズムを明らかにするうえで重要である。もしも、個人の特性変数より生じるのであれば、恋人支配行動はあくまで個人内の心理的な誘因が顕在化したものであり、どのような恋人と交際しても生じるものということになる。恋人との関係変数より生じるのであれば、恋人支配行動は恋人間の相性や組み合わせより起きるものであり、誘因を持たない者同士の恋愛関係においても恋人支配行動を選択してしまうといえる。個人の特性変数を元に恋人との関係変数を媒介して生じるのであれば、元々恋人支配行動を選択しやすい傾向にある者が、恋人との関係性の変動によりそのような行動を行ってしまうものであるということになるだろう。このように、3つの生起ルートを検証することにより、どのような条件が揃った時に恋人支配行動が生起するのかを明らかにする上で有益な知見を得ることができると考えられる。

しかしながら、攻撃行動の生起に関する研究の中で恋人との関係変数との関連を検討した研究は決して多くはない。加えて、個人の特性変数と恋人との関係変数からなる媒介ルートを検証したものはあまり見当たらないのが現状である。そこで、研究1では恋人支配行動の生起について、個人の特性変数と恋人との関係変数との関連から検討を行うこととする。

恋人との関係変数として、本論文では恋愛関係の破綻に対する不安が関連している

第4章 共依存と恋人分離不安による恋人支配行動の生起（研究1）

可能性について議論し、愛着の観点から恋人への分離不安を想定した。研究1ではまず、恋人との関係変数としてこの恋人分離不安を用いて検討を行う。また、恋人支配行動と関連する個人の特性変数には様々なものがあるが、本論文では二者関係に焦点を当てた概念である共依存を取り上げる。その理由として、近年攻撃行動の領域で関連する個人の特性変数として共依存に注目が集まっていることや、攻撃行動との強い関連性が報告されているため、本論文で想定する媒介ルートを検証する上で適しているからである。これらを踏まえて、研究1では共依存と恋人分離不安の組み合わせから恋人支配行動の生起を検討することとした。

以上を踏まえて、研究1ではまず研究の遂行のために必要となる恋人支配行動尺度の開発（研究1-1）と恋人分離不安尺度の開発（研究1-2）を行う。恋人支配行動は本論文で提案した枠組みであり、適切な尺度が見当たらないため、分離不安は愛着の枠組みではあるものの、恋人に対する分離不安を測定する尺度が見当たらないという理由から、この2つを測定する尺度を開発する。その後に恋人分離不安の生起ルートを検討する（研究1-3）。

第1節 恋人支配行動尺度の開発（研究1-1）

研究1-1では本論文で提案した恋人支配行動を測定するための尺度開発を行う。

恋人への攻撃行動の測定で用いられる尺度の中で世界的に有名なものとして葛藤方略尺度（CTS; Straus, 1979）やその改訂版（CTS 2; Straus, Hamby, Boney-McCoy, & Sugarman, 1996）があげられる。日本においても、これらの尺度を援用した研究が行われている（青野・周・森永・葛西, 2011; 榊原, 2011）。また、本邦で開発された恋人への攻撃行動を測定する尺度としてはデートバイオレンス可能性尺度（小畑, 2013）、支配的恋愛関係チェックリスト（西村・森田, 2013）、デートバイオレントハラメント尺度（越智・長沼・甲斐, 2014）、デートDV尺度（赤澤・竹内, 2015）などがある。この他にも、実態調査や既存の項目を組みあわせて質問紙を構成した研究や（小泉・吉武, 2008; 野口, 2009）、恋愛関係を測定する尺度の中に束縛の項目を測定する因子が見られるもの（金政, 2002; 高坂, 2010）などがある。

本論文では恋人への攻撃行動に束縛を位置づけた恋人支配行動という枠組みを提案したが、恋人支配行動を測定することが可能な尺度はあまり見当たらない。部分的には測定可能な尺度自体は多いことから、複数の尺度より該当する因子を用いて調査を行う選択肢もあるが、研究が活発に行われるようになった結果として恋人への攻撃行動を測定するための尺度が実に多様となり、どの尺度を用いることが望ましいのか判断が難しい現状がある。さらに、そもそも複数の攻撃行動が1つに集約され、束縛とは分離して2つのまとまりに大別されるかどうかは現時点では想定の外をでないため検証が必要である。

以上の理由より、研究1-1では恋人支配行動尺度を開発する。そして、恋人支配行動を構成する下位尺度のまとまりについて検討する。また、基礎的な資料とするために、開発した尺度で測定される内容の男女差についても検討を行うこととする。

方 法

調査時期

2011年9月に調査を行った。

調査対象者と調査手続き

調査対象者は大学生 586名（男性 233名, 女性 352名, 不明 1名, 平均年齢 19.67,

$S.D=2.64$)であった。調査方法は質問紙を講義時間に配布し、集団的に実施した。

使用した質問紙

暫定版恋人支配行動尺度 様々な内容の恋人支配行動を測定するために、既存の尺度から恋人支配行動を測定していると考えられる項目を収集し、また、尺度の内容を参考に新たに項目を作成し調査に用いた。恋人支配行動の測定項目の作成のために参考にした尺度は、金政（2002）の恋愛イメージの質や影響を測定する尺度、片岡・園田（2008）の恋人に対する依存度を測定する尺度、小泉・吉武（2008）のデートDV加害・被害経験の有無を問う項目、野口（2009）のデートDVの実態を測定する項目、高坂（2009, 2010）の恋愛関係の影響を測定する尺度であった。これらの尺度や項目から、現在の大学生によくみられる恋人支配行動を測定できると考えられる18の項目を収集・作成した。調査の際に、質問項目に記載されていることがらについて、「自分は次の行動を思い浮かべた対象に対してどの程度行っているか」を回答してもらった。

回答は「まったくあてはまらない」、「あてはまらない」、「あまりあてはまらない」、「どちらともいえない」、「ややあてはまる」、「あてはまる」、「非常によくあてはまる」の7件法を採用した。

結 果

恋人支配行動尺度の作成

欠損値の無かった者の中で現在恋人がいる者172名（男性52名、女性120名、平均年齢20.01歳、 $SD=2.55$ ）を分析対象とした。

恋人支配行動尺度に関して、探索的因子分析を行った（Table 1）。固有値が6.60, 2.10, 1.21, 1.11と推移したことから、解釈可能性から2因子が妥当であると判断した。そこで、単一の因子への負荷量が.40未満であるか、複数の因子への負荷量が.40以上であることを除外基準とし、因子数を2に固定した最尤法プロマックス回転を行い、削除項目が無くなるまで繰り返し因子分析を行った。

その結果、第1因子、第2因子共に5項目が選択された。第1因子は、「○○を押しったり、つかんだり、つねったりする」など恋人への暴力的な行為を測定する項目から構成されたことから、「暴力的支配行動」と命名した（説明率35.11%）。第2因子は、「○○の携帯をみて異性のアドレスを消してもらおう」など、恋人を束縛する行為を測定

する項目から構成されたことから、「束縛的支配行動」と命名した（説明率 17.27%）。因子間相関は、中程度の値を示した ($r=.40$)。信頼性係数を算出したところ、第1因子 ($\alpha=.81$)、第2因子 ($\alpha=.71$) とある程度の信頼性が得られた。

恋人支配行動の性差

恋人支配行動尺度の各因子に性差が見られるかを検討した。はじめに、男性群と女性群の恋人支配行動尺度の各因子の分散に差異があるかを F 検定により検討したところ、どちらの因子も群間に有意差がみられた（暴力的支配行動 $F(51,119)=1.53, p<.05$ ；束縛的支配行動 $F(51,119)=0.42, p<.01$ ）。そこで welch の t 検定を行ったところ束縛的支配行動得点のみ群間に有意差がみられ（暴力的支配行動 $t(81)=1.51, n.s, d=.27$ ；束縛的支配行動 $t(145)=2.11, p<.05, d=.30$ ），男性群に比べて女性群のほうが得点は高かった（男性群 暴力的支配行動： $M=1.66, S.D=1.05$ ，束縛的支配行動： $M=1.54, S.D=0.70$ ；女性群 暴力的支配行動： $M=1.41, S.D=0.85$ ，束縛的支配行動： $M=1.84, S.D=1.09$ ）。

第4章 共依存と恋人分離不安による恋人支配行動の生起（研究1）

Table 1
恋人支配行動の因子分析結果

項目	F1 暴力的支配行動	F2 束縛的支配行動	M	SD
x7 OOをわざといやな呼び名で呼んだり、馬鹿にしたりする.	.80	.23	1.73	1.47
x8 OOを人前でバカにしたり、他人にOOの悪口を言う.	.74	.27	1.74	1.38
x11 OOを押したり、つかんだり、つねったりする.	.72	.35	1.51	1.28
x12 刃物などでOOを傷つけようとする.	.66	.36	1.17	0.89
x15 OOに性的行為を無理強いしたことがある.	.49	.22	1.26	1.01
x16 OOにメールを返すことを強制する.	.23	.73	1.76	1.46
x17 OOのメールを勝手に見る.	.31	.66	1.65	1.52
x18 OOが自分よりも友人を優先すると私は怒る.	.21	.51	1.76	1.32
x5 OOと喧嘩をするとすぐに別れ話を持ち出してしまう.	.22	.51	2.08	1.78
x1 OOの携帯をみて異性のアドレスを消してもらう.	.24	.47	1.49	1.21
因子間相関				
	F2. 束縛的支配行動	.40		

考 察

研究1-1では恋人支配行動を測定する尺度の開発を試みた。因子分析の結果から、恋人支配行動は攻撃行動に関するもの（該当する尺度の因子名は暴力的支配行動）と束縛（該当する尺度の因子名は束縛的支配行動）に大別され、ある程度の信頼性があることが確認された。この因子分析の結果は恋人支配行動の枠組みと言う観点からは想定通りのものであった。また、暴力的支配行動と束縛的支配行動の因子間相関は中程度の値を示した。これは、2つの恋人支配行動は独立して生じる場合に加えてどちらも生起する恋愛関係も少なくないことを示唆するものといえる。

性差については、暴力的支配行動では違いが見られず、束縛的支配行動では男性にくらべて女性の方が頻度は多かった。恋人への攻撃行動には男女差が見られるという報告の多くは、暴力的な行動は男性から女性へ、束縛的な行動は女性から男性へ行われる傾向を示している。束縛的支配行動では従来の見解を支持したものの、暴力的支配行動で性差が見られなかった理由として、男女間の暴力的な行動が同じような頻度で起こっているためかもしれない。ただし、性差がみられないという報告も複数あることや、性差は尺度項目に依存する可能性も多分にあるため、今後性差に関するメタ分析が必要といえる。

さらに、恋人支配行動尺度は各項目の平均点は総じて理論中央値よりも低くなっていることについても触れたい。平均点で捉えた場合、恋人支配行動はほとんどの恋愛関係の中では生じるものではなく、ごく一部の恋愛関係の中で起きる問題であることが示唆される。このような結果は、様々な恋人への攻撃行動を測定する尺度においてもみられるものである。恋人支配行動尺度は過去の研究と同様の傾向を示していることから、恋人への問題行動を測定する尺度としての妥当性が内包されているといえるだろう。

以上より、恋人支配行動に想定された暴力的支配行動と束縛的支配行動を区別できる尺度を開発できた。

第2節 恋人分離不安尺度の開発（研究1-2）

研究1-2では、現在継続している恋愛関係の中で生じる不安の強さを測定するために、愛着に依拠して恋人への分離不安を測定する尺度を開発する。分離不安は Bowlby(1969, 1973)が提唱した4つの愛着機能（近接性の維持、安全な避難場所、分離不安、安全基地）のうちの1つであり、「分離に際し苦悩し、抵抗する傾向」である。青年期の分離不安に関する調査には片岡・園田（2010）や Hazan & Zeifman(1994)があり、恋人に対して分離不安が生じることが確認されている。

ところで、愛着に依拠した不安には関係不安というものもあり、関係不安は恋人に対する攻撃行動と関連することが知られている（井ノ崎・上野・松並・青野・赤澤, 2012; 相馬・福島・坂口, 2006）。関係不安は Bowlby (1973)によると「自分は他者から愛される価値のある存在であるかどうか」という不安を反映した自己概念のモデルである。乳幼児期の親と子の相互作用の中で構築されたこの自己モデルは、親密な対人関係を構築する際の雛形の一部として機能するとされている。そして、青年期以降では親子関係のモデルをベースに、友人や恋愛といった親密な関係に固有のモデルが構築されていくこととなる。

青年期以降の恋愛関係における愛着を測定する ECR（Experiences in Close Relationships Inventory; Brennan, Clark, & Shaver, 1998; 中尾・加藤, 2004）では、関係不安は「恋愛関係の中で一般的に体験している気持ちや感じ方について、現在の恋愛関係での経験だけでなく、いろいろな恋愛関係の中で普通によく体験していることを思い浮かべながら」回答するように教示された後、「私は見捨てられるのではないかと心配だ」や「私は恋人を失うのではないかとけっこう心配している」といった項目群から測定される。すなわち、恋愛関係における関係不安は、あくまでも個人の恋愛関係一般に共通する認知的な枠組みに焦点をあてているといえる。そのため、恋愛関係における関係不安は自身の恋愛関係において一般的に生起する不安であり、必ずしも現在の特定の恋人に生起する不安を問題にしているわけではない。

関係不安は、恋人支配行動を伴う恋愛関係を形成しやすい者を判別する上で有用であろう。しかしながら、恋人支配行動は関係性の変化によって生じる可能性がある。例えば、攻撃行動は交際が長期化するに従って増加するという報告がある（相羽・荒井, 2014; Bookwala, et al., 1992; 高坂, 2012）。そのため、一般化された恋愛における不安である関係不安からは、関係性の変化に伴って生起すると考えられる恋人支配

行動を捉えることが難しいといえる。そこで、恋人支配行動の生起を予測するためには、自身の恋愛関係に共通する不安ではなく、現在の特定の恋人に生起する不安の強さが重要となる。だが、関係不安という概念では現在の特定の恋人との関係性の変動による不安の強さを考えることは困難である。

関係不安が恋愛関係全般に共通する、特定の対象を想定しない恋人という存在に向けられた不安であるのに対して、分離不安は現在関係を構築している特定の恋人に対する不安である。現在関係を構築している恋人という特定の対象に対する分離不安を測定することで、これまでの恋愛関係における関係不安という概念を用いた研究では扱うことが難しかった、現在の特定の恋人に生起する不安の強さを測定することが可能になるといえる。

開発する恋人分離不安尺度の判別的妥当性を検討するために、現在及び過去の恋愛関係と友人関係を取りあげ回答した者の得点を比較する。恋人分離不安は現在の恋愛関係における分離不安を測るものである。したがって、この尺度が妥当性を持つならば、現在の恋人を念頭に回答した者のほうが、過去の恋人や友人を念頭に回答した者よりも恋人分離不安の得点は高くなることが期待される。

方 法

調査時期

2011年7月に2度の調査を行った。

調査対象者

1回目の調査は大学生291名（男性64名、女性225名、不明2名、平均年齢21.08歳、 $SD=3.83$ ）であった。2回目の調査は1回目の調査対象者とは異なる大学生370名（男性150名、女性220名、平均年齢19.20歳、 $SD=1.89$ ）であった。

使用した質問紙

暫定版恋人分離不安尺度 Zeifman & Hazan (2000) は恋愛関係の形成過程について愛着機能の観点から理論的な論考を行っている。彼らは、恋愛関係の中で恋人に対する分離不安が強まった段階において生じる感情や行動に関して詳細な記述をおこなっており、それらの言説を反映させる形で10の項目を作成した。

全ての尺度において、回答は「全くあてはまらない」、「あてはまらない」、「あまり

あてはまらない」、「どちらともいえない」、「ややあてはまる」、「あてはまる」、「非常によくあてはまる」の7件法を採用した。

結 果

恋人分離不安尺度の作成

欠損値のある回答，現在及び過去の恋人や友人以外の人物を念頭においた回答，個人名が書かれている回答，誰を念頭に答えたのかが不明な回答 109 名を分析から除外した。恋人分離不安尺度に対して現在の恋人を念頭に回答した者が 212 名，過去の恋人を念頭に回答した者が 107 名，異性の友人を念頭に回答した者が 126 名，同性の友人を念頭に回答した者が 107 名であった。

現在の恋人を念頭に回答した者のデータを用いて恋人分離不安尺度の探索的因子分析を行った（Table 2）。固有値が 4.87, 1.13, 0.91, 0.70 と推移したことと，解釈可能性から 1 因子が妥当であると判断した。そこで，単一の因子への負荷量が .40 未満であることを除外基準とし，因子数を 1 に固定して最尤法を用いて分析を行った。その結果，全ての項目が採用された（累積説明率 48.72%）。信頼性係数を算出したところ，十分な信頼性が得られた ($\alpha=.87$)。

対象の違いと恋人分離不安

仮説 1 の恋人分離不安尺度の判別的妥当性を確認するために，回答対象別の「現在の恋人」条件 ($M=5.28, S.D=1.09$)，「過去の恋人」条件 ($M=4.41, S.D=1.50$)，「異性の友人」条件 ($M=3.97, S.D=1.48$)，「同性の友人」条件 ($M=3.78, S.D=1.32$) からなる 1 要因参加者間分散分析を行った。その結果，群間に有意な主効果がみられた ($F(3,551)=42.26, p<.01, \eta^2=.19$)。HSD 法を用いた多重比較の結果，「現在の恋人」条件群が，他の条件群に比べて恋人分離不安得点が有意に高く，「過去の恋人」条件群が「同性の友人」条件群に比べて有意に高かった。よって，恋人分離不安尺度の判別的妥当性が確認された。

Table 2
恋人分離不安尺度の因子分析結果

恋人分離不安	項目	因子行列	<i>M</i>	<i>SD</i>
x3	自分のことを考えていてほしいと思う	.78	5.49	1.44
x4	会えないと何となく寂しい	.76	5.82	1.25
x6	相手に関心を持ってくれなかったり、拒否的に振る舞われると不安になる	.71	5.69	1.46
x2	離れていてとても寂しく感じる	.71	5.40	1.51
x7	相手がいなくなってしまうことを考えると悲しく無気力になってしまう	.70	5.18	1.66
x5	相手を独占したいと思う	.65	4.45	1.91
x10	心が離れてしまうことに対する不安がある	.65	5.17	1.73
x1	寂しいとき側にいて欲しいと思う	.60	6.43	0.98
x9	その人さえいれば満たされている	.53	4.18	1.87
x8	何をしているときでも相手のことが頭から離れない	.40	4.98	1.99

考 察

研究1－2では、現在交際中の恋人に対して生じる不安を測定するために、愛着の分離不安に着目して、恋人への分離不安を測定する尺度の開発を試みた。「現在の恋人」条件群が「過去の恋人」条件群、「異性の友人」条件群、「同性の友人」条件群に比べて恋人分離不安が強かったことより、恋人分離不安尺度は恋人に対して生じる分離不安を適切に測定できる項目群より構成されていると考えられる。

ただし、全体的に平均点が高い項目が多いことから、天井効果が生じる可能性があることは留意すべき点である。また、Zeifman & Hazan(2000)で想定されているように、恋人への分離不安が交際期間の長期化に伴い低減していくかどうかについては縦断研究による調査が必要である。

以上のような課題を残すものの、本論文で必要となる恋愛関係内で生じる現在の恋人に対する固有の不安を測定することを想定した恋人分離不安尺度の開発に成功した。

第3節 共依存と恋人分離不安による媒介ルートの検討（研究1-3）

研究1-3ではでは恋人支配行動の生起について、共依存と恋人分離不安の観点から検討する。具体的には、個人の特性変数、恋人との関係変数、及びそれらの組み合わせについて検討する。特に、個人の特性変数を持つ者が交際中の恋人との関係変数の変化を契機として恋人支配行動が生起するという媒介ルートの妥当性について検討を行う。

ところで、研究1-1で開発した恋人支配行動尺度は2つの因子に大別されたことから、恋人支配行動の種類によって生起の機序が異なるかどうかについても合わせて検討する。もしも、種類によって生起の内実が異なるのであるならば、恋人支配行動はその内容によって異なる議論が必要ということになる。反対に、生起の機序が同じであるならばどのような恋人支配行動であっても同一に取り上げて考えていくことが可能といえる。

なお、ここでは共依存にある関係に焦点をあてるわけではなく、個人の共依存特性と恋人支配行動との関連についての知見を収集するための調査と位置づけて検討を行うこととした。そのため、本研究は二者の相互作用からなる共依存関係ではなく、個人の共依存特性と恋人支配行動との関連について限定して議論を行うこととする。

媒介分析

研究目的を達成するための主要な分析として、ここでは媒介分析を行う。媒介分析とは、説明変数と目的変数の影響関係に媒介する変数を設定して行う分析のことである（村山，2009）。説明変数から目的変数への影響を直接効果と呼び、説明変数から媒介変数を経由した目的変数への影響を間接効果と呼ぶ。媒介分析には主に3つの結果がある。媒介変数を投入後に間接効果が有意で直接効果が有意から非有意となる完全媒介（媒介変数によって説明変数と目的変数の影響関係が完全に説明されている）、間接効果が有意で直接効果も有意な状態から依然として有意な状態にある部分媒介（媒介変数によって説明変数と目的変数の影響関係が部分的に説明されている）、そして直接効果が有意であるものの間接効果が見られない非媒介の3つである。媒介分析は、直接効果が有意であることが大前提となる。なぜなら二変数間の影響関係が認められない状態で、第三の変数による媒介を検討することはおかしな話だからである。

媒介分析を行い間接効果がみられた場合、ブートストラップ法を用いた信頼区間を

算出することで検定の精度を確認することが多い。ブートストラップ法とは、ローデータより疑似データセットを作成する方法であり、広く知られた再標本抽出法の1つである。母集団の推定に関する様々な用途で使用されるが、媒介分析ではブートストラップ法による疑似データを用いて繰り返し分析を行い、そこから算出された信頼区間を検定精度の指標の1つとして用いることが一般的である。また、小さな標本であっても1000回程度の反復を行えば良好な推定を行うことが可能である点もブートストラップ法の利点である。

方 法

調査時期

2014年4月から5月にかけて質問紙調査を行った。

調査対象者

A大学の学生を対象に調査を行い、282名から回答を得た。分析には恋人がいる者で欠損値のない者のうち、恋人支配行動尺度の全項目に最低点をつけた9名を除いた48名（男性19名、女性29名；平均年齢19.27歳、 $S.D=1.55$ ）を対象とした。恋人支配行動尺度の全項目に最低点をつけた者、すなわち恋人支配行動が全く生じていない者を除外する手続きを行った理由は、研究3があくまでも恋人支配行動の生起モデルに焦点をあてたものであり、一般青年の恋人支配行動の実態に着目したものではないためであった。

質問紙

恋人支配行動尺度 研究1-1で開発した恋人支配行動尺度（「暴力的支配行動」5項目、「束縛的支配行動」5項目）を用いた。

恋人分離不安尺度 研究1-2で開発した恋人分離不安尺度（1因子10項目）を用いた。

共依存を測定する尺度 前田他（2007）が開発した対人関係における共依存を測定する尺度を用いた。この尺度は、「自己犠牲」因子7項目と「未熟性」因子6項目の2因子から構成されるものであった。

恋人支配行動尺度と恋人分離不安尺度は7件法（1～7点満点）、共依存尺度は5件法（1～5点満点）を用いた。

結 果

各下位尺度の基礎統計量

各下位尺度の基礎統計量を男女ごとに算出した (Table 3)。交際期間の平均値より、分析結果はあくまでも1年を少し過ぎた程度の恋愛関係における知見ということに留意する必要がある。また、束縛的支配行動得点にフロア効果が疑われるものの、極端な逸脱ではないとみなして分析を続行することとした。2つの恋人支配行動に性差がみられるかを検討するため、それぞれの恋人支配行動得点について F 検定を行い、どちらも有意差がみられたことから Welch の t 検定を行った。その結果、暴力的支配行動と束縛的支配行動のどちらにも有意差はみられなかった (暴力的支配行動得点: $F(18, 28) = 0.41, p < .05; t(46) = 1.68, n.s, d = .14$, 束縛的支配行動得点: $F(18, 28) = 0.32, p < .01; t(45) = 1.76, n.s, d = .47$)。そこで、以後の分析では男女を込みにした分析を行うこととした。

Table 3
各尺度の平均値と標準偏差

		交際期間(月)	恋人分離不安	共依存		恋人支配行動	
				自己犠牲	未熟性	暴力的 支配行動	束縛的 支配行動
男性群 (n=19)	<i>M</i>	10.61	4.71	3.66	2.48	2.21	1.46
	<i>S.D</i>	8.31	1.22	0.70	0.75	0.58	0.55
女性群 (n=29)	<i>M</i>	15.31	4.55	3.65	2.61	2.32	1.86
	<i>S.D</i>	16.17	1.24	0.63	0.86	0.92	0.98
全 体 (n=48)	<i>M</i>	13.45	4.61	3.65	2.56	2.28	1.70
	<i>S.D</i>	13.80	1.24	0.65	0.82	0.80	0.86

共依存，恋人分離不安，恋人支配行動の媒介分析

はじめに，恋人支配行動の暴力的支配行動因子を目的変数，共依存の自己犠牲因子を目的変数，恋人分離不安を媒介変数とした媒介分析を行った（Figure 5）。その結果，恋人分離不安を媒介した効果はみられず，自己犠牲因子から暴力的支配行動への直接効果もみられなかった。暴力的支配行動を束縛的支配行動にかえて同様の分析を行ったところ（Figure 6），こちらも恋人分離不安を媒介した効果はみられなかった。

次に，恋人支配行動の暴力的支配行動因子を目的変数，共依存の未熟性因子を目的変数，恋人分離不安を媒介変数とした媒介分析を行った（Figure 7）。その結果，恋人分離不安を媒介した効果はみられなかったものの，未熟性因子から暴力的支配行動への直接効果がみられた。暴力的支配行動の束縛的支配行動にかえて同様の分析を行ったところ（Figure 8），恋人分離不安を媒介した効果がみられ，未熟性因子から束縛的支配行動への直接効果もみられた。

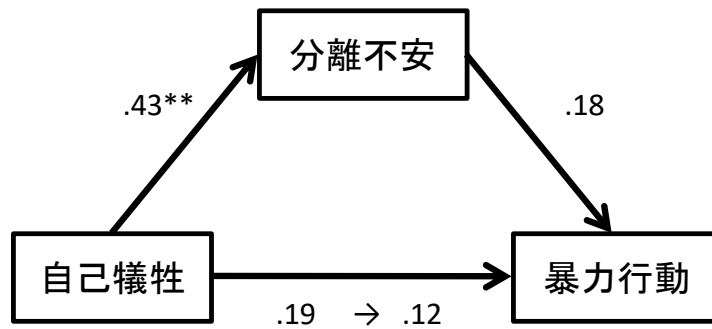


Figure 5 自己犠牲, 恋人分離不安, 暴力的支配行動の媒介分析

** $p < .01$

*注1 図内の.19→.12の値は, 恋人分離不安を投入する前後の自己犠牲因子と暴力的支配行動因子の影響関係を表している。すなわち, 元々の自己犠牲因子と暴力的支配行動因子の影響関係が.19であり, 媒介変数として恋人分離不安因子を投入後に自己犠牲因子と暴力的支配行動因子の影響関係の値が.19から.12に変化したことを示している。

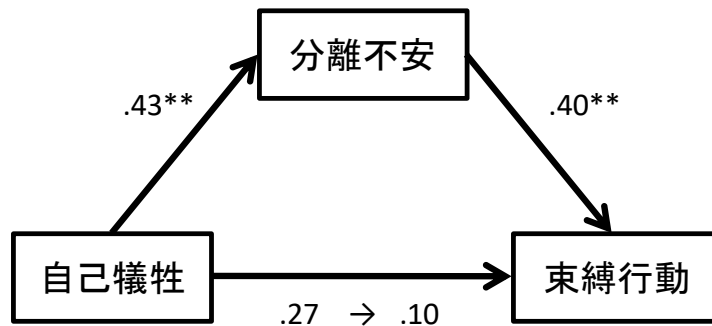


Figure 6 自己犠牲, 恋人分離不安, 束縛的支配行動の媒介分析

** $p < .01$

*注2 図内の.27→.10の値は, 恋人分離不安を投入する前後の自己犠牲因子と束縛的支配行動因子の影響関係を表している。すなわち, 元々の自己犠牲因子と束縛的支配行動因子の影響関係が.27であり, 媒介変数として恋人分離不安因子を投入後に自己犠牲因子と束縛的支配行動因子の影響関係の値が.27から.10に変化したことを示している。

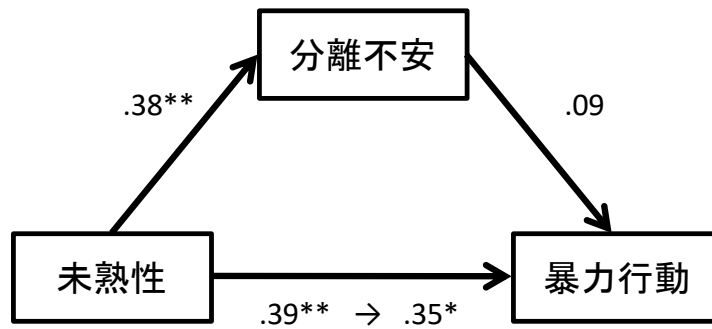


Figure 7 未熟性, 恋人分離不安, 暴力的支配行動の媒介分析

** $p < .01$, * $p < .05$

*注3 図内の.39→.35の値は、恋人分離不安を投入する前後の未熟性因子と暴力的支配行動因子の影響関係を表している。すなわち、元々の未熟性因子と暴力的支配行動因子の影響関係が.39であり、媒介変数として恋人分離不安因子を投入後に未熟性因子と暴力的支配行動因子の影響関係の値が.39から.35に変化したことを示している。

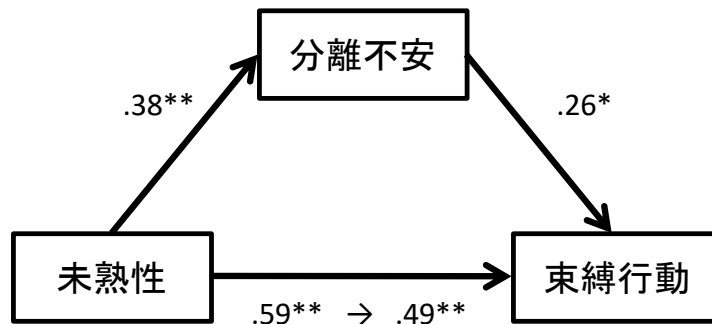


Figure 8 未熟性, 恋人分離不安, 束縛的支配行動の媒介分析

** $p < .01$, * $p < .05$ (ブートストラップ信頼区間 0.02 (95%下限), 0.24 (95%上限))

*注4 図内の.59→.49の値は、恋人分離不安を投入する前後の未熟性因子と束縛的支配行動因子の影響関係を表している。すなわち、元々の未熟性因子と束縛的支配行動因子の影響関係が.59であり、媒介変数として恋人分離不安因子を投入後に未熟性因子と束縛的支配行動因子の影響関係の値が.59から.49に変化したことを示している。

考 察

研究1－3では個人の特性変数として共依存を、恋人との関係変数として恋人分離不安を取り上げ、共依存と恋人分離不安から恋人支配行動の生起モデルを検討した。

恋人支配行動の下位因子のうち、暴力的支配行動は共依存の未熟成との関連がみられ、恋人分離不安による媒介はみられなかった。これは、恋人への暴力的な支配行動は個人の特性変数から生じることを示すものである。恋人への暴力的な支配行動は、暴力の誘因となる特性を持つ者が選択しやすい行動であり、交際する恋人の性格や価値観あるいは現在の恋愛関係の良好さや満足度といったものとは無関係にどのような交際相手に対しても生じてしまう可能性があるといえる。

もう1つの恋人支配行動の下位因子である束縛的支配行動は、共依存の未熟性から恋人分離不安を媒介して生じていた。この媒介は部分的なものであり、媒介後の影響を取り除いた後も、共依存の未熟性から束縛的支配行動に対して直接的な影響が確認された。すなわち、誘因となる特性を持つ者が恋人への関係破綻への不安の高まりを引き金として束縛的な行動を引き起こす場合と、暴力的な行動と同様にそもそもそのような誘因を持つ者が束縛的な行動を引き起こす場合の2通りがあることを示すものであったといえる。

恋人支配行動の生起の検討にあたり、本論文では先行研究から個人の特性変数、恋人との関係変数、個人の特性変数が恋人との関係変数を媒介して恋人支配行動が生起するという3つのモデルを想定した。知見を整理すると、恋人支配行動の暴力的支配行動は個人の特性変数を背景として生じるといえ、束縛的支配行動は個人の特性変数及び個人の特性変数を元に恋人に対する関係変数を媒介して生起するといえる。従来示されてきた恋人支配行動と個人の特性変数との関連に加えて、個人の特性変数が恋人に対する関係破綻への不安の高まりを契機として恋人支配行動の生起が予測可能であることを立証した点が、この領域を鑑みた時に本論文で得た新たな知見であったといえる。さらに、恋人支配行動はその種類によって心理的な機序が異なることも示された。恋人支配行動の誘因や生起条件に関する研究及び予防や防止に向けた研究は行動ごとに行う必要があることといえよう。

第4節 研究1全体のまとめ

研究1ではまず恋人支配行動と恋人分離不安尺度の開発を行い、それぞれ信頼性と妥当性を有する尺度が開発できた。その後、それらを用いて共依存と恋人分離不安から恋人支配行動の生起を検討した。その結果、個人の特性変数を元に恋人との関係変数が媒介することで恋人支配行動が生起する場合があること、恋人支配行動の種類によって生起に関する機序が異なることを明らかにした。

ただし、現在の恋人との関係変数は恋人への好意や愛情といった他の様々な変数も存在することから、それらの組み合わせによる恋人支配行動の生起条件についてはここでは明らかにできていない。また、恋人支配行動の頻度は交際期間の長期化に伴い増加するという指摘がある（相羽・荒井, 2014; Bookwala, et al., 1992; 高坂, 2012）。恋愛関係における愛着の形成は約2年の月日がかかるとされることから（Hazan & Zeifman, 1994）、約1年程度という調査対象者の交際期間の平均より、研究1で得た知見はあくまで交際が長期化していない群に限定したものであると考える。これらの課題については、研究2でさらに検討を行っていくこととする。

第5章 恋人への分離不安と愛情及び交際期間が恋人支配行動に及ぼす影響（研究2）

研究1では恋人支配行動の誘因となる個人の特性変数と恋人に対する関係破綻への不安から恋人支配行動の生起を検討した。その結果、恋人への暴力は個人の特性変数から、束縛は個人の特性変数や個人の特性変数を元に現在の恋愛における関係破綻への不安を媒介して生じることが明らかとなった。

ただし、研究1では不安以外の現在の恋人や恋愛に対する心理的な変数については取り上げていない。現在の恋人との変数は恋人への好意や愛情といった他の様々なものも存在することから、それらの組み合わせによる恋人支配行動の生起条件については明らかにできていない。また、研究1の調査対象者の交際期間は約1年程であったことから、研究1で得た知見はあくまで交際が長期化していない恋愛関係に限定したものであると考えられる。恋人支配行動の頻度は交際期間の長期化に伴い増加するという指摘があることから（相羽・荒井，2014; Bookwala, et al., 1992; 高坂，2012）、交際期間の長さについても検討の余地がある。研究2では恋人や恋愛に対する心理的な変数を取り上げてその組み合わせについても検討を行い、交際期間についても合わせて検討を行っていく。なお、恋愛関係における愛着の形成は約2年の月日がかかるとされることから（Hazan & Zeifman, 1994）、本論文では2年を境として、2年程度の恋愛関係を交際が長期した関係と考えることとする。

現在の恋人との関係変数として、研究2では恋人支配行動との関連が報告されている2つの変数を取り上げる。1つは恋人に対する強い愛情であり、強い愛情は恋人支配行動の誘因となることがわかっている（例えば寺島他，2013）。もう1つは先にも述べた恋愛関係における交際期間である。恋人に対する強い愛情や長期の交際期間は親密な恋愛関係の構築において不可欠であることはいうまでもないが（Hazan & Zeifman, 1994; Sternberg, 1986）。それにも関わらずこれらの変数が恋人支配行動と関連するという事実は、本論文の観点からは恋愛関係が親密であるが故に、その関係を手放すのではなく維持したいがために恋人支配行動が生じている可能性があると考えられる。

研究2では関係破綻への不安として恋人分離不安を、先行研究で関連がみられている恋人への愛情と交際期間を取り上げて、恋人支配行動との関連について検討を行う。

ここでの恋人への愛情と交際期間は統制変数としての位置づけであるとともに、恋人分離不安との組み合わせについても検討を行うことで、どのような条件が揃った時に恋人支配行動が生起していくのかについて検討を行っていく。

階層的重回帰分析

研究目的を達成するための主要な分析として、研究2では階層的重回帰分析を行う。階層的重回帰分析とは、変数の投入順序に階層性を持たせて重回帰分析を行うことで共変量をコントロールした上で関心ある変数の予測力を明示的に検証することができるものであり、重回帰分析の枠組みを拡張した分析方法である。最もシンプルなモデルを例に挙げると、初めの回帰分析（一般的に Step 1 と呼ぶ）で説明変数に A という変数を投入し、次の回帰分析（一般的に Step 2 と呼ぶ）で説明変数に A という変数に加えて B という変数を加えるものである。先の例でいえば Step 1 で A の説明力及びモデル全体の説明力と適合度を、Step 2 で A+B の説明力とモデル全体の説明力及び適合度を算出する。さらに、Step 2 から Step 1 を減算することで B の説明力及びモデル全体の説明力の変化量 (ΔR^2) を明らかにすることができる。説明力の変化量の値とその値に対する統計的な検定を通して、新しく加えた変数が予測にどの程度重要であるかを知ることができる。

説明変数の予測に対する重要性の判断だけでなく、疫病学や人口統計学では性別や年齢といった基本的属性の影響力を除去した上で関心がある変数群の影響力を検討する際に階層的重回帰分析を用いることも多い（「変数セット」間の説明力の検討という言い方をする場合もある）。具体例として、ガンに対する疾病率を予測するにあたり、Step 1 で基本的属性データ（性別、年齢、年収、居住地、配偶者の有無など）を投入し、Step 2 で関心があるリスクファクター（喫煙習慣、飲酒量、食生活など）を投入するといった具合である。上記の例でいえば、Step 2 から Step 1 の説明力を減算することで基本的属性群の影響力を除外した上での純粋なリスクファクター群のみの説明力（すなわちモデル全体の説明力の変化量 (ΔR^2) を算出することができる。その後の流れは、説明力の変化量が統計的に有意かどうか、有意であるならばどの変数が有意かどうかを検定する。

また、心理学では交互作用の検討と言う観点から階層的重回帰分析を行う研究が増えている。例えば、睡眠不足とストレス経験の交互作用から病理の発症を予測したい

第5章 恋人への分離不安と愛情及び交際期間が恋人支配行動に及ぼす影響
(研究2)

という時に、主効果（睡眠不足、ストレス）を説明変数とし、交互作用の効果（睡眠不足×ストレス）を追加するという手順を踏む。すなわち、主効果の影響力を把握した上で交互作用の効果を検証するのである。このように分析を行うことで、交互作用全体の説明力を明らかにすることや、変数が多い場合に1次の交互作用、2次の交互作用のどこまでを投入すべきかを判断することなどもできる。

また、従来量的尺度の交互作用を検討したい場合は一度質的データに変換して分散分析を行うことが多かったが、そのような方法は基準点が恣意的になるという問題を抱えていた。階層的重回帰分析を用いればこのような問題も解決することができる。

重回帰分析における交互作用項を投入した最も単純なモデルは $y=ax+by+ax \times by$ で表わされる。この乗算の部分が交互作用項を意味している。無論、乗算以外の交互作用項の作り方も数多くあるが、線形を仮定した分析の多くは乗算で作成した項で網羅できるとされている。ただし、乗算によって作成した交互作用項を投入してしまうと多重共線性の危険性を高めてしまうことになる（交互作用項 $ax \times by$ と交互作用項を作成するために用いた変数 ax 及び by が高い相関関係を示すためである）。

重回帰分析は説明変数間が独立の関係であることが前提であるが（ある程度は相関関係にあっても問題とはならないとされている）、説明変数間に著しく高い相関関係が見られた場合、説明変数による予測に対してその他の分散で説明できる割合が大きくなってしまい、推定量が不安定になる。この現象を多重共線性と呼び、多重共線性が見られた場合は推定精度が信頼できないため、結果を棄却しなければならない。多重共線性の指標としては VIF(Variance Inflation Factor)がある。VIF は、他の変数を加えたことで単回帰分析を行った場合の係数の推定量の分散が何倍大きくなったかを表す指標である。すなわち、説明変数の説明量に対する分散の説明量の比率のような指標である。この値が大きければ大きいほど、回帰モデルは説明変数以外の「何か」で説明される部分が大きいということになってしまい、モデルの推定が不安定になってしまう（場合によっては本来正の値であるはずの標準偏回帰係数が負になってしまうというようなことも起こる）。VIF がどの程度の値を超えると多重共線性とみなすかについては明確な基準があるわけではないが、慣例的に人文科学では VIF の値が 10 以上、近年では VIF の値が 5 を超えると問題視するという風潮がある。

そこで、階層的重回帰分析で交互作用を検討する場合は、必ず中心化した値を用いて交互作用項を作成しなければならない。交互作用項作成の際の中心化の仕方には

第5章 恋人への分離不安と愛情及び交際期間が恋人支配行動に及ぼす影響
(研究2)

様々なものがあるが、データの全体平均から1つ1つのデータごとに偏差を算出して新しいデータ行列を作成するものがよく見受けられる。中心化を行うことにより、目的変数に対する説明変数の影響力は一切変わらないにも関わらず、交互作用項 ($ax \times by$) と交互作用項を作成するために用いた変数 (ax 及び by) の相関関係は著しく低下する。ただし、ここでの中心化はあくまでも相関係数を低下させるためのテクニク的な意味合いが強く、また、中心化を行ったとしても必ずしも多重共線性を回避できるわけではない。

階層的重回帰分析において交互作用が有意であった場合、どのような交互作用がみられたのかをさらに検討していく。いくつかの方法があるが、現在最もよく使われているものの1つが単純傾斜検定である。これは、回帰直線に対して任意の2点を取り、その傾きを t 検定により検討するものであり、その簡便性からよく用いられる方法である。任意の2点の取り方には Cohen & Cohen (1985) が提案した変数 ± 1 SD がよく用いられる。上述したモデル $y = ax + by + ax \times by$ において交互作用項が有意であった場合、 $ax - 1$ SD における $by - 1$ SD 及び $by + 1$ SD の値 (ax が低い場合、 by が増加するほど目的変数の値が変化するか)、 $ax + 1$ SD における $by - 1$ SD 及び $by + 1$ SD の値 (ax が高い場合、 by が増加するほど目的変数の値が変化するか)、 $by - 1$ SD における $ax - 1$ SD 及び $ax + 1$ SD の値 (by が低い場合、 ax が増加するほど目的変数の値が変化するか)、 $by + 1$ SD における $ax - 1$ SD 及び $ax + 1$ SD の値 (by が高い場合、 ax が増加するほど目的変数の値が変化するか) を検定する。

階層的重回帰分析における交互作用項の分析と解釈は、大きな意味では分散分析の交互作用が有意であった場合に行う単純主効果検定とほぼ同じである。なぜならば、階層的重回帰分析と分散分析はどちらも一般化線形モデルという数理的枠組みを用いているからである。そのため、重回帰分析における交互作用項の分析は分散分析と同様に全ての組み合わせを検定する必要はなく、差の有無を検討したい箇所について検定してもよい。また、重回帰分析における交互作用のグラフは線形で表す場合が一般的である。その理由について明示した著書や研究はあまり見当たらないが、おそらくは個人のデータから ± 1 SD データを疑似的に生成して連続した回帰直線として検討するために、疑似データを参加者内データとみなして折れ線グラフを用いて表現しているものだと考えられる。ただし、慣例的な側面もあるため今後表現方法が変わる可能性もある。

研究2では、恋人支配行動と恋人分離不安、恋人に対する愛情、交際期間との関連を検討するが、すべての変数が量的データであり、なおかつ交互作用についても検討するため、階層的重回帰分析を行うこととした。

方 法

調査時期

2011年9月に調査を行った。

調査対象者

調査対象者は大学生586名(男性233名,女性352名,不明1名,平均年齢19.67, $S.D=2.64$)であった。

使用した質問紙

全ての尺度において、回答は「まったくあてはまらない」、「あてはまらない」、「あまりあてはまらない」、「どちらともいえない」、「ややあてはまる」、「あてはまる」、「非常によくあてはまる」の7件法を採用した。

恋人支配行動 研究1-1で開発した18項目からなる恋人支配行動尺度を用いた。

恋人分離不安 研究1-2で開発した10項目からなる恋人分離不安尺度を用いた。

恋人に対する愛情 恋人に対する愛情を3つの観点から測定するTLS (Triangular Love Scale; Sternberg, 1986)を用いた。TLSは親密性因子(○○とはうまくコミュニケーションがとれている, など10項目), 情熱因子(ふと気がつくとき○○のことを考えている時がよくある, など10項目), コミットメント因子(私と○○との関わりは揺るぎないものである, など7項目)によって構成されている。調査では金政・大坊(2003)が日本語訳した尺度を用いた。

結 果

恋人支配行動と恋人分離不安、愛情、交際期間との関連

研究1で開発した恋人支配行動尺度の各因子の平均得点(暴力的支配行動 $M=1.48$, $S.D=0.92$; 束縛的支配行動 $M=1.75$, $S.D=0.99$)と、研究2で開発した恋人分離不安尺度の平均得点 ($M=4.85$, $S.D=1.17$), 愛情の3因子の各平均得点(親密性 $M=5.43$,

第5章 恋人への分離不安と愛情及び交際期間が恋人支配行動に及ぼす影響
(研究2)

$S.D=1.00$; 情熱 $M=4.76$, $S.D=1.26$; コミットメント $M=4.23$, $S.D=1.36$), 交際期間 ($M=18.94$, $S.D=25.00$) との関連を検討する。7件法を用いた他の指標と異なり, 交際期間のみ回答の値に上限がない指標となっている。回答のばらつきが大きいことから, 交際期間は値を対数変換して分析に用いた。

恋人分離不安, 愛情の3要素, 交際期間, 及びそれらの交互作用項を目的変数, 恋人支配行動の各因子を目的変数として, 目的変数の中心化を行った後に階層的重回帰分析を行った (Table 4)。

どちらの目的変数に関しても, 第1ステップで目的変数に恋人分離不安, 愛情, 交際期間の値を投入し, 第2ステップで各変数の1次の交互作用項を, 第3ステップで2次の交互作用項を, 第4ステップで3次の交互作用項を投入した。その結果, 暴力的支配行動ではステップ2で R^2 の変化量が有意となり ($F(10,156)=2.43$, $p<.01$), ステップ3で R^2 の変化量が有意でなくなり ($F(10,146)=1.73$, $n.s$), ステップ4では R^2 の変化量は有意となった ($F(5,141)=2.33$, $p<.05$)。それぞれのステップにおける各変数のVIFを確認したところ, ステップ2では1.22~4.42, ステップ3では2.91~12.28, ステップ4では2.51~15.43であった。VIFの値を考慮して, ここではステップ2のモデルを採択した。束縛的支配行動では, ステップ2で R^2 の変化量が有意となり ($F(10,156)=3.00$, $p<.01$), ステップ3 ($F(10,146)=1.49$, $n.s$) とステップ4 ($F(5,141)=0.76$, $n.s$) では R^2 の変化量は有意でなかった。ステップ2における各変数のVIFを確認したところ1.22~4.42であったため, 特に問題なしと判断してこのモデルを採択した。

暴力的支配行動及び束縛的支配行動のどちらも, 恋人分離不安と交際期間の有意な交互作用がみられた。

第5章 恋人への分離不安と愛情及び交際期間が恋人支配行動に及ぼす影響
(研究2)

Table 4
2つの恋人支配行動に対する階層的重回帰分析の結果

投入した変数	暴力的支配行動		束縛的支配行動	
	ステップ1	ステップ2	ステップ1	ステップ2
	β		β	
恋人分離不安	-.10	-.07	.24*	.26*
親密性	-.16	-.18	-.18	-.25**
情熱	-.07	-.09	-.10	-.09
コミットメント	.24	.22	.19	.20
交際期間	.07	.13	.15	.24**
恋人分離不安×親密性		.15		.18
恋人分離不安×情熱		.11		-.08
恋人分離不安×コミットメント		-.27		.16
恋人分離不安×交際期間		.22*		.37**
親密性×情熱		-.26		-.15
親密性×コミットメント		-.15		-.16
親密性×交際期間		.12		.11
情熱×コミットメント		.21		.06
情熱×交際期間		-.16		-.14
コミットメント×交際期間		-.04		-.05
R^2	.04	.17	.09	.24
R^2 (adjusted)	.01	.09	.06	.16
F	1.47	2.15**	3.32**	3.24**
df	(5,166)	(15,156)	(5,166)	(15,156)
ΔR^2		.13		.15
F for ΔR^2		2.43**		3.00**

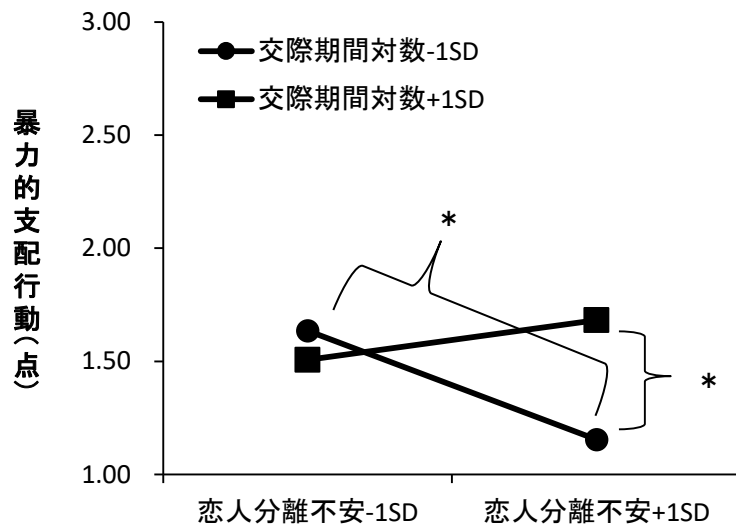
** $p < .01$, * $p < .05$

暴力的支配行動に対する交互作用の効果

暴力的支配行動に対する恋人分離不安と交際期間の交互作用の効果を調べるために Cohen & Cohen (1983) の方法に従って単純傾斜の検定を行った (Figure 9)。交際期間が短い場合は恋人分離不安が高いほど暴力的支配行動が低下した ($t(168)=2.36, p<.05$)。交際期間が長い場合は恋人分離不安の違いによって暴力的支配行動に有意差はみられなかった ($t(168)=0.92, n.s$)。また、恋人分離不安が低い場合は交際期間の違いによって暴力的支配行動に有意差はみられなかったが ($t(168)=0.71, n.s$)、恋人分離不安が高い場合は交際期間が長いほど暴力的支配行動が増加した ($t(168)=2.45, p<.05$)。なお、単純傾斜の検定では平均値 ± 1 SD の値の傾きについて有意差があるかどうか検討を行うが、交際期間の平均値が約 19 カ月であることから交際期間 -1 SD は1年未満の交際が短い恋愛関係をさし、交際期間 $+1$ SD は2年以上の交際が長期化した恋愛をさしている。

これらの分析から、交際期間が長期化する中で強い恋人分離不安を保ったままですと、暴力的支配行動が低減しないことが示された。

第5章 恋人への分離不安と愛情及び交際期間が恋人支配行動に及ぼす影響
(研究2)



* $p < .05$

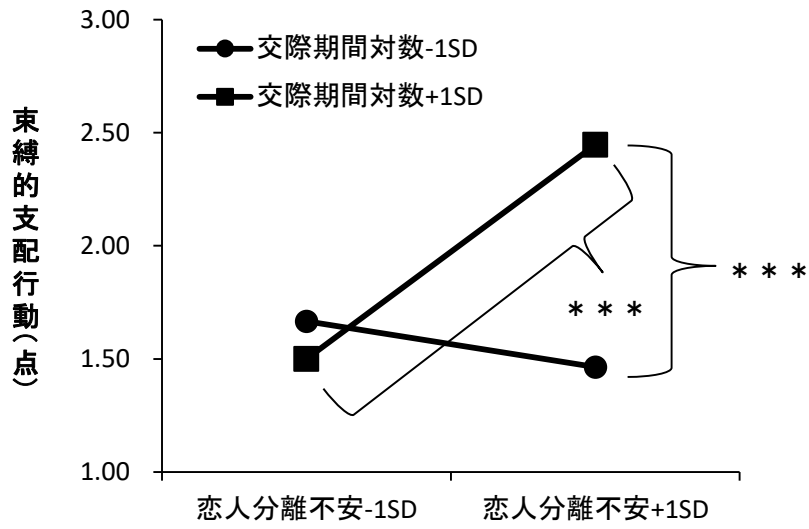
Figure 9 暴力的支配行動に対する恋人分離不安と交際期間の交互作用

束縛的支配行動に対する交互作用の効果

束縛的支配行動に対する恋人分離不安と交際期間の交互作用の効果を調べるために、単純傾斜の検定を行った (Figure10)。束縛的支配行動に対する恋人分離不安と交際期間の交互作用については、交際期間が短い場合は恋人分離不安の違いによって束縛的支配行動に有意差はみられなかったが ($t(168)=0.98, n.s$)、交際期間が長い場合は恋人分離不安が高いほど束縛的支配行動が高かった ($t(168)=4.88, p<.001$)。また、恋人分離不安が低い場合は交際期間の違いによって束縛的支配行動に有意差はみられなかったが ($t(168)=0.91, n.s$)、恋人分離不安が高い場合は交際期間が長いほど束縛的支配行動が増加した ($t(168)=4.48, p<.001$)。

このことから、長期の交際期間と強い恋人分離不安という条件が揃うと、束縛的支配行動が促進されるといえる。

第5章 恋人への分離不安と愛情及び交際期間が恋人支配行動に及ぼす影響
(研究2)



*** $p < .001$

Figure10 束縛的支配行動に対する恋人分離不安と交際期間の交互作用

考 察

研究2では、現在の恋人に対する関係破綻への不安に加え、恋人への愛情と交際期間を取り上げて恋人支配行動との関連について検討を行った。恋人分離不安、愛情の3要素、交際期間、及びそれらの交互作用項を説明変数、恋人支配行動の各因子を目的変数とした階層的重回帰分析により検討した。その結果、恋人支配行動と関連を示したのは恋人分離不安と交際期間の組み合わせであった。交互作用の分析より、どちらの恋人支配行動も恋愛関係が長期化する中で恋人分離不安が低減しない場合に、恋人支配行動が生じることがわかった。

恋愛は関係初期には不安定であるものの、交際が長期に渡ることによって安定していくことが想定される関係である (Zeifman & Hazan, 2000)。すなわち、関係破綻への不安も関係初期から後期にかけて低減していくことが想定できる。本論文では愛着理論と配偶者維持行動の理論から恋人支配行動は破綻を回避するための関係維持方略の1つと位置づけて議論を行ってきたが、この観点に立ち本論文の結果を見てみると、交際の長期化に伴い本来ならば低減していくべき不安が低減されなかった場合、破綻の可能性あるいは破綻するかもしれないという心理的な不安を回避するための関係維持方略の1つとして、恋人支配行動が生起することを示唆する知見と解釈できよう。

また、恋人支配行動の生起に愛情が関連していなかったことについても触れておきたい。恋人支配行動の生起に関わる関係性の変数として強い愛情があげられる (例えば寺島他, 2013)。しかし、恋人に対する強い愛情は安定した恋愛関係の構築においても不可欠である (Sternberg, 1986)。恋人支配行動を関係維持行動として捉えた場合、恋人に対する強い愛情から関係破綻を望まないために恋人支配行動が生起することもあるかもしれない。しかしながら、愛情が強い恋愛関係の中には恋人支配行動が伴う関係があるものの、恋人支配行動が伴わない安定した恋愛関係があることも考えられる。愛情の強さから恋人支配行動をある程度予測することはできるが、少なくとも愛情の強さだけで恋人支配行動を伴う関係とそうでない関係を弁別することはできないことが示唆される。

以上のことより、研究2では恋人分離不安と交際期間の組み合わせにより恋人支配行動が生起することが明らかとなった。

第Ⅱ部全体のまとめ

研究1と研究2を通して得られた知見を整理し第Ⅱ部のまとめを行う。まず、恋人支配行動に想定された暴力的支配行動と束縛的支配行動を区別できる尺度を開発できた。この2つの生起条件には違いがあり、暴力的支配行動は個人の特性変数が誘因であるのに対して、束縛的支配行動は個人の特性変数に加えて関係破綻の不安を引き金として生起する場合があることがみいだされた。これに加えて、研究2では長期間の恋愛関係では強い不安を保ったままであることが恋人支配行動の誘因となることを示した。すなわち、交際の段階による不安の様相が恋人支配行動の生起と関連していること、そしてその生起条件を明らかにすることができたといえる。

短期間の恋愛関係において生じる恋人支配行動と長期間の関係において生じるそれは質的に異なる可能性が考えられる。交際初期は個人の特性変数をベースに恋人支配行動が生じることから、どのような恋人に対しても関係維持方略として恋人支配行動を選択してしまう者達がいるといえる。関係破綻への不安を伴う場合もあるが、いずれにせよ他の関係維持行動をとることができない者達であるとも解釈できる。長期間の恋愛関係における恋人支配行動は、恋愛が安定するために十分な時間があっても関わらず関係が安定しないために、破綻を回避するために生じる関係維持行動という側面が垣間見える。恋人支配行動は時間の違いによりその背景が異なる可能性についてはここでは指摘するに留まり、今後の検討課題としたい。

また、研究2では共依存特性などの個人の特性変数を統制変数として含めていなかったため、長期的な交際期間における個人の特性変数の影響については吟味していない。おそらく個人の特性変数は関係初期の恋人支配行動の生起に強い影響を及ぼすのに対して、関係の長期化に伴い、現在の恋愛関係内で生じる恋人分離不安の影響力が高まっていくことで相対的に個人の特性変数の影響力が下がっていくのではないかと考える。また、恋人分離不安の影響力は関係初期には個人の特性変数をベースに引き金としての役割を担うが、関係の長期化に伴い恋人支配行動の生起に強い影響を及ぼしていくのではないと思われる。すなわち、恋愛関係の中期的な段階で個人の特性変数と恋人分離不安の影響力の力関係が逆転する可能性があるといえよう。この点についてはさらなる検討の余地があるものの、恋人支配行動の生起は交際の時間における関係破綻への不安の持ち方によって予測されることを明らかにすることができた。

ここで、改めて恋人支配行動に対する本論文の想定を振り返ってみたい。本論文では恋人支配行動は恋愛の破綻を防ぐために生じる関係維持行動の1つと想定した。このことを実証するために、恋人支配行動と関係破綻の不安との関連及び恋人支配行動が恋愛関係との関連を検討することとした。研究を通して、恋人支配行動が関係破綻への不安より生じる関係維持行動の1つであるという想定が生起に関する部分については実証されたと考えられる。

この結果を受けて、次章では恋人支配行動が恋愛関係に及ぼす影響を検討する。恋人支配行動が恋愛関係を維持するように影響している場合、恋人支配行動は恋愛関係の維持に寄与する関係維持行動の1つと結論づけることができる。次章では、この点について詳細な検討を行っていく。

第Ⅲ部 恋人支配行動が恋愛関係に及ぼす 影響に関する検討

第Ⅲ章では、恋人支配行動が恋愛関係に及ぼす影響について検討する。本論文では、恋人支配行動は恋愛関係を維持するための関係維持方略の1つと想定して議論を行ってきた。他方、恋人支配行動は恋愛関係に悪影響を及ぼすことは多くの研究で実証されていることである。本件に関して、本論文では恋人支配行動の強度に着目し、強度が強い場合は恋愛関係に悪影響を及ぼすが、強度が弱い場合は関係維持に貢献するという想定を行い議論してきた。そこで、第Ⅲ部全体の目的は恋人支配行動が恋愛関係に悪影響を及ぼす条件とそうでない条件を強度の観点から明らかにすることであった。

第6章研究3では、強度が強い恋人支配行動が恋愛関係に及ぼす影響を検討する。まず、恋人支配行動尺度を構成する暴力的支配行動と束縛的支配行動の強度の強さについて項目反応理論を用いて確認する(研究3-1)。デートDVや攻撃行動の研究を元に尺度化した経緯より、2つの恋人支配行動は強い強度をもつものであることが予想される。その点を確認後、2つの強度が強い恋人支配行動は恋愛関係に悪影響を及ぼすかどうかについて検討する(研究3-2)。

第7章研究4では、2つの恋人支配行動の中でも特に束縛行動に着目し、強度が弱い束縛と強い束縛の尺度の開発を行い(研究4-1)、その後に弱い束縛と強い束縛が恋愛関係に及ぼす影響について検討する(研究4-2)。束縛行動に着目する理由は、強度の違いによって被害に対する認識が異なる可能性が考えられ、弱い束縛が関係維持に貢献することが予想されるためである。また、暴力行動について強度の強弱について検討しない理由は、強度が弱い暴力行動を想定することが難しいためである。

以上の2つの研究を通して、恋人支配行動が恋愛関係に及ぼす影響について検討し、恋人支配行動が恋愛関係に悪影響を及ぼす場合とそうでない場合について明らかにすることを第Ⅲ部の目的とした。

第6章 2つの恋人支配行動が恋愛関係に及ぼす影響 （研究3）

研究3では、心理的ダメージをもたらす強い強度の恋人支配行動が恋愛関係に及ぼす影響について検討を行う。

恋人支配行動に関する先行研究を概観すると、恋人支配行動は恋愛関係に悪影響を及ぼすことを示す知見が複数存在する（高坂，2009；内閣府，2012など）。確かに、恋人に心理的なダメージを与える可能性がある恋人支配行動は恋愛関係に悪影響を及ぼすのは自然なことのようと思われる。しかしながら、愛着理論や配偶者維持行動の理論からは恋人支配行動は行為者と被行為者の双方にとって恋愛関係を維持するための関係維持方略の1つと想定でき、恋人支配行動が恋愛の関係維持に寄与する場合があることを示唆する知見（京都市男女共同参画推進協会，2012；内閣府，2012；寺島他，2013など）も存在する。また、このことは本研究の研究1と研究2においても、示唆されている。

恋人支配行動が恋愛関係に及ぼす影響に関する正負の方向性を決定づけるのは行動により生じる心理的ダメージの程度であると考えられる。すなわち、恋人に与える心理的ダメージが強い場合は恋愛関係に悪影響を及ぼすものの、心理的ダメージが弱い場合は関係に悪影響を及ぼさず、場合によっては恋人に対する興味や関心の現れとして関係維持に貢献する可能性が考えられる。このことを実証する第1歩として研究3では、心理的ダメージをもたらす強い強度の恋人支配行動の行為経験と被行為経験が恋愛関係に及ぼす影響を検討する。

研究3では、まず本論文で開発した恋人支配行動尺度を取り上げて、下位尺度の暴力的支配行動と束縛的支配行動の心理的ダメージの強さについて項目反応理論を用いて確認する（研究3-1）。デートDVや攻撃行動の研究を元に尺度化した経緯より、2つの恋人支配行動は強度が強いものであると考える。その後、恋人支配行動が恋愛関係に及ぼす影響について検討を行う（研究3-2）。

なお、データ収集には本来ならばカップル調査を行うことが望ましいが、山田・山田（2010）では同一個人に行為経験と被行為経験を回答してもらい分析を行っていることから、研究3でも同様の方法を採用する。現在恋人がいる者を対象とした調査では調査対象者が少なくなりやすいという問題点が常につきまとう。この方法は対象

第6章 2つの恋人支配行動が恋愛関係に及ぼす影響（研究3）

者を確保するために適していることから本論文でも採用することとした。

第1節 恋人支配行動尺度の強度に関する検討（研究3-1）

研究3-1では恋人支配行動尺度を構成する暴力的支配行動と束縛的支配行動が強い強度を測定しているかどうかを項目反応理論により確認する。その後、恋人支配行動が恋愛関係の良好さに及ぼす影響について検討を行う。

項目反応理論は TOEFL などの世界的な語学試験で用いられるテスト理論の1つであり、収集したデータから項目の特性を算出することで回答者の特性に左右されずに測度の構築を行うものである。項目の特性としては、識別力と困難度という指標が算出される。識別力は項目の感度の良さを表し、識別力が高いほど回答者の特性を正確に反映する項目である。例えば識別力が高い不安を測定する項目は、不安が強い者は高い得点となり、不安が弱い者は低い得点となる。識別力が低い項目は不安が強い者が低い得点となったり、不安の強さに関わらず得点が一定になったりというように、測定概念に対する精度が低い項目と解釈できる。また、困難度は項目をクリアする際の難易度を意味し、ほとんどの人が解けないような問題は困難度が高く、誰でも解けるような問題は困難度が低くなる。間隔尺度における困難度は、例えば5件法において1から2へと値が上昇する際の通過率という意味合いを持つことから、回答した件法の値が低いほど困難度は高くなり、値が高いほど困難度は低くなる。すなわち、困難度は尺度がどの程度の特性の者に反応するかを明らかにするための指標と言い換えることができ、本論文の文脈で言えばどの程度の行動の強度を測定しているかを検討することができる。研究3-1では、恋人支配行動尺度について特に困難度を検討することで、尺度が測定する恋人支配行動の強度を確認する。

方 法

調査時期

調査は3度にわたって行った。1度目の調査は、2011年9月から2012年1月にかけてA専門学校で、2度目は2013年の5月にB大学で、3度目は2014年の4月から5月にかけて再びB大学で調査を行った。

調査対象者

大学生681名（1度目の調査、211名；2度目の調査、188名；3度目の調査、282名）で、分析対象者は欠損値を除いた現在恋人がいる182名（男性62名、女性

120名；平均年齢 19.67 歳， $S.D=2.55$ ）であった。

質問紙

尺度の回答は「全くあてはまらない（1点）」「あてはまらない（2点）」「あまりあてはまらない（3点）」「どちらともいえない（4点）」「ややあてはまる（5点）」「あてはまる（6点）」「非常によくあてはまる（7点）」の7件法で回答を求めた。

恋人支配行動尺度 研究1-1で開発した恋人支配行動尺度を用いた。調査では「あなたは〇〇に以下の行動を行いますか」という問いを用いた。

結果と考察

恋人支配行動の強度

恋人支配行動の下位因子である暴力的支配行動と束縛的支配行動のそれぞれについて、項目反応理論を用いて分析を行った（Table 5, Figure11, Figure12）。「どちらともない」（4点）から「ややあてはまる」（5点）へと移行する際の困難度4では暴力的支配行動は標準化した値で1.34～2.99の特性を測定しており、「あてはまる（6点）」から「非常によくあてはまる（7点）」へ移行する困難度6では最も低い項目の値で2.42、高い値で3.00を超えていた。この値は標準化した値であり、値の解釈はz得点化したものと同様である。すなわち、値が-2～2の間に約97%の者が集約される。従って、暴力的支配行動を構成する項目群は特性が2以上の者、つまり片側1.5%の暴力の特性を持つ者に反応する尺度であることを意味しており、強い暴力を行う者に対して反応する項目群から構成されているといえる。これは、言い換えれば暴力的支配行動は強度が強い暴力を測定する項目群からなると考えることができる。

束縛的支配行動は困難度4で約1.5～3.0程度の特性の値を計測していた。また、困難度6ではすべての項目で2を超える値を示していた。暴力的支配行動を構成する項目群ほどではないものの、束縛的支配行動を構成する項目群も、強い束縛の特性を持つ者に対して反応する構成となっており、強度が強い束縛を測定していると考えることができる。

以上の分析より、恋人支配行動を構成する下位尺度である暴力的支配行動と束縛的支配行動はどちらも心理的ダメージを与える強度が強い行動を測定していることが確

認された。

Table 5
項目反応理論を用いた恋人支配行動尺度の統計量

項目	識別力	困難度1	困難度2	困難度3	困難度4	困難度5	困難度6
OOをわざといやな呼び名で呼んだり、馬鹿にしたりする。	1.51	0.25	0.78	0.95	1.34	1.98	2.42
OOを人前でバカにしたり、他人にOOの悪口を言う。	0.96	0.77	1.41	1.95	2.31	2.77	3.31
暴力的支配行動 OOを押したり、つかんだり、つねったりする。	1.07	0.98	1.33	1.64	1.85	2.42	2.75
刃物などでOOを傷つけようとする。	4.48	1.88	2.06	2.18	2.35	2.61	
OOに性的行為を無理強いしたことがある。	0.84	1.59	2.22	2.41	2.99	3.32	
OOにメールを返すことを強制する。	1.62	0.63	0.97	1.31	1.41	1.94	2.16
OOのメールを勝手に見る。	1.26	1.01	1.22	1.33	1.68	2.34	2.72
束縛的支配行動 OOが自分よりも友人を優先すると私は怒る。	1.24	0.51	0.95	1.22	1.66	2.19	2.59
OOと喧嘩をするとすぐに別れ話を持ち出してしまう。	1.09	1.00	1.45	1.94	2.11	2.40	2.74
OOの携帯をみて異性のアドレスを消してもらう。	1.55	0.86	1.30	1.43	1.57	1.90	2.54

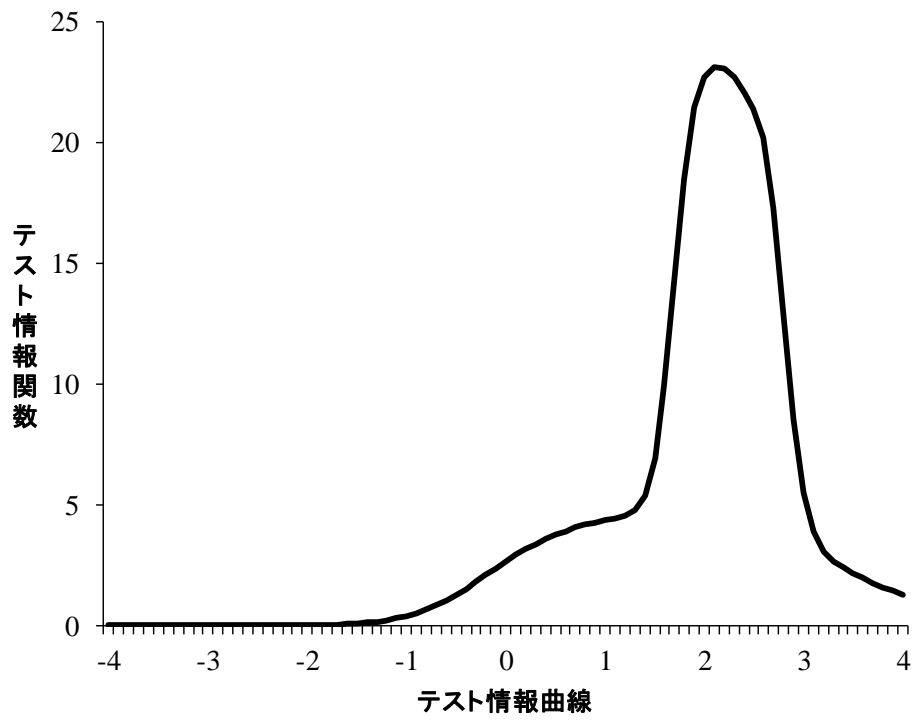


Figure11 暴力的支配行動を構成する項目群の測定範囲

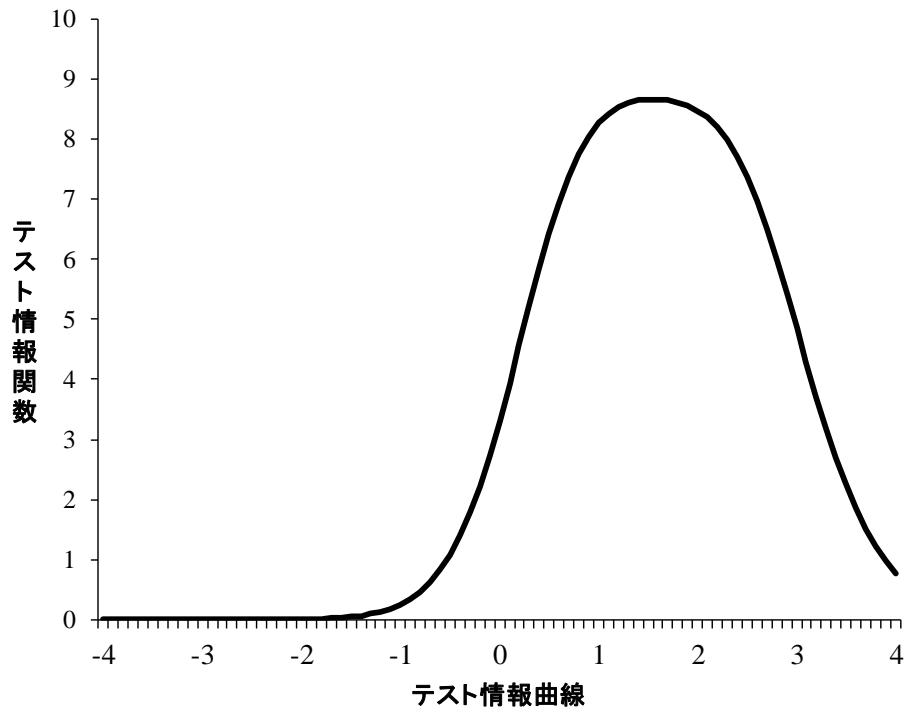


Figure12 束縛的支配行動を構成する項目群の測定範囲

第2節 強度が強い恋人支配行動が恋愛関係に及ぼす影響（研究3-2）

研究3-2では、恋人支配行動が恋愛関係に及ぼす影響について検討する。恋人支配行動は被行為経験と行為経験を取り上げる。恋愛関係の測定には、恋愛の充実感を取り上げて検討する。

方 法

調査時期

調査は3度にわたって行った。1度目の調査は、2011年9月から2012年1月にかけてA専門学校で、2度目は2013年の5月にB大学で、3度目は2014年の4月から5月にかけて再びB大学で調査を行った。

調査対象者

大学生681名（1度目の調査、211名；2度目の調査、188名；3度目の調査、282名）で、分析対象者は欠損値を除いた現在恋人がいる182名（男性62名、女性120名；平均年齢19.67歳、 $S.D=2.55$ ）であった。

質問紙

使用する2つの尺度の回答は「全くあてはまらない（1点）」、「あてはまらない（2点）」、「あまりあてはまらない（3点）」、「どちらともいえない（4点）」、「ややあてはまる（5点）」、「あてはまる（6点）」、「非常によくあてはまる（7点）」の7件法で回答を求めた。

恋人支配行動尺度 研究1で開発した恋人支配行動尺度を用いた。研究目的に合わせて、調査では「あなたは〇〇に以下の行動を行いますか」と、「あなたは〇〇から以下の行動を行われますか」という問いを用いた。

恋愛関係を測定する尺度 園田・片岡（2008）が作成した関係版時間的展望体験尺度を元に、恋愛関係における「恋愛の充実感」を測定する3項目（「2人の毎日の生活は充実している」、「私たちの今の生活に満足している」、「2人の毎日は同じことの繰り返しで退屈だ」）を用いた。因子分析の結果、一因子構造にまとまり、信頼性係数にも特に問題ない値（ $\alpha=.707$ ）を示した。

結果と考察

恋人支配行動の被行為経験と恋愛の充実感との関連

恋人支配行動尺度の各因子の被行為経験の平均得点（暴力的支配行動 $M=1.57$, $S.D=0.82$; 束縛的支配行動 $M=1.73$, $S.D=1.11$ ）と、恋愛の充実感の平均得点 ($M=5.19$, $S.D=1.19$) との関連を階層的重回帰分析により検討する。なお、統制変数として性別と交際期間 ($M=15.38$, $S.D=21.32$) を対数変換したものを分析に投入する。交際期間を対数変換する理由は回答の値に上限がない指標で回答のばらつきが大きいためであり、この操作は研究2と同様であった。

性別、交際期間、恋人支配行動の各因子の被行為経験及びそれらの交互作用項を説明変数、恋愛の充実感を目的変数として、変数の中心化を行った後に階層的重回帰分析を行った (Table 6)。

第1ステップで目的変数に恋愛の充実感の値を、説明変数に性別、交際期間、恋人支配行動の各因子の被行為経験を投入した。第2ステップで暴力的支配行動と束縛的支配行動の被行為経験の交互作用項を投入した。その結果、ステップ2で R^2 の変化量が有意となった ($F(5, 176)=10.44$, $p<.01$)。ステップ2における各変数の VIF を確認したところ、1.03~1.57 と問題ない値を示したことからステップ2のモデルを採択した。

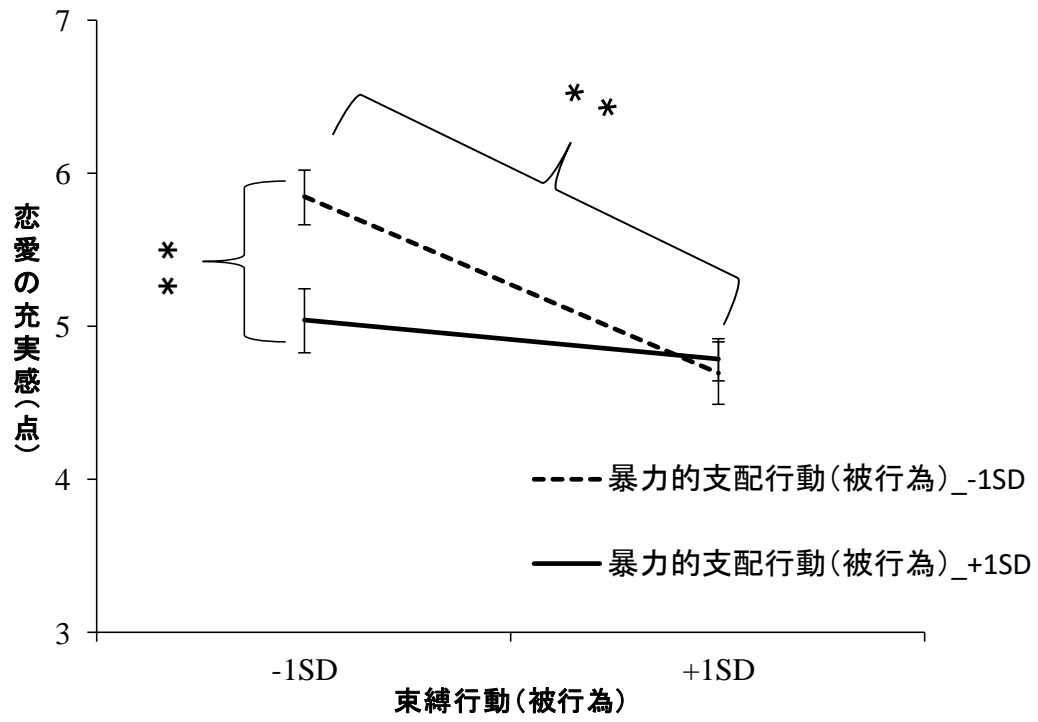
有意な交互作用がみられたので、Cohen & Cohen (1983) に従い単純傾斜の検定を行った (Figure13)。暴力的支配行動の被行為経験が低い場合、束縛的支配行動が低いほど恋愛の充実感が高かった ($t(176)=4.08$, $p<.001$)。暴力的支配行動の被行為経験が高い場合は、束縛的支配行動の多寡による差異は見いだされなかった ($t(176)=1.23$, $n.s$)。また、束縛的支配行動の被行為経験が低い場合、暴力的支配行動が低いほど恋愛の充実感が高かった ($t(176)=2.79$, $p<.01$)。束縛的支配行動の被行為経験が高い場合は、暴力的支配行動の多寡による差異は見いだされなかった ($t(176)=0.47$, $n.s$)。つまり、どちらの恋人支配行動も受けていない場合に恋愛の充実感が最も高くなることが明らかとなった。

Table 6

恋人支配行動の被行為経験と恋愛の充実感との関連

投入した変数	恋愛の充実感	
	ステップ1	ステップ2
	β	
性別	-0.02	.00
交際期間	-0.02	-.01
暴力的支配行動（被行為）	-.04	-.15
束縛的支配行動（被行為）	-.20*	-.30**
暴力的支配行動（被行為） × 束縛的支配行動（被行為）		.29**
R^2	.05	.10
R^2 (adjusted)	.03	.08
F	2.29	4.02**
df	(4,177)	(5,176)
ΔR^2		.05
F for ΔR^2		10.44**

** $p < .01$, * $p < .05$



** $p < .01$

Figure13 恋人支配行動の被行為経験における単純傾斜

恋人支配行動の行為経験と恋愛の充実感との関連

恋人支配行動尺度の各因子の行為経験の平均得点（暴力的支配行動 $M=1.74$, $S.D=1.01$ ；束縛的支配行動 $M=1.59$, $S.D=0.86$ ）と、恋愛の充実感の平均得点との関連を階層的重回帰分析により検討する。ここでも、統制変数として性別と及び際期間を対数変換したものを分析に投入する。

性別、交際期間、恋人支配行動の各因子の行為経験及びそれらの交互作用項を説明目的変数、恋愛の充実感を目的変数として変数の中心化を行った後に階層的重回帰分析を行った（Table 7）。

第1ステップで目的変数に恋愛の充実感の値を、説明変数に性別、交際期間、恋人支配行動の各因子の行為経験を投入した。第2ステップで暴力的支配行動と束縛的支配行動の行為経験の交互作用項を投入した。その結果、どのステップにおいても有意なモデル及び R^2 の変化量はみられなかった。

Table 7

恋人支配行動の行為経験と恋愛の充実感との関連

投入した変数	恋愛の充実感	
	ステップ1	ステップ2
	β	
性別	-.03	.02
交際期間	-.01	-.01
暴力的支配行動（行為）	-.04	-.04
束縛的支配行動（行為）	-.20*	-.20*
暴力的支配行動（行為） × 束縛的支配行動（行為）		-.04
R^2	.05	.05
R^2 (adjusted)	.03	.03
F	2.34	1.92
df	(4,177)	(5,176)
ΔR^2		.00
F for ΔR^2		.27

* $p < .05$

第3節 研究3全体のまとめ

研究3では、まず恋人支配行動を構成する暴力的支配行動と束縛的支配行動の2つの強度について検討した。その結果、どちらも心理的ダメージを与える強い強度を測定する項目群から成り立っていることがわかった。この点を確認した上で、恋人支配行動の被行為経験と恋愛の充実感との関連について検討したところ、暴力的支配行動と束縛的支配行動のどちらかあるいは両方を受けている時に充実感が低くなることがわかった。強い強度を持つ恋人支配行動は受け手の負の感情を招いてしまうことは、本論文の想定通りであった。また、恋人支配行動は1つよりも2つを受けるとより関係が悪化するという積み上げ式のものではなく、1つでも受けてしまうと強い悪影響が生じるという知見を与えることができた。

また、恋人支配行動の行為経験と恋愛の充実感との関連は本論文ではみいだされなかった。恋人支配行動が恋愛の関係維持方略として機能するならば、正の影響関係がみられてもよいはずである。これは、ここで取り上げた恋人支配行動が強い強度であることが理由かもしれない。強い強度の恋人支配行動が生じる恋愛関係は、おそらく関係が非常に不安定な場合が多く、恋人との関係性の崩壊を食い止めるために仕方なくとりうる関係維持行動という色合いが強く、恋愛関係の破綻は免れるものの、関係を良好にメンテナンスするような影響はないと考える。このように考えると、弱い強度の恋人支配行動については恋愛関係を維持し、良好にするような効果がある可能性がある。この点については、次章以降の研究で検討を行う。

以上より、研究3では2つの恋人支配行動の強度の強さを確認した後に、恋人支配行動の被行為経験と行為経験が恋愛関係に及ぼす影響について検討した。被行為経験については恋人支配行動が恋愛関係に悪影響を及ぼすことが示された。行為経験についてははっきりとした結果が得られなかったため、次章以降の研究の中でさらに検討していく。

第7章 恋人への弱い束縛と強い束縛が恋愛関係に及ぼす影響（研究4）

研究3では心理的ダメージを与える強い強度を持つ恋人支配行動が恋愛関係に悪影響を及ぼすことを確認した。この点をふまえ、研究4では弱い恋人支配行動が恋愛の関係維持に及ぼす影響について検討する。

研究4では2つの恋人支配行動の中でも特に束縛行動に着目し、強度が弱い束縛と強い束縛が恋愛関係に及ぼす影響について検討する。束縛に着目する理由は、強度の違いによって被害に対する認識が異なる可能性が考えられるためである。束縛は暴力にくらべて問題視されにくいことから（横浜市, 2008）、おそらく束縛が問題視される場合は著しく日常生活や交友関係が制限される過剰な束縛、すなわち心理的ダメージが生じる強い強度の束縛の場合であることが予想される。過剰でない束縛、すなわち弱い強度の束縛は心理的ダメージがあまりないために大きな問題とならない、あるいは恋人からの興味や関心もしくは恋愛の中で一般的に起こりうる関係維持行動の1つとして認識される可能性が想定できる。強い束縛は従来 of 先行研究と同様に恋愛関係に悪影響を及ぼすものの、弱い束縛は恋愛行動の1つとして関係維持に寄与すると予想する。また、暴力行動について強度の強弱について検討しない理由は、強度が弱い暴力行動を想定することが難しいためである。

研究4では項目反応理論を用いて弱い束縛と強い束縛を測定する尺度を開発する（研究4-1）。その後、弱い束縛と強い束縛が恋愛関係に及ぼす影響について検討する（研究4-2）。

第1節 弱い束縛と強い束縛を測定する尺度の開発（研究4-1）

研究4-1では項目反応理論を用いて、弱い強度の束縛と強い強度の束縛を測定可能な尺度を開発する。強度に主眼を置いた束縛尺度はあまり見当たらないため、本論文で新たに開発を行う。尺度作成の手順は、始めに自由記述や既存の尺度から束縛を測定する項目を収集する。次に、収集した項目を元に調査を行うが、本研究では弱い束縛と強い束縛を測定する項目を選定したい。そこで、調査参加者にはそれぞれの項目に対して「自分が恋人から該当する行動を受けた場合、どの程度束縛だと感じるか」という項目に対する被束縛感を回答してもらい、項目反応理論の困難度に着目して項目の選定を行うこととした。ごく少数の者しか束縛だと感じない項目は弱い束縛項目であり、多くの者が束縛だと感じる項目は強い束縛だと考えられる。間隔尺度では、弱い束縛は被束縛感が低い値となることから困難度は高くなる。反対に、強い束縛は被束縛感が高い値となることから、項目の困難度は低くなる。困難度を中心に、識別力の情報と合わせて項目を抜粋していく。

最後に収集した弱い束縛項目と強い束縛項目の2因子について因子構造及び信頼性と妥当性を検討する。因子的妥当性は確証的因子分析の適合度指標で、判別的妥当性は弱い束縛と強い束縛の得点差から検証する。このような手順を踏まえ、本研究の目的に合致した束縛尺度の開発を試みる。

方 法

調査手続き

ウェブ調査会社（クロス・マーケティング）の恋愛経験があるリサーチ会員を対象にリクルートを行い、2015年7月に本調査を実施した。

調査対象者

分析には16歳から29歳の男女のうち、全ての項目あるいはほぼ全ての項目に同じ選択肢を選んだ者を除いた403人（男性195人、女性208人；平均年齢22.28歳、 $SD=3.801$ ）を対象とした。なお、回答終了後には謝礼として同社が発行するポイントが付与された。

質問紙の構成

暫定版束縛尺度 本邦で行われた14編の実態調査（ちば県民共生センター，2011；

岐阜県環境生活部男女参画青少年課，2014；神戸市男女共同参画センター，2008；京都市男女共同参画推進協会，2012；名古屋市男女平等参画推進センター，2009；名古屋学院大学デートDV研究会，2010；内閣府，2015；日本DV防止・情報センター，2008；三重県男女共同参画センター，2013；さいたま市，2010；東京都生活文化局，2013；宇都宮市市民生活部男女共同参画課，2010；山形県，2012；横浜市市民活力推進局男女共同参画推進課，2008）と12編の研究論文（赤澤・竹内，2015；小畑，2013；小泉・吉武，2008；松野・秋山，2009；松並・青野・赤澤・井ノ崎・上野，2012；西村・森田，2013；野口，2009；富安・鈴木，2011；榊原，2011；良・小堀，2013；山田・山田，2010）から項目を収集した。加えて2013年9月から12月にかけてA大学の79名（男性11名，女性67名，不明1名；平均年齢19.95歳， $SD=2.939$ ）を対象に予備調査を行い，「恋人から行われて束縛だと感じる」行為を自由記述から収集した。そして同じ内容と考えられる項目をまとめ，最終的に82項目を選定した。

その後先行研究と予備調査の項目について，研究目的にあわせて「男」，「女」，「彼氏」，「彼女」といった言葉を「恋人」に修正し，内容にあわせて「—と言われた時」や「—された時」と語尾を統一して，暫定版束縛尺度を作成した。そして，「もしもあなたが恋人からその行動を受けた場合，どの程度束縛されていると感じると思うかを想像して」回答してもらうように教示を行った。回答は「まったく感じない」を1点，「非常に強く感じる」を10点とした10件法で回答してもらった。

結果と考察

弱い束縛と強い束縛を測定する尺度の開発

強さが異なる2種類の束縛を下位尺度に内包した束縛尺度を開発するにあたり，初めに収集した項目の因子構造の確認を行った。項目選択の基準を単独の因子に負荷量が.400として，最小二乗法による探索的因子分析を行った。その結果，固有値が44.035，4.385，1.590，1.341と推移した。これらのことを踏まえて，収集した束縛の項目群は1因子構造が妥当と判断した。採択された項目は82項目全てであり，因子寄与率は43.591% ($\alpha=.989$)であった。

次に，弱い束縛と強い束縛を測定する項目を取捨選択するために，項目反応理論を用いて項目の選定を行った。尺度構成においては困難度の下限が低い項目から10項

目、上限が高い項目から10項目の計20項目を選定することとした。各因子における項目の基礎統計量及び困難度と識別力の値をTable 8に示した。この20項目の識別力を確認したところ、特に問題ある値は見られなかったと解釈した。各因子における項目の基礎統計量及び困難度と識別力の値をTable 5に示す。

本研究の場合、教示において項目の行動に対して束縛されていると感じる程度を問うていることから、高い困難度にある項目は多くの人が束縛と感じない、日常的な関係維持行動の範疇にあるものと考えられることができる。そこで、困難度が高い10項目を「弱い束縛」因子と命名した。また、低い困難度にある項目は誰もが共通に束縛されていると感じる行動であると解釈できる。そこで、困難度が低い10項目を「強い束縛」因子と命名した。

最後に「弱い束縛」因子及び「強い束縛」因子に該当する20項目を用いて確認的因子分析を行い、2因子構造としての妥当性を確認したところ、適合度指標は概ね許容できる範囲の値を示した（CFI=.888, GFI=.849, AGFI=.812, RMSEA=.083）。第1因子の因子寄与率は39.017% ($\alpha=.899$)であり、第2因子の因子寄与率は34.528% ($\alpha=.888$)であった。なお、2因子構造のモデル適合に関する指標の中には許容可能な値と判断しづらいものも一部あるため、1因子構造の適合度についても検討することとした。その結果、1因子構造（CFI=.828, GFI=.758, AGFI=.698, RMSEA=.105）にくらべて2因子構造の方がモデルの当てはまりが良好であったことから、2因子構造を採択することとした。

以上より、2因子構造の妥当性は確保されていると判断し、選定した20項目を全て採用することとした。これらより、下位尺度として「弱い束縛」10項目と「強い束縛」10項目からなる束縛尺度が開発された。

この2つの下位尺度の相関係数 ($r=.705$) は高い値を示したものの、概念上問題ないことを確かめるために被束縛感の得点を比較した。もしも2つの下位尺度の概念構成が適切であるならば、「弱い束縛」因子より「強い束縛」因子のほうが被束縛感は高くなるはずである。このことを検討するために対応のある t 検定を行ったところ、予想通り「弱い束縛」因子 ($M=6.051, SD=1.829$) にくらべて「強い束縛」因子 ($M=7.376, SD=1.823$) の被束縛感得点は有意に高かった ($t(402) = 18.952, p < .001, d = .726$)。このことより、2つの下位尺度の判別的妥当性が確認された。

以上より、弱い束縛と強い束縛の2つを測定する束縛行動尺度が開発された。

第7章 恋人への弱い束縛と強い束縛が恋愛関係に及ぼす影響（研究4）

Table 5
弱い束縛と強い束縛を測定する項目の選定

番号	項目	M	SD	負荷量	識別力	困難度		
弱い束縛行動（困難度高）（ $\alpha=.888$ ）						1	5	9
18	誰と一緒にいるか知りたがる時	6.71	2.38	0.75	1.15	-2.40	-0.79	1.45
7	外出時の目的を聞かれる時	6.55	2.48	0.74	1.03	-2.57	-0.62	1.47
34	他の人と何を話しているのかを気にする時	6.64	2.48	0.72	1.08	-2.43	-0.65	1.46
2	相手の都合で呼び出される時	6.57	2.43	0.71	0.96	-2.53	-0.69	1.55
31	頻繁にデートを強要される時	6.22	2.60	0.70	0.93	-2.36	-0.46	1.60
9	決まり事を作られる時	6.59	2.46	0.70	1.02	-2.45	-0.64	1.47
25	電話の相手を聞いてくる時	6.25	2.54	0.68	0.89	-2.48	-0.52	1.68
30	暇な時だからといって電話がくる時	5.12	2.80	0.61	0.46	-2.46	0.37	3.11
35	毎日毎日「好きだよ」メールが来る時	5.45	2.97	0.60	0.64	-1.98	0.12	2.06
14	ずっと手を繋いでくる時	4.41	2.72	0.49	0.34	-2.81	1.48	4.74
因子寄与率 45.45%								
強い束縛行動（困難度低）（ $\alpha=.904$ ）								
69	勝手に携帯のメモリを消された時	8.10	2.31	0.79	1.75	-2.26	-1.26	0.22
82	恋人以外のアドレスを消すように言われた時	8.29	2.28	0.77	1.59	-2.32	-1.39	0.07
75	無断で携帯のメールをみられた時	7.61	2.46	0.77	1.54	-2.29	-1.14	0.27
79	友だちと楽しそうにしていると、不機嫌になられた時	7.04	2.42	0.73	1.55	-2.24	-1.21	0.27
61	家族と楽しそうにしていると、不機嫌になられた時	7.34	2.49	0.71	1.76	-2.21	-1.08	0.30
10	禁止事項を作られる時	7.27	2.37	0.70	1.49	-2.22	-1.24	0.26
52	別れたら死ぬと言われた時	7.86	2.63	0.65	1.13	-2.90	-1.53	-0.15
36	命令された時	7.01	2.47	0.65	0.90	-2.63	-1.29	0.19
6	いつも一緒にいることを要求される時	6.80	2.64	0.62	1.54	-2.34	-1.22	0.30
64	携帯電話の圏外に行くことを嫌がる時	6.45	2.78	0.62	1.54	-2.59	-1.32	0.23
因子寄与率 49.46%								

注1：項目は因子負荷量の大きい順に並べた。

注2：困難度は1から9までであるが、紙面の都合上最も困難度が低い部分（困難度1）と高い部分（困難度9）及び中間部分（困難度5）を記載し、その他の出力は省略した。

注3：困難度が高いかどうかの判断は、困難度9（表中の太文字部分）を元に行った。

第2節 弱い束縛と強い束縛が恋愛関係に及ぼす影響（研究4-2）

研究4-2では、研究4-1で開発した弱い束縛と強い束縛を測定する尺度を用いて、それぞれの束縛の被行為経験と行為経験が恋愛関係に及ぼす影響について検討する。

方 法

調査手続き

ウェブ調査会社（クロス・マーケティング）の現在恋人がいるリサーチ会員を対象にリクルートを行い、2016年2月に本調査を行った。

調査対象者

分析には、16歳から29歳の男女の757人（男性358人、女性399人；平均年齢22.608歳、 $SD=3.745$ ）を対象とした。なお、回答終了後には謝礼として同社が発行するポイントが付与された。

質問紙

弱い束縛と強い束縛 研究4-1で開発した束縛尺度（「弱い束縛」因子10項目、「強い束縛」因子10項目）を用いた。恋人からの被行為経験と恋人への行為経験について、尺度内容に合わせて語尾を修正して用いた。回答は「全くない」（1点）、「少しある」（2点）、「たまにある」（3点）、「よくある」（4点）の4件法を用いた。

恋愛への関係満足度 恋愛関係の状態を測定するために、金政・大坊（2003）で用いられた関係への評価尺度のうち、関係満足度を測定する2項目を用いた。評定は7件法で回答してもらった。

結 果

束縛尺度の因子構造の確認

Table10は、使用した各尺度の平均値と標準偏差の値である。確認型因子分析を行い行為経験と被行為経験を問うた束縛尺度のそれぞれについて因子構造の確認を行ったところ、許容できる範囲の適合度が得られたことから、オリジナル尺度と同等の因子構造を用いることが可能であると判断した（行為経験 $CFI = .882$, $GFI = .854$,

AGFI = .819, RMSEA = .084 ; 被行為経験 CFI = .863, GFI = .826, AGFI = .784, RMSEA = .098)。また、信頼性係数はどちらも十分な値を示した（行為経験 第1因子 $\alpha = .911$, 第2因子 $\alpha = .850$; 被行為経験 第1因子 $\alpha = .919$, 第2因子 $\alpha = .885$ ）。

弱い束縛と強い束縛の被行為経験が恋愛の関係満足度に及ぼす影響

交際期間は4人が未記入だったためこれらの者は除外して分析を行うこととした。目的変数として恋愛の関係満足度、説明変数として Step 1 で統制変数として性別、交際期間の対数、弱い束縛及び強い束縛の被行為経験、Step 2 で弱い束縛と強い束縛の被行為経験の交互作用項を投入した階層的重回帰分析を行った（Table11）。弱い束縛と強い束縛の交互作用項を投入した Step 2 において R^2 の変化量が有意であったため、このモデルを採択した。

交互作用を検討するために単純傾斜検定を行ったところ（Figure14）、弱い束縛が低い場合（ $t(747) = 3.73, p < .01$ ）も高い場合（ $t(747) = 8.03, p < .01$ ）も強い束縛が多いほど関係満足度は低かった。また、強い束縛が低い場合、弱い束縛の多寡に関わらず関係満足度に違いが見られなかったが（ $t(747) = 0.47, ns$ ）、強い束縛が高い場合は弱い束縛が多いほど関係満足度が高かった（ $t(747) = 5.89, p < .01$ ）。これらより、被行為者にとって最も関係満足度が維持される条件は強い束縛を受けていない状態であるといえる。加えて、最も関係満足度が乏しくなる条件は強い束縛のみを受けている場合であること、弱い束縛と強い束縛のどちらも受けている場合は関係満足度が保たれることも示された。

なお、VIF の値は 1.00～5.08 の範囲の値に収束したことから、多重共線性は生じていないと判断した。

Table10
各変数の平均値と標準偏差

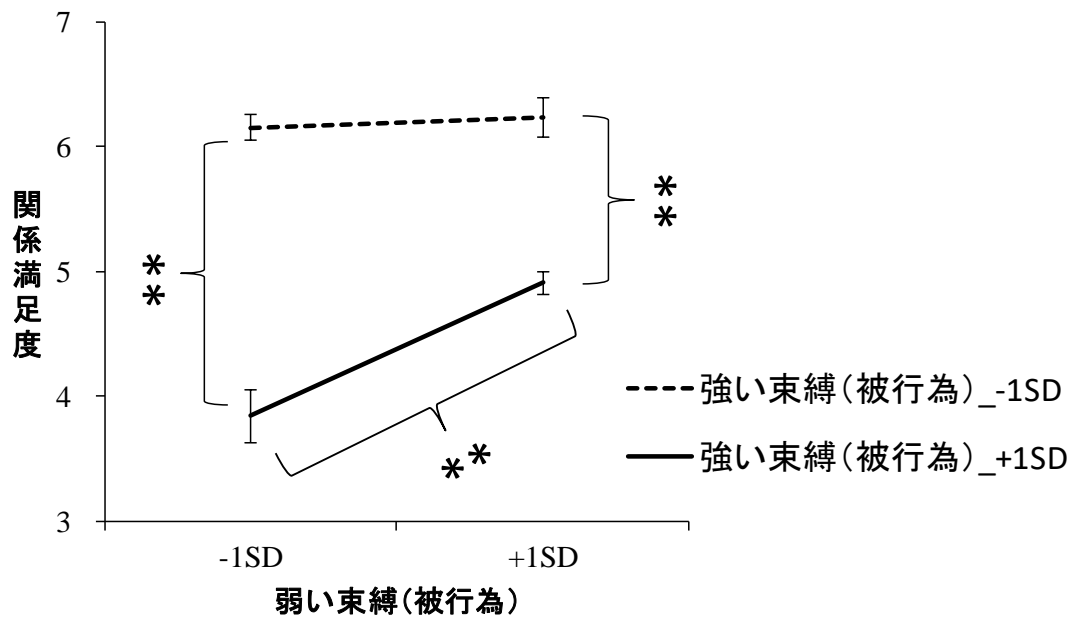
	男性 ($n=358$)		女性 ($n=399$)		全体 ($n=757$)	
	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>
交際期間	17.35	17.71	21.09	23.27	19.32	20.89
強い束縛(行為経験)	1.43	0.60	1.30	0.39	1.33	0.52
弱い束縛(行為経験)	1.67	0.62	1.61	0.51	1.62	0.60
強い束縛(被行為経験)	1.43	0.62	1.22	0.40	1.32	0.54
弱い束縛(被行為経験)	1.62	0.66	1.56	0.57	1.55	0.62
恋愛への関係満足度	5.46	1.43	5.49	1.26	5.72	1.24

Table11

束縛の被行為経験と関係満足度との関連

投入した変数	関係満足度	
	ステップ1	ステップ2
	β	
性別	-.06	-.06
交際期間	-.04	-.04
弱い束縛（被行為）	.19**	.21**
強い束縛（被行為）	-.38**	-.68**
弱い束縛（被行為）×強い束縛（被行為）		.35**
R^2	.06	.10
R^2 (adjusted)	.06	.10
F	12.33**	17.05**
df	(4, 748)	(5, 747)
ΔR^2		.04
F for ΔR^2		33.74**

** $p < .01$



** $p < .01$

Figure14 被行為経験における交互作用の単純傾斜

弱い束縛と強い束縛の行為経験が恋愛の関係満足度に及ぼす影響

目的変数として恋愛への関係満足度、説明変数として Step 1 で統制変数として性別、交際期間の対数、弱い束縛及び強い束縛の行為経験、Step 2 で弱い束縛と強い束縛の被行為経験の交互作用項を投入した階層的重回帰分析を行った (Table12)。弱い束縛と強い束縛の交互作用項を投入した Step 2 において R^2 の変化量が有意であったため、このモデルを採択した。

交互作用を検討するために単純傾斜検定を行ったところ (Figure14)、弱い束縛が低い場合 ($t(747) = 3.97, p < .01$) も高い場合 ($t(747) = 5.60, p < .01$) も強い束縛が多いほど関係満足度は低かった。また、強い束縛が低い場合 ($t(747) = 2.31, p < .05$) も高い場合 ($t(747) = 4.83, p < .01$) も、弱い束縛が多いほど関係満足度が高かった。これらをまとめると、弱い束縛なしと強い束縛あり、弱い束縛ありと強い束縛あり、弱い束縛なしと強い束縛なし、弱い束縛ありと強い束縛なしの順で関係満足度が高くなることがわかった。

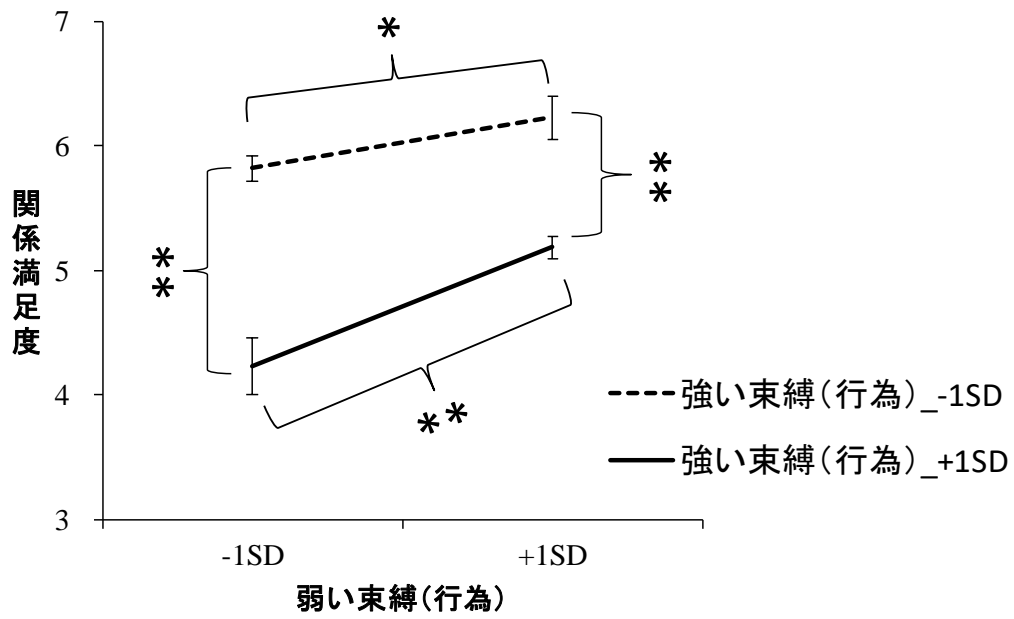
なお、VIF の値は 1.00～5.58 の範囲の値に収束したことから、多重共線性は生じていないと判断した。

Table12

束縛の行為経験と関係満足度との関連

投入した変数	関係満足度	
	ステップ1	ステップ2
	β	
性別	-.01	-.01
交際期間	-.04	-.04
弱い束縛（行為）	.22**	.25**
強い束縛（行為）	-.29**	-.49**
弱い束縛（行為）×強い束縛（行為）		.22**
R^2	.03	.05
R^2 (adjusted)	.02	.04
F	5.32**	6.97**
df	(4, 748)	(5, 747)
ΔR^2		.02
F for ΔR^2		13.22**

** $p < .01$



** $p < .01$, * $p < .05$

Figure15 行為経験における交互作用の単純傾斜

考 察

研究4-2では弱い束縛と強い束縛が恋愛関係に及ぼす影響について検討した。

研究4-1で開発した束縛尺度を用いて2つの束縛の被行為経験と恋愛の関係満足度との関連を検討したところ、主効果より強い束縛は恋愛関係を悪化させることがわかった。これは本論文の研究3や他の先行研究と同様の結果といえる。反対に、弱い束縛は恋愛関係を維持するように作用することが示された。さらに、交互作用の分析からは、強度が強い束縛を受けていても、強度が弱い束縛も併せて生じている場合は恋愛関係への悪影響が抑制されることも実証した。さらに、2つの束縛の行為経験と恋愛の関係満足度との関連を検討したところ、概ね被行為経験と同様の結果を得た。これらのことより、本論文で議論してきた恋人支配行動が恋愛の関係維持に貢献する条件を特定することができたといえる。

弱い束縛は心理的な負荷が低いと考えられることから、行為者にとって選択しやすい行動であることが予想される。また、被行為者にとっては直接的な暴力を伴わないため、恋愛行動の一部と錯誤されやすいのかもしれない。これまで議論してきたように他の異性を排除するためや関係破綻への強い不安から生じる恋人支配行動の中でも、弱い束縛に関しては必ずしも恋愛関係にとって悪影響とはならず、持続的な恋愛関係の構築を行なう上である程度有効な関係維持方略といえる場合もあるかもしれない。ただし、どちらの束縛がない状態も恋愛関係は良好であったことから、積極的にとる必要性はない方略という可能性もある。

対照的に、強度が強い束縛は行為経験と被行為経験のどちらも恋愛関係を悪化させるように作用することが示された。強い束縛は行為者にとっては心理的負荷が高く、被行為者にとっては心理的なダメージが大きいと考えられる。この点は、本論文の研究3及び他の先行研究の結果とも合致するといえよう。恋愛内で強い束縛が生じた場合、行為者と被行為者のどちらにとっても関係が悪化し、関係破綻を招く可能性がある。

さらに、強い束縛を受けていても弱い束縛も併せて生じている場合は、強い束縛の負の影響を弱い束縛の正の影響が抑制していることがわかった。ただし、その内実は弱い束縛のみを受けている場合と比べてあまり健全ではない可能性がある。恋愛関係自体は維持されているものの、交友関係の縮小や個人の精神的な健康が損なわれてい

る危険性も考えられる。弱い束縛と強い束縛を同時に受けている者達が、恋愛以外の他の社会的な関係や個人の精神衛生に問題を持つ可能性の検証については今後検討していく必要がある。

束縛を測定するために開発した尺度の項目からは、弱い束縛と強い束縛はどちらも概ね交友関係に関する事、日常生活に関する事、恋人間で設定されるルールに関する事から構成されており、2つの束縛の場面や状況は非常に似通っている。従って、当事者達にとって弱い束縛と強い束縛はとても区別しにくいものといえるだろう。ただし、弱い束縛が主に「知りたがる」「聞かれる」等のコミュニケーションレベルの行為にとどまっているのに対し、強い束縛は恋人の行動に対する嫌悪や禁止、携帯電話の盗み見や履歴の消去といった相手への実力行使が含まれている点が異なっているといえよう。恋人支配行動は強度が弱いものから強いものへと移行していくとされているが（相羽・荒井, 2014; Bookwala, et al., 1992; 高坂, 2012）、束縛に関しても関係維持に寄与する弱い束縛から関係破綻を招く強い束縛に移行していく危険性があるといえるだろう。

研究4より、束縛を弱い束縛と強い束縛に分類することで弱い束縛が関係維持に貢献していることがわかり、そのために強い束縛を受けていても問題と感じなくなってしまう場合があることを示唆する知見を得た。

第3節 研究4全体のまとめ

研究4では項目反応理論を用いて弱い束縛と強い束縛を測定する尺度を開発し、信頼性と妥当性を確認した。その後、開発した尺度を用いて検討を行ったところ、強度が弱い束縛は関係維持に貢献する可能性がある一方で、強い束縛は恋愛関係に悪影響を及ぼすことが示された。束縛は緩やかな束縛であれば関係維持に有効と呼べるものの、行き過ぎた場合は関係破綻を招く可能性を孕んだ諸刃の剣とも呼べる方略ということができよう。さらに、強度が強い束縛のネガティブな効果を弱い束縛が調整することも明らかとなった。これらをまとめると、恋人支配行動の中でも束縛が恋愛関係の中でも問題とならなかつたり、恋愛関係の維持に貢献したりする場合は弱い束縛あるいは弱い束縛と強い束縛が同時に生起している場合であることが示された。

研究4では恋人支配行動が恋愛の関係維持行動として機能する条件とそうではない条件を特定することができた。

第Ⅲ部 全体のまとめ

第Ⅲ部では恋人支配行動の強度に着目して検討を行った。強度が強い恋人支配行動が恋愛関係に悪影響を及ぼすが、束縛のように間接的な行動に関しては弱い強度のものであれば恋愛関係の維持に貢献する可能性が示された。この知見は、本論文が構築した恋人支配行動の枠組みによって得られた新しい知見であるといえる。加えて、恋人支配行動が恋愛関係の維持に寄与する行動の1つであるという本論文の議論を支持するものであったといえよう。

第IV部 総合考察

ここまで、恋人支配行動の生起及び恋愛関係との関連について取り上げ、理論的な議論と実証的な研究を行ってきた。第8章では、本論文の4つの研究で得られた知見を総合的に踏まえて考察を行い、恋人支配行動が生起・促進・維持されるメカニズムについて議論する。その後、恋人支配行動に残された研究課題と今後の展望について論考を行い、最後に結論をまとめ、本論文の総括を行うこととした。

第8章 研究結果のまとめと恋人支配行動に関する理論モデルの構築

第1節 研究結果のまとめ

第I部では、恋人への攻撃行動に関する国内外の研究動向を概観した後に、本論文で扱う攻撃行動について議論し、「恋人支配行動」という枠組みを提案した。そして、この領域における知見の整理を行い、本論文の目的とそのために行う研究について論じていった。

第1章では、恋愛関係内で生じる攻撃行動に関する研究の動向についてレビューを行った。その際に恋人への攻撃行動のレビューに加えて、近年焦点が当てられている束縛についても取り上げた。既存の攻撃行動の研究枠組みでは攻撃行動と束縛を同列に扱うことが難しいことから、これらを包括的に扱うために束縛の位置づけを行うこと及び心理的なダメージを表す行動の強度を取り入れた、恋人支配行動という枠組みを提案した (p15, Figure 1)。その後、恋人支配行動の研究領域を整理していき、恋人支配行動の生起及び恋愛関係に及ぼす影響という2つの領域の中で明らかになっている点と不明瞭な点についてまとめた。恋人支配行動の生起に関しては、個人の特性変数に加えて現在の恋人との関係変数が取り上げられていない点を指摘した。恋人支配行動が恋愛関係に及ぼす影響については、恋愛関係に悪影響を及ぼす知見が多数を占めるものの、関係維持に貢献することを示唆する知見がみられ、恋人支配行動と恋愛関係との関連については異なる見解が存在することを論じた。

これらの問題を解決するために、第2章では愛着理論・配偶者維持行動の理論から議論を行った。そして、恐らくは恋人支配行動は関係破綻への不安を背景として破綻を回避するために生起すること、恋人支配行動は問題となる行為として顕在化する場合と恋愛関係の維持に貢献する場合があることについて指摘した。

第3章では本論文の理論的枠組みを提示し、全体的な意義と目的を示した。本論文全体の研究目的は、恋人支配行動の生起に関する知見及び恋愛関係に悪影響を及ぼす場合と関係維持に貢献する場合の条件を明らかにすることであった。この目的を達成するために、次章以降で恋人支配行動の生起と関係性に及ぼす影響に関する実証的な研究を行っていった。

第II部では、恋人支配行動の誘因及び生起条件について検討を行っていった。第4

章研究1では、まず恋人支配行動尺度及び恋人分離不安尺度を開発した。その後、個人の特性変数として共依存を取り上げ、現在の恋人との関係変数として恋人分離不安を組み合わせて検討した。恋人支配行動のうち、暴力的支配行動は共依存特性が直接的に生起に影響を及ぼしていた。また、束縛的支配行動は共依存特性からの直接的な影響に加えて、恋人分離不安を媒介して生起することが示された。これらのことより、暴力的支配行動の生起は個人の特性変数の有無に依存するのに対して、束縛的支配行動は個人の特性変数の有無に加えて関係性の不安定さを引き金として生起する場合があることが示された。

さらに、第4章研究2では恋人支配行動に対する恋人分離不安と他の心理的な変数との組み合わせの影響について検討を行い、交際が長期間継続した場合に強い恋人分離不安を保ったままでいることが恋人支配行動の生起を促進することをみいだした。これらのことより、愛着と配偶者維持の観点から想定されたように、恋人支配行動は関係破綻の不安を背景として生じることがわかった。これは、恋人支配行動が破綻を回避するための関係維持行動の1つであるという本論文の想定を支持するものといえる。さらに、恋人支配行動の生起は個人の特性変数に由来するものと、関係性の不安定さに起因するものがあり、種類によって生起に関する心理的な機序に違いがみられることが示された。

第III章では、恋人支配行動が恋愛関係に及ぼす影響について検討した。第6章研究3では恋人支配行動が恋愛関係に及ぼす影響について強度の観点を踏まえて検討を行った。まず、恋人支配行動尺度が強い強度を測定していることを確認した。そして、強い強度を持つ恋人支配行動は、恋愛関係が悪影響を及ぼすことが示された。これは、従来 of 先行研究の知見と合致するものであった。

続いて、第7章研究4では恋人支配行動の中でも束縛行動に着目し、束縛の強度の違いによって恋愛関係に及ぼす影響が異なるかについて検討した。まず、強度が異なる束縛を測定するために項目反応理論から尺度開発を行った。開発した尺度を用いて分析を進めていった結果、被行為者と行為者の双方にとって強度が強い束縛は恋愛関係に悪影響を及ぼすものの、強度が弱い束縛は関係維持に貢献することが示された。さらに興味深いことに、強度が異なる2つの束縛が生起している場合、弱い束縛が強い束縛の効果を調整することが示された。

第2節 恋人支配行動に関する理論モデルの構築

本論文で得られた知見から、恋人支配行動の生起と恋愛関係に及ぼす影響をまとめた最終的な恋人支配行動に関する理論モデルの構築を試みる。

まず、恋人支配行動の生起についてであるが、研究1より恋人支配行動の生起には個人の特性変数及び関係破綻の不安が、研究2では関係破綻の不安と交際期間が関与していることが示された。すなわち、個人の特性変数・関係破綻の不安・関係構築の時間という3つが影響しあいながら恋人支配行動へとつながっていくということがわかる。いかえれば恋人支配行動は個人内・個人間・関係深化の3つの要因が複合的に絡み合うことで生じていくこととなる。この3つのうちのどこかに不具合や高まりが生じた時、恋人支配行動が生起することとなる。その背景は、愛着と配偶者維持の観点からいえば破綻を回避するためであるが、心理的には恋人を強制的に自分の監視下に置くことで不安を低減し、安心感を獲得するためのいびつな関係維持方略とも解釈できるだろう。

次に、恋人支配行動が恋愛関係に及ぼす影響についてであるが、研究3では強い強度の恋人支配行動は関係維持行動として機能しないばかりか、恋愛関係を悪化させることがわかった。ここでは恋愛関係を維持するために行っているにも関わらず、恋愛関係が悪化していくというプロセスが想定できる。研究4で弱い束縛と強い束縛が恋愛関係に及ぼす影響について検討したところ、恋人支配行動が関係維持行動として機能する場合は、弱い束縛を伴う場合であった。すなわち、束縛はある水準までならよいが、臨界点を超えると悪影響となってしまいうという二面性を携えたものであり、関係に作用する機能が質的に変容することが伺える。この束縛の強度について、本論文では項目反応理論を用いて検討していったが、束縛に対する認識には個人の恋愛観などの枠組みも影響すると思われる。強い束縛を束縛と捉えない者や、弱い束縛を強い束縛と捉える者がいる可能性もあり、それによって束縛が恋愛関係に及ぼす影響は変わっていく場合もあるかもしれない。束縛の認識に対する個人差についてはここでは言及するに留め、今後の検討課題としたい。

本論文は攻撃行動における研究領域の中心的な2つの命題 (Rusbult & Martz, 1995) である「恋人に不利益が生じるような攻撃や支配はなぜ起こるのか」、また「そのような行動の被行為者はなぜ関係の終結を決断しない場合があるのか」に沿って検討した。これにならい、恋人支配行動を中心として生起の前提となる条件、恋人支配行動が恋

愛関係に及ぼす影響に大別して本論文の研究知見と議論をまとめ、恋人支配行動の理論モデルを構築した (Figure16)。

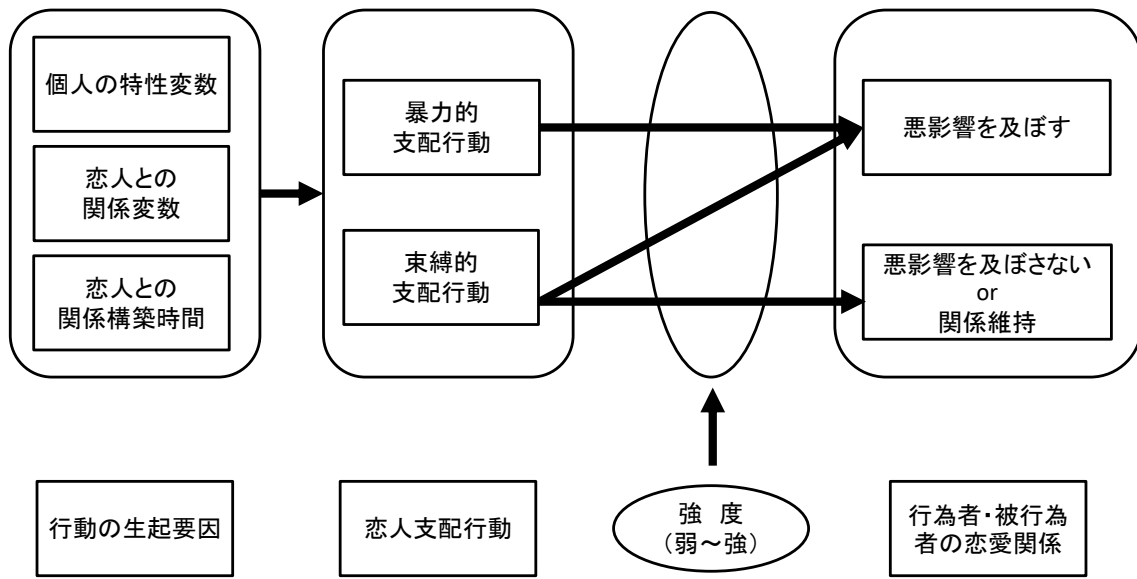


Figure16 恋人支配行動に関する理論モデル

第3節 学術的な意義と社会的な意義

本論文の学術的な意義は、攻撃行動に関する知見をレビューした上で恋人支配行動という枠組みを構築し、恋愛の関係維持という観点から恋人支配行動を捉えなおした点、恋人支配行動の生起に関して恋人分離不安が関与していることを明らかにした点、恋人支配行動の生起は個人の特性変数と関係性の組み合わせから予測できる点、強度が強い恋人支配行動は悪影響を及ぼすが束縛については恋愛関係に悪影響を及ぼす場合と関係維持行動として機能する場合があることを特定した点という4点に集約される。

本論文の骨子である恋人支配行動が関係維持に寄与するという視点は、従来の恋人に対する攻撃行動の研究史の中であまり論じられてこなかったものである。この視点は、恋人支配行動が生起する背景と、恋人支配行動を受けても交際の終結に至らない場合がある恋愛関係を予測する1つの手掛かりになると考えられる。この萌芽的な観点が他の恋人支配行動を説明する理論や知見と整合性を保った上で成り立つかどうかについてはさらなる検討と検証が必要なものの、どちらかといえば実態調査や狭い枠内での研究に終始してしまいがちで理論的な背景が乏しい面があった攻撃行動の研究領域に理論的な枠組みを提供するものといえる。

攻撃行動の生起モデルに関する研究では、これまで個人の特性変数の領域と現在の恋人に対する関係変数に関する領域があまりオーバーラップしてこなかった経緯がある。本論文ではどちらの知見も踏まえた上で、個人の特性変数をベースに関係破綻への不安を引き金として恋人支配行動が生起することを実証した。今後の検討が必要なものの、この観点は個人の特性変数の影響、恋愛関係の変動の影響、そしてそれら2つの影響を柔軟に予測できる魅力を秘めており、本論文は恋人支配行動の生起を予測するための足掛かりを構築したといえる。さらに、恋人分離不安と交際期間の分析から、恋人支配行動の生起は恋愛関係の段階により左右され、しかも行動の内実は質的に異なる可能性が示唆された。さらなる検討が必要なものの、交際初期と長期化した恋愛における恋人支配行動の生起に関する心理的な機序は違うかもしれない。この点を検討していくことは、基礎的なメカニズムの解明と予防や防止プログラムの構築という攻撃行動にまつわる研究領域に貢献できる可能性があるといえる。

攻撃行動が恋愛関係に及ぼす影響については、恋愛関係に悪影響を及ぼす場合とそうでない場合が報告されており、様々な見解が散見している状況であった。本論文で

は、恋人支配行動は恋愛関係に悪影響を及ぼすこと、ただし束縛については強度が弱い場合は関係維持に貢献することを明らかにした。さらに、弱い束縛と強い束縛が同時に生じている場合に、弱い束縛が強い束縛の悪影響を抑制することも示された。これまで攻撃行動は恋愛関係に悪影響を及ぼすという知見が大半だった中で、問題ある行動として悪影響を及ぼす条件と関係維持行動として機能する条件について明らかにし、恋愛関係内で恋人支配行動が生じたとしても恋愛関係が破綻に向かわないメカニズムの一端を解明するための示唆的な知見を得ることができた。

本論文は攻撃行動における研究領域の中心的な2つの命題 (Rusbult & Martz, 1995) である「恋人に不利益が生じるような攻撃や支配はなぜ起こるのか」、また「そのような行動の被行為者はなぜ関係の終結を決断しない場合があるのか」に沿って検討を行ってきた。本論文の知見より恋人支配行動は関係破綻への不安を軸として、破綻を回避するために生じる関係維持方略の1つと結論づけることができ、後者は恋人支配行動の強度と内容により恋愛の関係維持に貢献する場合があるためと結論づけることができたといえる。

攻撃行動の研究領域における中心的な命題の解決に貢献する4つの知見を得ることができたため、本論文は一定の学術的な意義が認められると考える。

続いて、本論文の社会的な意義は、周りからみれば問題あるようにみえるにも関わらず、継続する恋愛関係に対して、そのメカニズムを紐解くための知見を得たことにある。本論文より、条件次第では暴力や束縛は行為者と被行為者の恋愛関係への認識を悪化させないように機能することが示された。これまでに暴力や束縛が生じている恋愛関係の背景には行為者から被行為者への威圧や支配が背景にあるために交際の終結が困難であることが指摘されてきたが、本論文は継続する暴力や束縛を伴う恋愛関係に対して従来の知見に加えて新たな心理的機序を見出したといえる。

また、本論文の知見は恋愛関係内の暴力が必ずしも問題ある行動と認識されていない場合があることを示すものでもあった。実態調査では束縛を除く攻撃行動は排除すべき行動と認識されている場合が多いことが報告されているため、このことと本論文の知見は必ずしも合致するものではない。恋愛に関する報告ではないものの、宮口 (2019) によると非行少年の中には他者を傷つける行動を問題視していなかったり相手のためになると思って行う者がいたりすることを報告している。このことは、恋人支配行動を行う者の一部にも当てはまることなのかもしれない、本論文の知見は恋愛

関係の中で他者を傷つけてしまう者の心理的な機序を解明するための1つの知見ともいえるだろう。

このように、恋愛関係における問題ある行動を関係から消失させていくことに貢献する知見を得たことが本論文の社会的な意義といえる。

第4節 今後の課題と展望

最後に本論文全般に渡る課題と今後の展望について述べる。

本論文の課題として以下の7点があげられる。第1に恋人支配行動の生起に関する変数間の影響関係の確認があげられる。本論文では個人の特性変数、関係破綻の不安、関係の段階が相互に関連していることを明らかにしたが、この3つの要因の全てを用いて分析したわけではないため、その実証については部分的な状態に留まっている。この点については、関連する要因を全て投入したパス解析などを行い、モデル全体の適合度や影響関係を把握することで解決が可能であろう。

第2に、恋人支配行動の生起に関する心理的な背景に関するさらなる検討の必要性があげられる。本論文では短期間の恋愛において生じる恋人支配行動と長期間のそれでは、その背景が違う可能性が示されている。関係維持方略として恋人支配行動が担う機能や恋愛関係に及ぼす影響も異なるかもしれない。恋愛の段階に着目して恋人支配行動の生起や影響について検討することで、この疑問を解決していくことができるだろう。

第3に、弱い束縛と強い束縛が同時に生起している場合の恋愛関係についてさらなる検討の余地がある点である。2つの束縛が同時に生起している場合、恋愛関係があまり悪化しないことが示されたが、対人関係の縮小やメンタルヘルスの低下など様々な困難を抱えた恋愛関係が構築されている可能性がある。2つの束縛が同時に生起している恋愛関係の内実について検討することで、束縛が恋愛関係に及ぼす功罪を明らかにすることができるだろう。

第4に、束縛の認識に対する個人差について検討を行う余地がある点である。束縛はある水準までならよいが、臨界点を超えると悪影響となってしまうことが示されたが、束縛に対する認識には個人の恋愛観などの枠組みも影響すると思われる。愛着スタイルやラブスタイルといった観点から検討していくことで、この問題を明らかにすることができると思われる。

第5に本論文はあくまで個人を対象とした調査であったため、恋人支配行動のメカニズムについて部分的な実証に留まっている点である。未来の研究では、カップル調査を行い、カップルそれぞれの不安などの変数を総合的に分析していくことで、双方向的な恋人支配行動の予測モデルの構築が可能になると考えられる。

第6に、恋人支配行動の認識を踏まえた検討の必要性があげられる。研究全般を通

して、恋人支配行動の頻度を指標とした検討を行ってきた。しかしながら、恋人支配行動に対する認識（例えば恋人支配行動は行ってはいけないものかどうか、など）を統制した調査を行ってはいない。恋人支配行動に対する認識によって生起頻度や関係性に及ぼす影響が異なることは十分に予想されることであるため、今後はこの点まで踏み込んだ検討が必要であると考えられる。行為者に対しては恋人支配行動の善悪を、被行為者に対しては恋人支配行動を受けた際の嫌悪感や許容度といった指標を合わせてとる必要があると考える。

第7に、恋人支配行動の測定に関する課題があげられる。恋人支配行動が生起している恋愛の方がそうでない恋愛にくらべて少数派であることから、複数の研究において尺度にフロア効果が生じている可能性が考えられた。これは、この領域の多くの研究で生じていることであり、ある意味避けて通れないものでもある。分析上の問題として、フロア効果が生じている場合に線形モデルを仮定した分析でよいのか、非線形モデルを用いた方がよいのかどうかは議論がわかれるところである。近年では、フロア効果や天井効果が疑われるデータに線形を仮定した分析を行っている研究も複数みられるが、現状では判断しかねるため効果量や信頼区間といった有意水準以外の他の指標も合わせて記述することや、類似の研究の中で知見の頑健さを確認すること、メタ分析を行うことなどが必要になってくるといえる。

このようにいくつかの課題はあるものの、恋愛関係内で生じる攻撃行動の研究領域に恋人支配行動という枠組みからその生起と恋愛関係に及ぼす影響について研究を行い、恋人支配行動が恋愛関係の破綻を回避するための関係維持行動という側面があることを明らかにした上で理論モデルを完成させ、今後の研究へとつながる礎を築いたことが本論文の成果であった。

引用文献

- 相羽 美幸・荒井 崇史 (2014). 交際相手からの暴力 (Dating Violence) 被害の進展プロセス 日本心理学会第 78 回大会発表論文集, 266.
- Ainsworth, M. D. S., Blehar, M. C., Waters, E., & Wall, S. (1978). *Patterns of attachment: A psychological study of the Strange Situation*. Hillsdale, NJ: Erlbaum.
- 赤澤 淳子・井ノ崎 敦子・上野 淳子・松並 知子・青野 篤子 (2011). 衡平性の認知とデート DV との関連 仁愛大学研究紀要人間学部篇, 10, 11-23.
- 赤澤 淳子 (2015). 親密な二者関係のダークサイドとしてのデート DV 発達心理学研究, 26, 288-299.
- 赤澤 淳子 (2016). 国内におけるデート DV 研究のレビューと今後の課題 人間文化学部紀要, 16, 128-146.
- 赤澤 淳子・竹内 友里 (2015). デート DV における暴力の構造について—頻度とダメージとの観点から— 福山大学人間文化学部紀要, 15, 51-72.
- Anderson, K. M., & Danis, F. S. (2007). Collegiate sororities and dating violence: An exploratory study of informal and formal helping strategies. *Violence against women, 13*, 87-100.
- 青野 篤子・周 玉慧・森永 康子・葛西 真記子 (2011). 日本と台湾の大学生の恋愛における葛藤解決方略 黄 自進 (編) 日本の伝統と現代 中央研究院人文社會科學研究中心・亞太區域研究專題中心, 559-592.
- Archer, J. (2000). Sex differences in aggression between heterosexual partners: a meta-analytic review. *Psychological bulletin, 126*, 651-680.
- Arnocky, S., Ribout, A., Mirza, R. S., & Knack, J. M. (2014). Perceived mate availability influences intrasexual competition, jealousy and mate-guarding behavior. *Journal of Evolutionary Psychology, 12*, 45-64.
- Bandura, A. (1978). Social learning theory of aggression. *Journal of communication, 28*, 12-29.
- Bartholomew, K. & Horowitz, L. M. (1991). Attachment styles among young adults; A test of a four category models. *Journal of Personality and Social Psychology,*

- 61, 226-244.
- Birkhead, T. R. (1981). Mate guarding in birds: Conflicting interests of males and females. *Animal Behavior*, 29, 304-305.
- Bookwala, J., Frieze, I. H., Smith, C., & Ryan, K. (1992). Predictors of dating violence: A multivariate analysis. *Violence and victims*, 7, 297-311.
- Bookwala, J., Frieze, I. H., & Grote, N. K. (1994). Love, aggression and satisfaction in dating relationships. *Journal of Social and Personal Relationships*, 11, 625-632.
- Bowlby, J. (1969). *Attachment and loss*. Vol. 1. *Attachment*. New York: Basic Books.
(ボウルビィ, J. 黒田実郎・大羽 夔・岡田洋子訳 (1976). 母子関係の理論 1 愛着行動 岩崎学術出版社)
- Bowlby, J. (1973). *Attachment and loss*. Vol. 2. *Separation: Anxiety and anger*. New York: Basic Books. (ボウルビィ, J. 黒田実郎・岡田洋子・吉田恒子訳 (1977). 母子関係の理論 2 分離不安 岩崎学術出版社)
- Brennan, K. A., Clark, C. L., & Shaver, P. R. (1998). Self-report measurement of adult attachment: An integrative overview. In J. A. Simpson & W. S. Rholes (Eds.), *Attachment theory and close relationships*. New York: Guilford.
- Bushman, B. J., & Baumeister, R. F. (2002). Does self-love or self-hate lead to violence? *Journal of Research in Personality*, 36, 543-545.
- Buss, D. M. (1988). From vigilance to violence: Tactics of mate retention in American undergraduates. *Ethology and Sociobiology*, 9, 291-317.
- Capaldi, D. M., & Crosby, L. (1997). Observed and reported psychological and physical aggression in young, at-risk couples. *Social Development*, 6, 184-206.
- ちば県民共生センター (2011). デート DV に関する大生意識等調査
- Cohen, J., & Cohen, P. (1983). *Applied multiple regression/correlation analysis for the behavioral sciences*. 2nd ed. New Jersey: Lawrence Erlbaum.
- 松村 明 (編) (2006). 大辞林 三省堂
- Dobash, R. W., & Dobash, R. P. (1992). *Women, violence, and social change*. New York, NY: Routledge.
- Dutton, M. A., & Goodman, L. A. (2005). Coercion in intimate partner violence:

- Toward a new conceptualization. *Sex Roles*, *52*, 743-756.
- Follingstad, D. R., Bradley, R. G., Laughlin, J. E., & Burke, L. (1999). Risk factors and correlates of dating violence: The relevance of examining frequency and severity levels in a college sample. *Violence and Victims*, *14*, 365-380.
- Follingstad, D. R., Bradley, R. G., Helff, C. M., & Laughlin, J. E. (2002). A model for predicting dating violence: Anxious attachment, angry temperament, and need for relationship control. *Violence and victims*, *17*, 35-47.
- Fonagy, P. (1999). Male perpetrators of violence against women: An attachment theory perspective. *Journal of Applied Psychoanalytic Studies*, *1*, 7-27.
- Fonagy, P., Moran, G. S., & Target, M. (1993). Aggression and the psychological self. *The International journal of psycho-analysis*, *74*, 471-485.
- Foshee, V. A., Bauman, K. E., Ennett, S. T., Linder, G. F., Benefield, T., & Suchindran, C. (2004). Assessing the long-term effects of the safe dates program and a booster in preventing and reducing adolescent dating violence victimization and perpetration. *American Journal of Public Health*, *94*, 619-624.
- Fraley, R. C., & Davis, K. E. (1997). Attachment formation and transfer in young adults' close friendships and romantic relationships. *Personal Relationships*, *4*, 131-144.
- Freeman, H., & Brown, B. (2001). Primary attachment to parents and peers during adolescence: Differences by attachment style. *Journal of Youth and Adolescence*, *30*, 653-674.
- 深澤 優子・西田 公招・浦 光博 (2003). 親密な関係における暴力の分類と促進要因の検討 対人社会心理学研究, *3*, 85-91.
- 岐阜県環境生活部男女参画青少年課 (2014). 若年層における交際相手からの暴力に関する調査報告書
- Goetz, A. T., & Shackelford, T. K. (2006). Sexual coercion and forced in-pair copulation as sperm competition tactics in humans. *Human Nature*, *17*, 265-282.
- Hazan, C., & Shaver, P. R. (1987). Romantic love conceptualized as an attachment

- process. *Journal of Personality and Social Psychology*, *52*, 511–524.
- Hazan, C., & Zeifman, D. (1994). Sex and the psychological tether. In K. Bartholomew & D. Perlman (Eds.), *Advances in personal relationships. Vol. 5*. Attachment processes in adulthood. London: Jessica Kingsley.
- 飛田 操 (1997). 失恋の心理 松井豊 (編) 悲嘆の心理 サイエンス社
- 伊田 広行 (2010). デート DV と恋愛 大月書店
- 井ノ崎 敦子・上野 淳子・松並 知子・青野 篤子・赤澤 淳子 (2012). 大学生におけるデート DV 加害及び被害経験と愛着との関係 学校危機とメンタルケア, *4*, 49-64.
- Jezl, D. R., Molidor, C. E., & Wright, T. L. (1996). Physical, sexual and psychological abuse in high school dating relationships: Prevalence rates and self-esteem issues. *Child and adolescent social work journal*, *13*, 69-87.
- 金政 祐司 (2002). 恋愛イメージ尺度の作成とその検証——親密な異性関係, 成人の愛着スタイルとの関連から—— 対人社会心理学研究, *2*, 93-101.
- 金政 祐司・大坊 郁夫 (2003). 愛情の三角理論における3つの要素と親密な異性関係感情心理学研究, *10*, 11-24.
- 片岡 祥・園田 直子 (2008). 青年期におけるアタッチメントスタイルの違いと恋人に対する依存との関連について 久留米大学心理学研究, *7*, 11-18.
- 片岡 祥・園田 直子 (2010). 青年期に起こる愛着対象の移行における親の位置づけ 久留米大学心理学研究, *9*, 1-8.
- 小畑 千晴 (2013). デートバイオレンス可能性尺度の作成について 奈良大学大学院研究年報, *18*, 45-52.
- 小岩井 彰 (2003). アオジの配偶者防衛行動 日本鳥学会誌, *52*, 13-23.
- 小泉 奈央・吉武 久美子 (2008). 青年期男女におけるデート DV に関する認識についての調査 純心現代福祉研究, *12*, 61-75.
- 国立社会保障・人口問題研究所 (2017). 第15回出生動向基本調査 Retrieved from http://www.ipss.go.jp/ps-doukou/j/doukou15/NFS15_report4.pdf (2019年8月16日)
- 神戸市男女共同参画センター (2008). 神戸市における高校生の男女共同参画と男女間の暴力に関するアンケート調査報告書概要版

- 高坂 康雅 (2009). 恋愛関係が大学生に及ぼす影響と、交際期間、関係認知との関連
パーソナリティ研究, 17, 144-156.
- 高坂 康雅 (2010). 大学生及びその恋人のアイデンティティと「恋愛関係の影響」と
の関連 発達心理学研究, 21, 182-191.
- 高坂 康雅 (2011). 「恋人を欲しいと思わない青年」の心理的特徴の検討 青年心理学
研究, 23, 147-158.
- 高坂 康雅 (2012). 大学生の恋愛行動経験率の推移 日本心理学会第 76 回大会発表
論文集, 163.
- 高坂 康雅 (2013). 大学生におけるアイデンティティと恋愛関係との因果関係の推定:
恋人のいる大学生に対する 3 波パネル調査 発達心理学研究, 24, 33-41.
- 高坂 康雅 (2016). 日本における心理学的恋愛研究の動向と展望. 和光大学現代人間
学部紀要, 5-17.
- 新村 出 (編) (2008). 広辞苑. 岩波書店
- 京都市男女共同参画推進協会 (2012). デート DV に関する実態調査
- Lee, J. A. (1973). *The colours of love*. Ontario: New Press.
- Lewis, S. & Fremouw, W. (2001). Dating violence: A critical review of the literature.
Clinical Psychology Review, 21, 105-127.
- 前田 直樹・長友 真実・田中 陽子・三浦 宏子 (2007). 福祉系大学生における共依存
と心理的健康 九州保健福祉大学研究紀要, 8, 79-87.
- Makepeace, J. M. (1981). Courtship violence among college students. *Family
Relations, 30*, 97-102.
- Malik, S., Sorenson, S. B., & Aneshensel, C. S. (1997). Community and dating
violence among adolescents: Perpetration and victimization. *Journal of
adolescent health, 21*, 291-302.
- Marshall, L. L., & Rose, P. (1990). Premarital violence: The impact of family of
origin violence, stress, and reciprocity. *Violence and Victims, 5*, 51-64.
- 松井 豊 (1990). 青年の恋愛行動の構造 心理学評論, 33, 355-370.
- 松野 真・秋山 胖 (2009). 若年層における特定異性間の暴力 (dating violence) に関
する研究——大学生を対象とした dating violence に関する意識・実態について——
生活科学研究, 31, 117-128.

- 松並 知子・青野 篤子・赤澤 淳子・井ノ崎 敦子・上野 淳子 (2012). デート DV の実態と心理的要因—自己愛との関連を中心に— 女性学評論, 26, 43-65.
- 三重県男女共同参画センター (2013). 「デート DV」に関するアンケート調査報告書
- 水澤 都加佐 (2016). あなたのためなら死んでもいいわ 春秋社
- 宮口 幸治 (2019). ケーキの切れない非行少年たち 新潮社
- 森 秀美・長田 久雄 (2007). 看護師—患者関係における共依存傾向とその影響についての検討 健康心理学研究, 20, 61-68.
- 村上 達也 (2009). 児童版アタッチメント強度尺度の作成日本パーソナリティ心理学会大会発表論文集, 18, 100-101.
- 村山 航 (2009). 媒介分析・マルチレベル媒介分析 Retrieved from <http://koumurayama.com/koujapanese/mediation.pdf> (2018年8月17日)
- 名古屋学院大学デート DV 研究会 (2010). 「大学生におけるデート DV の実態と暴力に対する認識調査」調査報告書
- 名古屋市男女平等参画推進センター (2009). デート DV に関する調査報告書
- 内閣府 (2000). 男女間における暴力に関する調査 Retrieved from http://www.gender.go.jp/policy/no_violence/e-vaw/chousa/09.html (2018年6月9日)
- 内閣府 (2003). 男女間における暴力に関する調査 Retrieved from http://www.gender.go.jp/policy/no_violence/e-vaw/chousa/05.html (2018年6月9日)
- 内閣府 (2006). 男女間における暴力に関する調査 Retrieved from http://www.gender.go.jp/policy/no_violence/e-vaw/chousa/h1804top.html (2018年6月9日)
- 内閣府 (2009). 男女間における暴力に関する調査 Retrieved from http://www.gender.go.jp/policy/no_violence/e-vaw/chousa/h2103top.html (2018年6月9日)
- 内閣府 (2012). 男女間における暴力に関する調査 Retrieved from http://www.gender.go.jp/policy/no_violence/evaw/chousa/h24_boryoku_cyousa.html (2018年6月9日)
- 内閣府 (2015). 男女間における暴力に関する調査 Retrieved from

- http://www.gender.go.jp/policy/no_violence/evaw/chousa/h26_boryoku_cyousa.html (2018年6月9日)
- 内閣府 (2018). 男女間における暴力に関する調査 Retrieved from http://www.gender.go.jp/policy/no_violence/evaw/chousa/h29_boryoku_cyousa.html (2018年6月9日)
- 中尾 達馬・加藤 和生 (2004). 成人愛着スタイル尺度 (ECR) の日本語版作成の試み 心理学研究, 75, 154-159.
- 難波 貴代・北山 秋雄 (2006). 共依存関係にもとづく高齢者虐待への看護介入 日本保健福祉学会誌, 12, 25-32.
- 難波 貴代・北山 秋雄 (2007). 共依存関係にある主介護者と被介護高齢者間の高齢者虐待に対する看護介入 アディクション看護, 4, 1-10.
- 日本 DV 防止・情報センター (2008). デート DV の被害者に関する調査報告書
- 西村 香・森田 展彰 (2013). 大学生における支配的恋愛関係チェックリストの作成, および信頼性, 妥当性の検討 アディクションと家族, 29, 244-253.
- 西尾 和美 (2000). コ・ディペンデンス 〈共依存症〉からの回復 ヘルスワーク協会
- 野口 康彦 (2009). 大学生カップル間におけるデート DV と共依存に関する一検討 山梨英和大学紀要, 8, 105-113.
- 越智 啓太・長沼 里美・甲斐 恵利奈 (2014). 大学生に対するデートバイオレンス・ハラスメント尺度の作成. 法政大学文学部紀要, 69, 63-74.
- 緒方 明 (2005). アダルトチルドレンと共依存 誠信書房
- O'leary, K. D., Barling, J., Arias, I., Rosenbaum, A., Malone, J., & Tyree, A. (1989). Prevalence and stability of physical aggression between spouses: a longitudinal analysis. *Journal of consulting and Clinical Psychology*, 57, 263-268.
- Parker, G. A. (1974). Courtship persistence and female-guarding as male time investment strategies. *Behaviour*, 48, 157-184.
- Rusbult, C. E. (1983). A longitudinal test of the investment model: The development (and deterioration) of satisfaction and commitment in heterosexual involvements. *Journal of Personality and Social Psychology*, 45, 101-117.
- Rusbult, C. E., & Martz, J. M. (1995). Remaining in an abusive relationship: An

- investment model analysis of nonvoluntary dependence. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 21, 558-571.
- さいたま市 (2010). 若年層における交際相手からの暴力 (デート DV) に関する意識・実態調査報告書
- 斎藤 学 (2003). 家族依存症 新潮文庫
- 榊原 佐和子 (2011). 大学生のデートバイオレンス(交際関係における暴力)被害経験と暴力受容態度・性役割態度・精神的健康との関連 明治学院大学大学院心理学研究科心理学専攻紀要, 16, 49-64.
- Shackelford, T. K., & Mouzos, J. (2005). Partner killing by men in cohabiting and marital relationships: a comparative, cross-national analysis of data from Australia and the United States. *Journal of interpersonal violence*, 20, 1310-1324.
- Shackelford, T. K., Goetz, A. T., Buss, D. M., Euler, H. A., & Hoier, S. (2005). When we hurt the ones we love: Predicting violence against women from men's mate retention. *Personal Relationships*, 12, 447-463.
- Shackelford, T. K., Goetz, A. T., Guta, F. E., & Schmitt, D. P. (2006). Mate guarding and frequent in-pair copulation in humans. *Human Nature: An Interdisciplinary Biosocial Perspective*, 17, 239-252.
- Shaver, P. R., & Hazan, C. (1988). A biased overview of the study of love. *Journal of Social and Personal relationships*, 5, 473-501.
- Shorey, R. C., Cornelius, T. L., & Bell, K. M. (2008). A critical review of theoretical frameworks for dating violence: Comparing the dating and marital fields. *Aggression and Violent Behavior*, 13, 185-194.
- 園田 直子・片岡 祥 (2008). 展望のある関係・ない関係：関係版時間的展望体験尺度 (Experimental Time Perspective Scale in Close Relationships : ETPS-CR) の作成. 久留米大学心理学研究, 7, 1-10.
- 相馬 敏彦・福島 治・坂口 菊恵 (2006). 親密な関係において暴力をふるう男女の愛着モデル 日本心理学会第 70 回大会発表論文集, 263.
- 相馬 敏彦・具志堅 伸隆・上田 真由美 (2007). 協調なき非協調に効果なし (2) —配偶者からの間接 的暴力抑制に及ぼす協調的・非協調的志向性の 交互作用効果

- 第48回日本社会心理学会大会発表論文集, 206-207.
- Stafford, L., & Canary, D. J. (2006). Equity and interdependence as predictors of relational maintenance strategies. *The Journal of Family Communication, 6*, 227-254.
- Starratt, V. G., & Shackelford, T. K. (2012). He said, she said: Men's reports of mate value and mate retention behaviors in intimate relationships. *Personality and Individual Differences, 53*, 459-462.
- Sternberg, R. J. (1986). A triangular theory of love. *Psychological Review, 93*, 119-135.
- Straus, M. A. (1979). Measuring intrafamily conflict and violence: The conflict tactics (CT) scales. *Journal of Marriage and the Family, 41*, 75-88.
- Straus, M. A. (2008). Dominance and symmetry in partner violence by male and female university students in 32 nations. *Children and youth services review, 30*, 252-275.
- Straus, M. A., Hamby, S. L., Boney-McCoy, S., & Sugarman, D. B. (1996). The revised conflict tactics scales (CTS2) development and preliminary psychometric data. *Journal of family issues, 17*, 283-316.
- Sugarman, D. B., & Hotaling, G. T. (1989). Violent men in intimate relationships: An analysis of risk markers. *Journal of Applied Social Psychology, 19*, 1034-1048.
- 鈴木 由美 (2007). モラル・ハラスメントに関する研究 (第一報) ——看護職がみる夫婦間の精神的暴力—— 日本ウーマンズヘルス学会, *6*, 47-55.
- 立脇 洋介・松井 豊 (2014). 恋愛 平木典子・稲垣佳世子・河合優年・斉藤こずゑ・高橋恵子・山 祐嗣 (編) 児童心理学の進歩
- 寺島 瞳・宇井 美代子・宮前 淳子・竹澤 みどり・松井めぐみ (2013). 大学生におけるデート DV の実態の把握——被害者の対処および別れない理由の検討—— 筑波大学心理学研究, *45*, 113-120.
- 東京都生活文化局 (2013). 若年層における交際相手からの暴力に関する調査報告書
- 富安 俊子・鈴井 江三子 (2011). 青年期男女におけるデートバイオレンスの認識と性差間の相違 母性衛生, *51*, 626-632.

- Trinkle, S. J. & Bartholomew, K. (1997). Hierarchies of attachment relationships in young adulthood. *Journal of Social and Personal Relationships*, 14, 603-625.
- 上野 淳子 (2014). デート DV 研究の問題点 四天王寺大学紀要, 57, 195-206.
- 上野 淳子・松並 知子・青野 篤子・赤澤 淳子・井ノ崎 敦子 (2012). 大学生の性に対する態度がデート DV に及ぼす影響 四天王寺大学紀要, 53, 111-122.
- 良 香織・小堀 尋香 (2013). デート DV の現状と課題—大学生を対象とした調査から— 宇都宮大学教育学部紀要第1部, 63, 211-219.
- 宇都宮市市民生活部男女共同参画課 (2010). デート DV に関する中学生への意識調査報告書
- Waters, E., Posada, G., Crowell, J., & Lay, K. L. (1993). Is attachment theory ready to contribute to our understanding of disruptive behavior problems? *Development and Psychopathology*, 5, 215-224.
- Wekerle, C., & Wolfe, D. A. (1999). Dating violence in mid-adolescence: Theory, significance, and emerging prevention initiatives. *Clinical Psychology Review*, 19, 435-456.
- White, J. W., & Koss, M. P. (1991). Courtship violence: incidence in a national sample of higher education students. *Violence and Victims*, 6, 247-256.
- Zeifman, D., & Hazan, C. (2000). A process models of adult attachment formation. In W. Ickes & S. Duck(Eds.), *The social psychology of personal relationships*. Chichester: John Wiley & Sons.
- 山田 典子・山田 真司 (2010). 高校生の Dating violence の特性と課題. 母性衛生, 51, 311-319.
- 山形県 (2012). 平成 23 年度デート DV 実態調査報告書
- 横浜市市民活力推進局男女共同参画推進課 (2008). デート DV に関する意識・実態調査報告書
- Yokoi Saori, Ansai Satoshi, Kinoshita Masato, Naruse Kiyoshi, Kamei Yasuhiro, Larry J. Young, Teruhiro Okuyama & Hideaki Takeuchi. Mate-guarding behavior enhances male reproductive success via familiarization with mating partners in medaka fish. *Frontiers in Zoology*, 13, 21.

付 録

各章と対応する論文リスト

第1章～第3章

書きおろし

第4章 研究1及び研究2

片岡 祥・園田 直子 (2014). 恋人への分離不安と愛情及び交際期間が恋人支配行動に及ぼす影響 パーソナリティ研究, 23, 13–28. [査読有り]

片岡 祥・園田 直子 (2016a). 2つの恋人支配行動の生起メカニズムの違い 応用心理学研究, 42, 40–47. [査読有り]

第5章 研究3及び研究4

片岡 祥・園田 直子 (2016b). 恋人支配行動が恋愛関係の良好さに及ぼす影響 応用心理学研究, 42, 130–139. [査読有り]

書き下ろし

その他本論文の作成にあたって引用した自論文のリスト

- 片岡 祥・園田 直子 (2008). 青年期におけるアタッチメントスタイルの違いと恋人に対する依存との関連について 久留米大学心理学研究, 7, 11-18. [査読無し]
- 片岡 祥・園田 直子 (2010). 青年期に起こる愛着対象の移行における親の位置づけ 久留米大学心理学研究, 9, 1-8. [査読無し]
- 片岡 祥・園田 直子 (2011). 恋愛関係が青年の発達に及ぼす影響——多次元自我同一性尺度と恋人の有無・交際期間・愛情との関連から—— 久留米大学心理学研究, 10, 104-111. [査読無し]
- 片岡 祥・園田 直子 (2014). 青年期に愛着対象が「いない」ということ——愛着対象の移行という観点から—— 比較文化研究, 48, 15-24. [査読有り]
- 園田 直子・片岡 祥 (2008). 展望のある関係・ない関係—関係版時間的展望体験尺度 (Experimental Time Perspective Scale in Close Relationships: ETPS-CR)—の作成 久留米大学文学部紀要, 7, 1-10. [査読無し]

謝 辞

本論文は久留米大学大学院院生として過ごした6年間、久留米大学比較文化研究所研究員であった2年間、西南学院大学人間科学部心理学科で助手として務めた4年間に実施した研究をまとめたものです。研究の遂行と論文の執筆を行うにあたり、とても多くの方々に多大なご支援を受けました。

指導教官の久留米大学文学部の園田直子教授には大学1年生の初年次教育でのグループ担当教員から始まり、大学3・4年生での指導教官として卒業論文の指導、修士課程での指導教官として修士論文の指導をして頂きました。博士課程以降も指導教官として研究の指導をして頂き、かれこれ18年間という長い間大変お世話になりました。そして、園田直子教授の指導により、査読論文6本、他の論文6本、科学研究費の獲得という業績をあげることができました。

園田直子教授には研究指導だけでなく、議論を行う中で学問や研究の知的な楽しさと奥深さを学ばせて頂きました。これは研究で壁にぶつかった時によく思い出されることです。出来の悪い私がかようなか投げ出さずに取り組んでくることができたのも、学問や研究に関する肯定的な経験をさせて頂いたからだと思います。また、人や世界に対する捉え方や考え方など人生を生きていく上で多くの大切なことを学び、様々な悩みや不安についても常に対話を欠かさずにサポートして頂き、精神的な拠り所として支えて頂きました。指導教官が園田直子教授で本当に良かったと思っています。心よりお礼申し上げます。

副査読者の安永悟教授と徳田智代教授には、本論文全般において多くの有益なご助言を頂きました。特に概念と言葉の取り扱いや、全体の構成や論の展開の仕方について何度もコメントを頂き大いに学ばせて頂きました。ここまで丁寧に見てもらえたことで、私自身の研究能力も非常に高まったように感じています。お忙しい中、膨大な時間を割いて頂き、本当に感謝してもしきれない気持ちでいっぱいです。

また、木藤恒夫教授には園田直子教授が内地留学の際に、研究指導をして頂きました。原口雅浩教授には大学院時代より、データ解析について数多くのご助言とご指導を頂きました。謹んで感謝を申し上げます。

そして、大学院で同じ日々を過ごし切磋琢磨した皆様、調査に協力して頂いた参加者の皆様のおかげで本論文を完成させることができました。本当にありがとうございます。

ました。

また、本論文の一部は科学研究費補助金（若手研究(B), 課題番号：15K21556) の支援を受けて遂行することができました。この場を借りて感謝致します。

最後となりましたが、私を暖かく見守ってくれた家族に感謝申し上げます。大学進学頃から将来展望があまり見えずふらふらしていた時も、修士課程に進学する時も、博士課程に進学する時も、いつも自由を与えてもらってきました。家族から反対される人、金銭的な問題で断念する人が沢山いる中で、私は幸せな環境を与えてもらっていきただけだと今になってわかります。どうかこうにか大学教員の職を得て、無事に博士号も取ることができました。

博士号を取得することは研究者としての集大成でもあり、新たな出発点でもあります。今後ともたゆまぬ研鑽を続け、研究者として精進してまいりたいと思います。皆様本当にありがとうございました。そしてこれからもどうぞよろしくお願いいたします。